筑波大学博士（日本語教育学）学位請求論文

日本語学習者の誤用からみる日中認知の異同

―イメージ・スキーマと概念メタファーを中心に―

李　　文　鑫

2018 年度

目　　次

第 1 章　研究の背景と目的 1
1.1　研究背景 1
1.2　本論文の主要概念と理論的枠組み 2
1.3　本論文で扱う誤用 5
1.4　本論文の構成 9
第 2 章　先行研究及び研究課題 11
2.1　イメージ・スキーマに関する先行研究 11
2.1.1　【力】スキーマ 13
2.1.2　【容器】スキーマ 23
2.2　概念メタファーに関する先行研究 38
2.2.1　メタファー（隠喩）、メトニミー（換喩）、シネクドキ（提喩） 38
2.2.2　概念メタファーの定義 40
2.2.3　メタファーの種類 41
2.2.4　メタファーの認定手順 44
2.3　コロケーションに関する先行研究 49
2.3.1　コロケーションの定義と構造 49
2.3.2　概念メタファーとコロケーションとの関係 52
2.3.3　メタフォリカル・コンピテンスと概念誤用 57
2.4　研究課題と研究方法 60
2.4.1　日本語コーパス 61
2.4.2　中国語コーパス 63
2.4.3　学習者コーパス 65
第 3 章　イメージ・スキーマに関する日中の異同 66
3.1　【力】スキーマに関する日中の異同 66
3.1.1　RQ1：「重い」に関する「直訳」と「非直訳」の誤用 67
3.1.2　RQ2：身体動作（深部感覚、皮膚感覚）における日中の異同 71
3.1.3　RQ3：五感（味覚、嗅覚、視覚、聴覚）における日中の異同 77
3.1.4　RQ4：内部感覚（内臓感覚）における日中の異同 81

3.1.5　本節のまとめ 83
3.2　【容器】スキーマに関する日中の異同 84
3.2.1　RQ1：「深い」に関する「直訳」と「非直訳」の誤用 84
3.2.2　RQ2：＜言葉＞メタファーの【容器】スキーマの依存度 91
3.2.3　RQ3：＜思考＞メタファーの【容器】スキーマの依存度 95
3.2.4　考察：なぜ中国語は【容器】スキーマの依存度が高いのか 96
3.2.5　本節のまとめ 99
3.3　本章のまとめ 100
第 4 章　概念メタファーの認定手順−＜情報＞を例に 102
4.1　研究目的 102
4.2　メタファー認定手順の提案 102
4.2.1　Step1 メタファーの認定手順 102
4.2.2　Step2 概念メタファーの認定手順 105
4.2.3　Step3 メタファーの種類の認定手順 106
4.2.4　メタファーの認定手順の適用範囲 107
4.3　研究データ 109
4.4　分析と結果 110
4.4.1　＜情報は食べ物＞の認定結果 110
4.4.2　＜情報は水＞の認定結果 116
4.5　考察 121
4.5.1　＜情報は食べ物＞と＜情報は水＞の比較 121
4.5.2　メタファーの種類と語義の関係 124
4.6　本章のまとめ 127
第 5 章　＜思考＞メタファーに関する日中の異同 129
5.1　研究目的 129
5.2　結果と分析 129
5.2.1　RQ1：＜思考＞メタファーに関する「直訳」と「非直訳」の誤用 129
5.2.2　RQ2：＜思考＞メタファーに関する日中の異同 131
5.3　本章のまとめ 140

第 6 章　＜興味＞メタファーに関する日中の異同 141
6.1　研究目的 141
6.2　結果と分析 142
6.2.1　RQ1：＜興味＞メタファーに関する「直訳」と「非直訳」の誤用 142
6.2.2　RQ2：＜興味＞メタファーに関する日中の異同 143
6.3　本章のまとめ 150
第 7 章　終章 151
7.1　本研究のまとめ 151
7.1.1　課題 1：イメージ・スキーマにおける日中の異同（第 3 章） 152
7.1.2　課題 2：概念メタファーの認定手順（第 4 章） 153
7.1.3　課題 3：概念メタファーにおける日中の異同（第 5、6 章） 156
7.2　本研究の意義 157
7.2.1　コロケーションの習得モデル 157
7.2.2　言語転移（Linguistic Transfer）と概念転移（Conceptual Transfer） 159
7.2.3　概念メタファーの認定手順 163
7.3　今後の課題 163
博士論文に関わる研究発表活動（関連章） 165
参　考　文　献 167
謝　　辞 175

図　一　覧

図 1-1　概念体系の普遍性と固有性（山梨 2000：157）..... 2
図 1-2　感情言語の階層モデル（楠見・米田 2007：2、引用者により一部修正）..... 4
図 1-3　母語の「直訳」と「非直訳」の誤用と日中の認知の異同との関係..... 9
図 2-1　The basic steady-state force-dynamic patterns（Talmly 1988：55）..... 14
図 2-2　【力】スキーマの簡略図（Ikegami 1994：328）..... 15
図 2-3　【容器】スキーマ（山梨 2000：147）..... 24
図 2-4　異なる母語話者の形容詞使用傾向（一億語換算）..... 32
図 2-5　「深い」と共起する名詞（ワードクラウドによる）..... 34
図 2-6　中国語の“深”と“强”と共起する名詞..... 35
図 2-7　日本語の「深い」と「強い」と共起する名詞..... 35
図 2-8　身体部位、言葉、思考との関係（韓 2014、引用者によって作図）..... 36
図 2-9　三者関係（瀬戸 1997：196 に基づき、引用者により一部修正）..... 39
図 2-10　＜LIFE IS A JOURNEY＞の写像..... 41
図 2-11　＜思考＞メタファーのイメージ・スキーマ（Yu 2009：106）..... 47
図 2-12　Jiang（2000）L2 語彙習得モデル..... 56
図 2-13　NLT の検索画面..... 62
図 2-14　NLT の検索結果..... 62
図 3-1　中国語“重重地＋V”の上位 10 語（単位：回）..... 74
図 3-2　中国語の“强烈地＋V”の上位 10 語（単位：回）..... 75
図 3-3　「強く」「重く」の使用傾向（単位：回）..... 76
図 3-4　〈重〉と〈強〉の使い分け（日中）..... 77
図 3-5　日本語「強い」「重い」の使用..... 79
図 3-6　中国語“强”“重”の使用..... 80
図 3-7　〈重〉と〈強〉の使用傾向（日中）..... 82
図 3-8　言葉と身体部位の共起頻度（一万語換算）..... 92
図 3-9　言葉と身体・意味の共起頻度（一万語換算）..... 94
図 3-10　思考と身体部位の共起頻度（一万語換算）..... 96
図 3-11　〈重〉〈深〉〈強〉の使用傾向（日中）..... 101

図 4-1　メタファーの種類と語義の関係.....126
図 5-1　＜脳は容器、考えは内容物＞（中）の写像.....134
図 5-2　＜脳は幕、考えは映像＞（中）の写像.....136
図 5-3　＜脳は機械＞（中）の写像.....139
図 5-4　＜頭は機械＞（日）の写像.....140
図 6-1　＜人間は植物＞と＜興味は植物＞との関係.....149
図 7-1　〈重〉〈深〉〈強〉の使用傾向（日中）.....153
図 7-2　メタファーの種類と語義の関係（再掲）.....156
図 7-3　Jiang（2000）L2 語彙習得モデル（再掲）.....158
図 7-4　Jiang（2000：48）.....159
図 7-5　Jarvis ＆ Pavlenko（2008：83）.....159
図 7-6　直訳と概念誤用の関係（概念メタファー）.....160
図 7-7　非直訳と概念誤用の関係（概念メタファー）.....161
図 7-8　直訳（五感）と概念誤用の関係（イメージ・スキーマ）.....162
図 7-9　非直訳（五感）と概念誤用の関係（イメージ・スキーマ）.....162
図 7-10　非直訳（抽象概念）と概念誤用の関係（イメージ・スキーマ）.....162

表　一　覧

表 2-1　力の強さの捉え方と感覚系との関係（日中）.....19
表 2-2　感覚系の分類（菊地 2008：４）.....21
表 2-3　【容器】スキーマの要素と諸説の射程.....27
表 2-4　「深い」と“深”の意義項目（徐 2009：3）.....29
表 2-5　形容詞出現頻度（一億語換算）.....31
表 2-6　異なる母語話者の日本語形容詞の産出頻度の差.....32
表 2-7　誤用形容詞コロケーションの頻度.....33
表 2-8　言語表現の認定と分類（Deignan 2005、渡辺他 2010 の翻訳を参考）.....43
表 2-9　中国語における＜思考＞メタファーの体系（韓 2014：138）.....47
表 2-10　語と語の結びつきと意味の慣習化との関係.....50
表 2-11　Sub-types of collocation（Cowie ＆ Howarth 1996）.....50
表 2-12　日本語書き言葉コーパス一覧.....61
表 2-13　中国語書き言葉コーパス一覧.....63
表 2-14　日本語学習者コーパス一覧.....64
表 3-1　力の強さの捉え方と外部感覚・内部感覚との関係（日中）.....66
表 3-2　「重い」に関する学習者の誤用（1）－ 身体動作・五感.....68
表 3-3　「重い」に関する学習者の誤用（2）－ 思考、感情、抽象概念.....70
表 3-4　調査項目.....72
表 3-5　深部感覚・皮膚感覚における〈重〉と〈強〉の使い分け（日中）.....74
表 3-6　五感における〈重〉と〈強〉の使い分け（日中）.....81
表 3-7　内臓感覚における〈重〉と〈強〉の使い分け（日中）.....81
表 3-8　力の強さの捉え方と外部感覚・内部感覚との関係（日中）.....82
表 3-9　「深い」に関する学習者の誤用.....85
表 4-1　メタファーの認定例.....104
表 4-2　データの概要.....109
表 4-3　＜情報は食べ物＞の共起語情報及びメタファーの分類.....113
表 4-4　＜情報は水＞の共起語情報及びメタファーの分類.....118
表 4-5　メタファー表現の出現頻度及びメタファーの種類.....123

表 4-6　多義と痕跡的多義の例 125
表 5-1　＜思考＞メタファーに関する学習者の誤用 130
表 5-2　＜思考＞メタファーの日中の異同 － その（1） 136
表 5-3　＜思考＞メタファーの日中の異同 － その（2） 140
表 6-1　＜興味＞メタファーに関する学習者の誤用 142
表 7-1　力の強さの捉え方と外部感覚・内部感覚との関係（日中） 152
表 7-2　＜思考＞メタファーの日中の異同 － その（1） 157
表 7-3　＜思考＞メタファーの日中の異同 － その（2） 157
表 7-4　＜興味＞メタファーの日中の異同 157

凡　　例

用語の記号

「　」：　本論文で用いる日本語の専門用語、引用する言葉及び特別に強調する言葉はすべて「　」で示す。

“　”：　本論文で用いる中国語の専門用語、引用する中国語はすべて“　”で示す。

＜　＞：　本研究で用いる概念メタファー、目標領域、起点領域はすべて＜＞で示す。

【　】：　本研究で用いるイメージ・スキーマはすべて【　】で示す。

用例の記号

本論文では、用例は特に断らない限り、いずれもコーパスから抽出し、出典を表記する。出典の無表記の場合、筆者による作例を意味する。

（　）　用例の前の括弧に入れた番号は章ごとに改める。用例の後の括弧は出典を示す。

（　）　中国語の用例の場合、日本語訳を示す。

＿＿　用例・引用中の下線は（特に断らない限り）筆者によるものである。

*　用例が非文法的であることを示す。

??　用例がかなり不自然であることを示す。

?　用例がやや不自然であるが、意味が通じる。

○　用例が自然であることを示す

第１章　研究の背景と目的

1.1　研究背景

第二言語習得研究（SLA）においては、学習者のデータと母語話者のデータの比較はよくある研究手法である。1940～1950 年代、Lado（1957）を始めとしての「対照研究仮説」（Contrastive Analysis Hypothesis、CAH）は、学習者の誤用はすべて母語によって引き起こされるという考えに基づいている。そのため、学習者の誤用が問題視されて、できるだけなくす方向に研究者が努力してきた。一方、Corder（1967）は、学習者の誤りを否定せず、誤りは学習が進んでいる証であるとポジティブに捉えている。そして、第二言語習得理論は「誤用分析」（Error Analysis、EA）に展開した。

Schachter（1974）は、学習者が自信のない学習者項目の使用を回避する傾向があることを指摘し、誤用だけでは学習者の習得状況を把握することができないと主張した。その後、学習者の誤用だけではなく、正用を含めて学習者の使う言語の全体像を研究する「中間言語仮説」（Interlanguage Hypothesis、ILH）へ発展した。Selinker（1972）は、学習者の中間言語（IL）は母語（L1）、目標言語（L2）と異なり、独自の言語体系を持っていることを主張した。Selinker の中間言語理論はその後盛んに研究されているが、学習者の誤用を分析する際に、直接的に L1 に結びつく場合、誤用の原因は母語の負転移と結論づけられ、L2 で説明できない場合、学習者の IL であると片付けられる傾向がある。

白川（2007）は、誤用をめぐる研究は「対照研究」から、「誤用分析」、「中間言語」の三段階を経て、対照研究の欠点は母語の転移を過大評価されたことであるとした。しかし、中間言語は、先行研究である対照分析を否定して自らを正当化しようするあまり、母語の転移を必要以上に過小評価していると指摘した。また、大規模データの収集が難しく、データの入力・処理には時間がかかるといった難点があるため、学習者の産出から学習者の中間言語の全体像を把握することは容易ではない（大関 2017）。2000 年代以降は、様々な学習者コーパスの構築と公開に伴い、「対照中間言語分析」（Contrastive Interlanguage Analysis、CIA）[1]や「コンピューター支援による誤用分析」

[1] 「中間言語対照分析」とも呼ばれることがある。

（Computer-aided Error Analysis、CEA）などの手法を援用した研究が盛んに行われるようになった。

また、認知言語学に関する理論や研究成果が広く知られることによって、研究者たちが学習者の誤用を単なる文法、語彙レベルの L1 と L2 の違いによって生じるものとして捉えるのではなく、L1 と L2 の認知の違いによって生じたものとして考えるようになった（Jarvis & Pavlenko 2008）。

本研究では、認知言語学とコーパス言語学の知見を生かし、学習者の誤用に基づき、日本語と中国語の認知の異同を明らかにすることを目的とする。

1.2　本論文の主要概念と理論的枠組み

言葉は、形式と意味の対応からなる自律的な記号系の一種として理解されているが、外界に対する人間の主観的な認知モード（特に、空間認知や身体的な経験に関わる主体の認知モード）を無視して、言葉の意味を理解していくことは不可能である（山梨 2000）。つまり、認知主体が人間の主観的経験を通して、外部世界を記述するときに現れる言語間の異同は両言語の認知の違いと見なすことができる。

また、言語の形式と意味は、外部世界の知覚、経験を基盤とする様々なイメージ・スキーマによって動機づけられている（山梨 2000）。山梨（2000）は、図 1-1 のように、人間の具体的な身体経験領域→イメージ→イメージ・スキーマ→概念体系の関係を示している。概念体系の形成は普遍的な「身体的基盤」と固有的な「社会・文化的視点」の両方に関わっている。

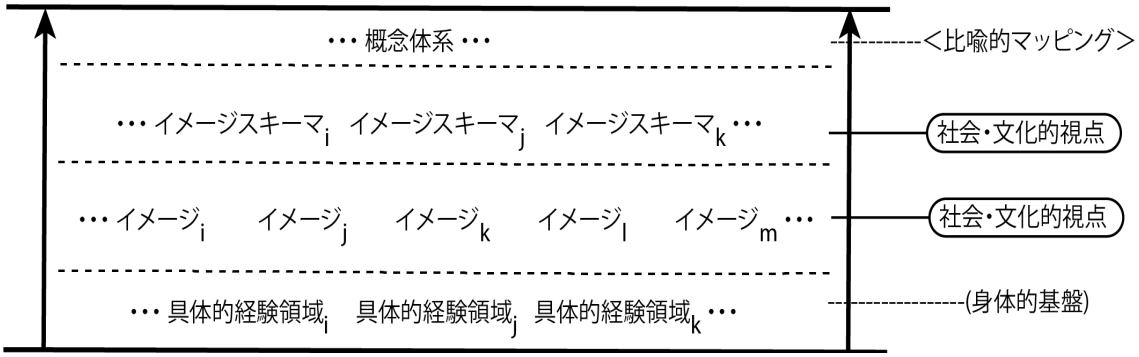

図 1-1　概念体系の普遍性と固有性[2]（山梨 2000：157）

[2] 図 1-1 の命名は引用者によるものである。

山梨（2000）は、外界との相互作用にかかわる主体の「具体的経験領域」は、空間認知にかかわるドメイン（上・下；前・後；左・右など）、体感にかかわるドメイン（重・軽、緊・緩）、五感にかかわるドメイン（明・暗、甘・辛・苦など）、運動感覚にかかわるドメイン（動・静；早・遅など）を区別している。これらの経験のドメインは、部分的に重なりあっている。例えば、体感にかかわる経験の一部は、五感のドメインにおける触覚の経験の一部である。さらに、外部世界に対する理解は具体的な身体経験を介するだけでなく、身体経験によって作られた「イメージ」を介して、抽象的な対象を理解していくことも可能である。人間には、具象的なイメージのレベルからより抽象的なイメージの認知図式、即ち「イメージ・スキーマ」（Image Schema）を作り上げていく能力が備わっている。イメージ・スキーマは人間が日常生活の中で繰り返し行われている行動（身体経験）から生まれている。人間はこれらのイメージ・スキーマを用いて、周りの世界を理解し表現している。言語学の分野で提示されてきているイメージ・スキーマの典型例は、【空間】スキーマ、【線と経路】スキーマ、【容器】スキーマ、【力】スキーマ、【個体・連続体】スキーマ等がある（Lakoff ＆ Johnson 1980；Johnson 1987；Clausner ＆ Croft 1999；Talmy 1988、2000；池上 2007；山梨 2000）。これらのイメージ・スキーマは「具体的経験領域」と「概念体系」を結びつけて考察していく際に重要な役割を果たしている。

山梨（2000）は、これまでの研究では、どの種類のスキーマが言語、文化を超えた普遍的な特徴を持ち、どの種類のスキーマが個別の言語、文化を特徴づける固有のスキーマを構成しているかは明らかにされていないと指摘した。本研究では、【力】スキーマと【容器】スキーマの日中の異同をめぐり、身体性を関連しながら検討する。

また、認知言語学の中の重要な一分野としての概念メタファー理論（Conceptual Metaphor Theory）では、メタファーの本質は、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を理解するとされる（Lakoff ＆ Johnson 1980）。イメージ・スキーマは概念メタファー理論において非常に重要な概念の一つである。Lakoff（1993）では、イメージ・スキーマとメタファーの関係を以下のように述べている。

a. Metaphorical mappings preserve the cognitive topology（that is, the image-schema structure） of the source domain,
b. in a way consistent with the inherent structure of the target domain.

即ち、メタファーでは目標領域で矛盾がない限り、起点領域から目標領域へイメージ・スキーマが写像される（鍋島 2011）。具体的な例を見てみよう。

(1) 新しい人生の出発点に立つ。
(2) 人生の交差点には信号も標識もない。
(3) 人生は終点が見えない旅である。

(1) ～ (3) では、我々は「旅」という具体的な概念を用いて、「人生」という抽象的な概念を理解する際、旅の構造としての「出発点」「交差点」「終点」を、それぞれ人生の中に起きる出来事に対応づけ、写像している。この写像は【線と経路】スキーマによって支えられている。(1) ～ (3) は<LIFE IS A JOURNEY>という概念メタファーに基づいて生まれたメタファー表現である。

楠見・米田（2007） は、感情の言語表現における階層モデルを図 1-2 のように示している。楠見・米田（2007）は、感情の言語表現とそれを支える知識が、主に「感覚・運動的入力」と「社会・文化的入力」から生まれると述べている。

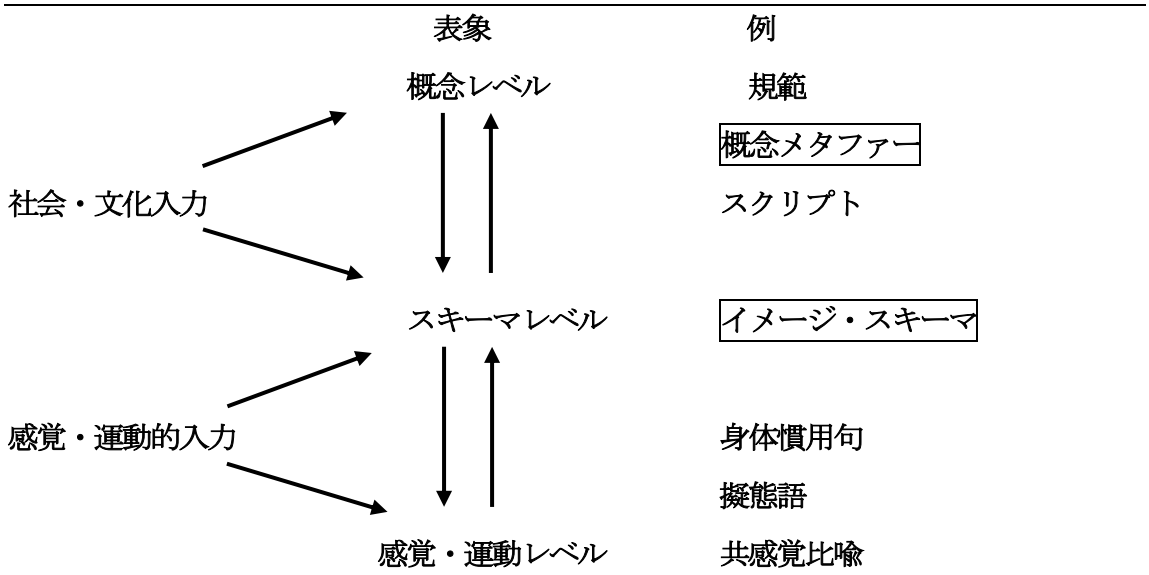

図 1-2　感情言語の階層モデル（楠見・米田 2007：2、引用者により一部修正[3]）

[3] 本論文に取り上げる主要概念である「イメージ・スキーマ」、「概念メタファー」を視覚化しやすいために、囲み線を入れた。

感情経験から言語表現を生成するための表象の階層として、主に①身体的な感覚・運動入力の影響を受ける「感覚・運動レベル」、②感情に関する知識の影響を受ける「概念レベル」、③両者の影響を受けるその中間に位置する「スキーマレベル」と設定されている。

楠見・米田（2007）は、イメージ・スキーマと概念メタファーの関係を次のように述べている。日本語の中の「怒り」に関する表現として、「喜ぶが溢れる」は【容器】スキーマによって支えられ、「怒りがこみ上げる」は【垂直性】スキーマによって支えられている。これらのイメージ・スキーマは、＜感情は液体＞という概念メタファーに体系的な構造を与え、一貫した比喩表現を生成している。

以上のことから、異なる言語において、概念メタファーはもとより、それを支えるイメージ・スキーマも異なる可能性がある。本論文では、感覚・運動レベル、スキーマレベル、概念レベルにおいて、学習者が産出した誤用に基づき、イメージ・スキーマ、概念メタファーの異同及び第二言語習得への影響を明らかにすることを目的とする。

1.3　本論文で扱う誤用

第二言語習得研究は前世紀半ばから始まったが、コロケーションに着目する習得研究は大分遅れており、しかも発展が遅い（Boers ＆ Webb 2017）。1990 年代に入って、Nattinger ＆ DeCarrico's（1992）と Lewis's（1993、1997、2000）の研究がコロケーションの研究の始まりとして捉えられ、代表的なものである（Boaers ＆ Webb 2018：78）。

近年、様々なコーパスの構築と公開に伴って、コーパスの中で語の出現頻度や語と語の結びつきの結束度をもとに、コロケーションの抽出やコロケーションに関しての習得研究が多数行われている（大曽・滝沢 2003；小野他 2015；李 2016 など）。

Liu（2010）はコロケーションに関する従来の研究を 2 種類に分けている。１つは、コロケーションの定義及びコロケーションの恣意性[4]について論じた研究、もう１つはコロケーションの習得、指導法について論じた研究である。前者はイディオムの扱いや語と語

[4] 日本語訳は筆者による。原文は次のとおりである。the use of the word arbitrary (and its related terms unmotivated and unpredictable) and to what extent they believe collocations are arbitrary（Liu 2010：7）.

の結びつきの程度によってコロケーションを分類する研究である。後者は学習者と母語話者と比べて、コロケーションの識別度、産出の違いについて論じる研究である。前者のコロケーションが恣意性についての捉え方の違いは、後者の指導法に影響を及ぼす。コロケーションを完全に恣意的なものとして捉える研究者は大量のインプットによって習得を促す指導法をとる傾向がある（Webb, Newton ＆ Chang 2013；Szudarski ＆ Carter 2016）。一方、コロケーションを完全に恣意的なものとしては認めず、コーパス認知学の知見を生かし、コロケーションの意味側面を重視する指導法をとる研究者も現れてきた（Kövecses ＆ Szabó 1996；Boers 2000；鐘・井上 2012）。

ここで言う恣意性とは、コロケーションの生成が動機付けられていないことと、推測不可能であることを意味する。コロケーションの恣意性に関して、Liu（2010）は①言語間の恣意性、②言語内の恣意性、③言語処理と言語習得上に現れる恣意性について言及している。

① 言語間の恣意性：例えば、中国語では、雨の強さを表す時、日本語では「雨が強い」が言えるが、中国語では“雨很大（*雨が大きい）”を言う。言語間には恣意性が見てとれる。

② 言語内の恣意性：日本語では、「能力をあげる」が言えるが、「*興味をあげる」が言えないように、言語内でも恣意性が現れる。

③ 言語処理と言語習得上に現れる恣意性：多くの研究者が③を①と②の結合と考えている。まず、我々はコロケーションの各部分を語彙ごとに処理しているよりコロケーションを全体一つのまとまりのチャンクとして処理することが好まれる[5]。次に、言語内の恣意性があるため、語彙の選択に困難をもたらす。特に第二言語を学ぶ学習者にとって、これらの問題は顕著である。

Liu（2010：7）

以上述べたように、コロケーションになる語と語の結びつきが言語間、言語内、言語処理と習得において恣意的であるため、学習者にとってコロケーションの習得が困難だと言

[5] 日本語訳は筆者による。原文は次のとおりである。“This non-generallisability clearly indicates that we meet and store words in the prefabricated chunks upon which the Lexical Approach is based.”（Liu 2010：8）

われてきた（Boers 2000；Liu 2010；Boers ＆ Webb 2017）。そして、コロケーションの誤用のうち、語と語の結びつき（共起）の誤用が最も多く、その原因は母語の「直訳」[6]であることが、これまでの研究で指摘されてきた（曹・仁科 2006a、2006b、2007；小森他 2012；三國他 2015；李 2016 など）。一方で、母語の「直訳」で説明できない「非直訳」[7]の誤用の原因は未だに明らかになっていない。本研究では、コロケーションの語と語の結びつき、つまり共起による誤用に焦点を当てて、日中の認知の異同を明らかにすることを目的とする。例えば、学習者コーパスから以下の誤用例が見られる。以下の誤用例は学習者コーパスから引用したものである。

（4a）皆さんご存じのように、日本人は淡いものが好きです。しかし、カレーは*味が重いです。（直訳）

（4b）大家都知道，日本人喜欢清淡的食物。但是，咖喱的味道很重。

（5a）昨日、わたしの町は*重い雨です。（非直訳）

（5b）昨天，我们镇上下了*很重的雨。

（6a）中国人は人々も*重い故郷情念がありますね。（直訳）

（6b）中国人有很重的思乡情节。

（7a）昔、男をもっと好き*傾向は重いです。（非直訳）

（7b）以前喜欢男性的*倾向更重。

本論文の第 3 章 1 節より

（8a）オランダの*影響を深く受けたのことを教科書で習っていました。（直訳）

（8b）我在教科书中学到（日本）深受荷兰的影响。

（9a）日本への*憧れが深くなっていく自分が、もう一回日本へ行くことを決心した。（非直訳）

（9b）我对日本的*憧憬变深，决定再去日本一次。

本論文の第 3 章 2 節より

（10a）今日の家庭授業は*脳力がかかりすぎた。（直訳）

[6] 本論文では、母語にある語と語の結びつきの誤用を「直訳」と呼ぶ。
[7] 本論文では、母語にない語と語の結びつきの誤用を「非直訳」と呼ぶ。

（10b）今天的家庭作业很费脑力。

（11a）頭はロボット気味ですね。しばらく日記を書いていないので、*頭が錆びになるようでした。（非直訳）

（11b）脑袋像机器一样。很长时间没有写日记了，*头变成锈。

本論文の第 5 章より

（12a）私たちは外国語のドラマや映画や音楽など*興味を培養する。（直訳）

（12b）我们要培养对外语电影电视，音乐等的兴趣。

（13a）外国語の勉強は*興味を抜いてはうまくならないのは、勉強し続ける動力がないからだ。（非直訳）

（13b）*拔除对外语学习的兴趣以至于不能顺利进行是因为没有了持续学习的动力。

本論文の第 6 章より

（4a）、（6a）、（8a）、（10a）、（12a）では、中国語では、“味道重（逐語訳：味-重い）”、“很重的思乡情节（逐語訳：重い-思う-故郷-情念）”、“深受影响（逐語訳：深い-受ける-影響）”、“太费脑力（逐語訳：とても-かかる-脳力）”、“培养兴趣（逐語訳：培養する-興味）”という言い方があるが、（5a）、（7a）、（9a）、（11a）、（13a）に対応する中国語（5b）、（7b）、（9b）、（11b）、（13b）のような言い方はない。

本研究ではコロケーションが恣意的なものではなく、（1a）～（13a）のような「直訳」と「非直訳」の誤用例はイメージ・スキーマと概念メタファーによって支えられていることを主張していく。また、これらのコロケーションの「直訳」と「非直訳」誤用に基づき、日中の認知の異同を明らかにする。

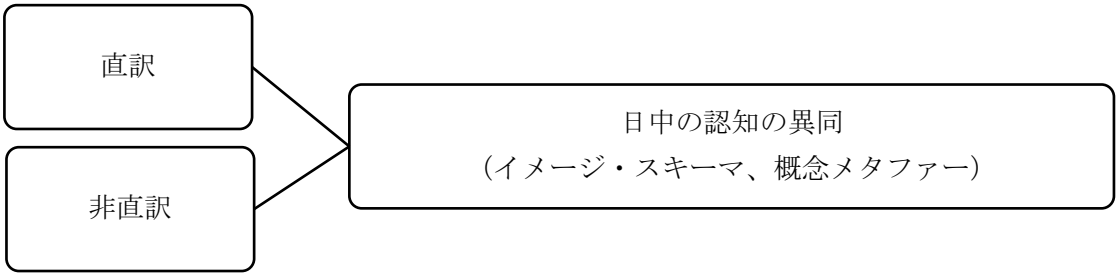

図 1-3　母語の「直訳」と「非直訳」の誤用と日中の認知の異同との関係

1.4　本論文の構成

第 1 章では、本研究の研究背景、理論的枠組み及び本研究で扱う誤用について述べてきた。

第 2 章では、イメージ・スキーマ、概念メタファー、コロケーションに関する先行研究を紹介する。2.1 節では、【力】スキーマ、【容器】スキーマ及びそれと関連する日中形容詞〈重〉、〈深〉の先行研究を紹介し、先行研究の問題点を指摘する。2.2 節では、概念メタファーの定義と種類を紹介し、概念メタファーの認定手続きが曖昧なことを指摘する。また、＜思考＞メタファーに関する先行研究を紹介し、その問題点を指摘する。2.3 節では、コロケーションの定義を紹介し、概念メタファーとコロケーションの関係を述べた上で、コロケーションの誤用のうち、「非直訳」の誤用の原因はいまだに解決できないことを指摘する。2.4 節では、以上のことを踏まえ、本研究の研究課題と研究方法を示す。

第 3 章では、【力】スキーマ及び【容器】スキーマをめぐって、日中イメージ・スキーマの異同を明らかにする。3.1 節では、まず、学習者コーパスから「重い」に関するコロケーションの誤用を「身体動作・五感」「思考・感情・抽象概念」に分けて提示する。次に、日本語コーパスと中国語コーパスから用例を提示し、【力】スキーマの日中異同を論じる。3.2 節では、まず、学習者コーパスから「深い」に関するコロケーションの誤用を提示する。次に、日本語コーパスと中国語コーパスから用例を提示し、【容器】スキーマの日中異同を論じる。

第 4 章では、概念メタファーの認定基準を考案し、実際のコーパスデータに基づき、＜情報＞を目標領域とする概念メタファーを検討し、認定基準の実用性と適用範囲を論じる。

第 5 章では、第 2 章で指摘した＜思考＞メタファーの問題を踏まえ、＜思考＞メタファーの日中の異同を明らかにする。まず、学習者コーパスから＜思考＞メタファーに関する誤用を抽出する。次に、日本語コーパスと中国語コーパスから用例を提示し、＜思考＞メタファーの写像の日中の異同を明らかにする。

第 6 章では、まず、学習者コーパスから＜興味＞メタファーに関する誤用を抽出する。次に、日本語コーパスと中国語コーパスから用例を提示し、＜興味＞メタファーの日中の異同を明らかにする。

第 7 章では、第 3 章から第 6 章で得られた結論について総括する。7.1 節では、課題ごとに本研究の結果をまとめる。7.2 節では、理論面、実践面、教育指導面において、本研究の意義を述べる。7.3 節では、今後の課題を述べる

第 2 章　先行研究及び研究課題

本章では、まず、イメージ・スキーマ、概念メタファーに関する先行研究を概観し、その不足を述べる。次に、コロケーションに関する先行研究を概観し、コロケーションと概念メタファーの関係を述べる。コロケーションの語と語の結びつきの動機付けを明らかにする上で、コロケーションに関する「直訳」と「非直訳」の誤用は日中の認知の違いによるものであるという仮説を立てる。

2.1　イメージ・スキーマに関する先行研究

外部世界に対する理解は具体的な身体経験を介するだけでなく、身体経験によって作られたイメージを介して、抽象的な対象を理解していくこともある。人間には、具象的なイメージのレベルからより抽象的なイメージの認知図式、即ちイメージ・スキーマを作り上げていく能力が備わっている。イメージ・スキーマは我々人間が日常生活の中で繰り返し行われている行動（身体経験）から生まれる。

Johnson（1987：29）では、以下のようにイメージ・スキーマを定義している。イメージ・スキーマとは、これらの動的な秩序づけの活動にそなわる、反復されるパターン、形、規則正しさのことである[1]。これらのパターンは、我々にとって意味ある構造として、主として空間中でなされる身体運動、対象の操作、知覚的相互作用から生まれる。

我々人間はこれらのイメージ・スキーマを用いて、周りの世界を理解し表現している。イメージ・スキーマの典型例として、【空間】スキーマ、【線と経路】スキーマ、【容器】スキーマ、【力】スキーマ、【個体・連続体】スキーマ等が挙げられる（Lakoff ＆ Johnson 1980；Johnson 1987；Clausner ＆ Croft 1999；Talmy 1988；池上 2007；山梨 2000）。

---

[1] 日本語訳は筆者による。原文は次のとおりである。A schema is a recurrent pattern, shape, and regularity in, or of, these ongoing ordering activities. These patterns emerge as meaningful structures for us chiefly at the level of our bodily movements through space, our manipulation of objects, and our perceptual interactions（Johnson1987：29）.菅野・中村（1991）の翻訳による。

左（2007）は、【上・下】スキーマの日中間の異同について分析した。中国語では、“上午・下午（午前・午後）；上周・下周（先週・来週）”のように、時間の流れを【上・下】スキーマで認知している。一方、日本語では“午前・午後；先週・来週”のように、【線と移動】スキーマで認知していることを示した。

王（2012）は，【容器】スキーマと関連する日本語の複合動詞「～こむ」類、「～出す」類と中国語の複合動詞“～进／入”“～出”類を比較し、物理的内部移動と抽象的内部移動を表す時、日本語と中国語は完全に対応していないと判明した。例えば、日本語の「飛び出す」とそれと対応する中国語の“跳出”について、「（×）世界平和といえば、頭の中からすぐ２つの語“戦争”“オリンピック”が飛び出した。（说到世界和平脑袋里一下跳出了两个词：战争，奥运。）」という学習者の誤用例からわかるように、中国語の“～出”、日本語の「～出す」は【容器】スキーマを用いても、その【容器】スキーマが具現化した概念メタファーの概念領域は日中で異なる。中国語では、“脑袋里一下跳出了两个词（頭から言葉が飛び出す）”と言えるが、日本語では、「口から言葉が飛び出す」という表現することがほとんどである。日本語と中国語は身体部位のどこが容器として捉えられているか異なっているのである。

後藤（2018）では、感情名詞と放出動詞（噴出する、溢れる、滲む）の対応関係から、【力】スキーマは＜感情は液体＞メタファー表現の分布を決定づける中心的な動機付け・制約として機能すると述べている。例えば、「喜びが溢れる」、「悲しみが滲む」、「怒りが噴き出す」、「勇気がほとばしる」などが挙げられる。

谷口（2003）は、抽象概念の「理性」と「感情」の写像のイメージ・スキーマにおいて日英両言語にズレがあると指摘している。英語では、（1）～（4）のように、＜RATIONAL IS UP；EMOTIONAL IS DOWN＞（理性的なことは上、感情的なことは下）となるが、日本語では、（5）～（7）のように、＜RATIONAL IS UP＞ではなく、むしろ＜EMOTIONAL IS UP＞（感情的なことは上）となる。

（1）　The discussion fell to the emotional level, but I raised it back up to the rational plane.（議論は感情的レベルに落ちてしまったが、理性的なところまで引き上げて戻した。）

（2）　He couldn’t rise above his emotions.（彼は感情から上に上がれなかった＝理性的になれなかった。）

(3)　She's calm down.（彼女は落ち着いている）

(4)　His tension is always high.（彼は興奮している）

(5)　彼は地に足のついた人だ。

(6)　そのニュースを聞いて、舞い上がってしまった。

(7)　舞台に出て、あがってしまった。

谷口（2003：29）

英語での＜RATIONAL IS UP＞のメタファーは、＜MAN IS UP＞から由来することと考えられる。それは、神とそれに似ている人間を「上」と考える階層的な世界観・自然観に基づいている（谷口 2003）。このように、社会・文化が異なることによってイメージ・スキーマにズレが生じる可能性がある。

2.1.1　【力】スキーマ

本節では、まず、2.1.1.1 では、【力】スキーマに関する先行研究（Talmy 1988、2000；Ikegami 1994）を紹介し、力の強さの捉え方という観点が欠けていることを指摘する。次に、楊（2012）の〈重〉の日中対照研究を 2.1.1.2 で紹介し、身体動作及び五感に関する力の強さの捉え方の結論に不備があることを指摘する。2.1.1.3 では、感覚系の分類を紹介し、身体動作および五感はそれぞれどの感覚系に属するのかを整理する。また、力の強さと関わる感覚系のうち、先行研究で言及していないものがあることと指摘する。

2.1.1.1　Talmy（1988）と Ikegami（1994）

Talmy（1988）のフォース・ダイナミックス理論（以下、ＦＤ理論）では、【力】スキーマを、力関係を構成する 2 要素を Agonist（以下、主動体）、Antagonist（以下、対抗体）に分けて論じている。主動体は本来動きや静止の傾向を持つもので、対抗体は主動体に対して、対抗する力を持つものである。そして、主動体と対抗体の移動方向や本来の状態、力の大きさなどによって、力関係を表す様々なパターン（a）～（d）が見られる。

(a) The ball keeping rolling because of the wind blowing on it .

(b) The shed kept standing despite the gale wind blowing against it.

(c) The ball kept roling despite the stiff grass.

(d) The log kept lying on the incline because of the ridge there.

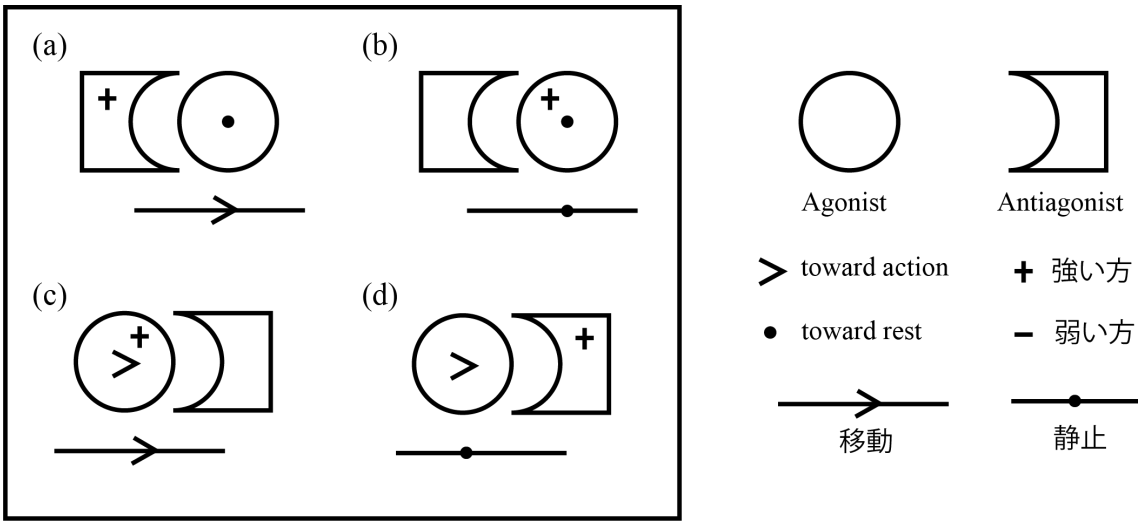

図 2-1 The basic steady-state force-dynamic patterns（Talmly 1988：55）

Ago's tendency (a, b): toward rest

(c, d): toward action

Ago's resultant (a, c): action

(b, d): rest

Ago's force relative to Ant's (a, d): lesser

(b, c): greater

図 2-1（a）では、動く動勢を持つ主動体が静止の傾向を持つ対抗体に力を加え、対抗体が動き始めることを表す。（b）では、対抗体が主動体に力を加えたが、主動体の静止の傾向が強いことで、主動体が動かなかったことを表す。（c）では、主動体が対抗体に力を加え、主動体の動きの傾向が対抗体の動きの傾向より強いことで、主動体が対抗体を押して前へ進むことを表す。（d）では、主動体が対抗体に力を加えたが、対抗体の動勢が主動体の動く動勢より強いことで、主動体の動きを止めることを表す。

図 2-1 で示したように、力を加える方（動作主）は対抗体である場合もあれば（a）、（b）、主動体である場合もある（c）（d）。つまり、ＦＤ理論で言及した主動体は常に動作主（Agent）になり、対抗体は感受者（Sentient）になるわけではない。なお、動作主（Agent）、感受者（Sentient）及び第三者が観察できる力の強さがどのように言語化されているかについて、ＦＤ理論では言及されていない。

【力】スキーマを言語化する時、自分が観察する動作主（Agent）の力の強さと自分が感受者（Sentient）として感じた力の強さが同じかどうか、言語によって異なる可能性がある。人間は能動的主体として外部の人や環境に働きかけるが、【力】スキーマはこの働きを表す最も基本的なイメージ・スキーマである。身体性をめぐって現れた言語間の相違はさらに抽象的なものの間の力関係を記述するときに影響しうる。つまり、動作主（Agent）、感受者（Sentient）及び第三者が観察できる力の強さがそれぞれどのように捉えられているかについての議論が必要とされる。

Ikegami（1994）は、【Source-Goal】スキーマにおける、動作主（Agent）と感受者（Sentient）の関係を表している。図 2-2 はそれを簡略化した【力】スキーマの図式である。図 2-2 では人間（human）が動作主（Agent）としての場合と感受者（Sentient）としての場合の 2 つの基本的な様相を持つことが示されている。

```
SOURCE ---------→ GOAL                GOAL ←--------- SOURCE
 (human)                                (human)
  ||                                    ||
Agent                                   Sentient
```

図 2-2　【力】スキーマの簡略図（Ikegami 1994：328）

まず、力関係を表す日本語と中国語の例を見てみる。例（8）（9）は、第三者が太郎が次郎を殴るという行為を第三者が表すときに用いられる表現である。太郎が動作主で、次郎は感受者である。例（10）（11）は、自分が他の人に殴られて、その痛みの強さを述べる時の日本語と中国語の例である。相手は動作主で、自分は感受者である。

(8)　太郎が次郎を強く殴った。

(9)　太郎重重地打了次郎。

(逐語訳：太郎-重く-殴る-完了-次郎)

(意訳：太郎が次郎を強く殴った)

(10)　彼に強く殴られ、強い痛みを感じる。

(11)　我被他重重地打了，疼痛感很强[2]。

(逐語訳：私-られる-彼-重く-殴る-完了、痛み-強い)

(意訳：彼に強く殴られ、強い痛みを感じている)

ある行為、即ち力関係に絡む動作主（Agent）は物理的にあるいは何らかの形で感受者（Sentient）に影響を与えている。それは動作主（Agent）と第三者においても観察できる。一方、感受者（Sentient）が受けた外部からの刺激はなかなか第三者に観察されにくい（Ikegami 1994：328）。

(8)（10）のように、日本語の場合、第三者が観察できる動作主の身体動作の強さと、感受者が感じている痛みの強さは同じ「強い」が用いられる。一方、(9)（11）の中国語の場合、動作主の身体動作の強さは“重重（重い）”が用いられるが、感受者が感じている痛みの強さは“强（強い）”が用いられる。つまり、同じ客観的事実を言語化する時、【力】スキーマの一側面である力の強さを表す場合に、日本語と中国語においてズレがある可能性がある。また、日本語の「重い」と中国語の“重”は意味にズレがあり、日本語の「強い」と中国語の“重”はある種の意味の重なりを持つことが予想される。

2.1.1.2　「重い」と“重”に関する日中比較

[2]（11）では、“我被他重重地打了，很疼（逐語訳：私-られる-彼-重く-殴る-た、痛い）”の方がより自然な中国語になる。しかし、痛みの強さを言語化する場合、“我被他重重地打了，疼痛感很强。”のように言わなくもない。本研究では、日本語と中国語の区別を可視化しやすいように、“我被他重重地打了，疼痛感很强”のままにする。

日本語でも、中国語でも、「重い」と“重”との基本義は物の重量を表し、目方が大きいことを意味している。楊（2012）は、軽重を表す形容詞“轻”“重”と「軽い」「重い」について日中対照研究を行い、その結果の一つは“重”と「重い」は一般的な動作を表す動詞を修飾し、「（動作を）重く感じる」という意味を表す場合、日本語と中国語がほとんど同じ意味であると述べている。その中国語の例は（12）、（13）である。

（12）　用木棒石块等重击无辜群众头部、是这次暴力犯罪事件中暴徒施暴的主要手段。（木の棒や石などで無実の人々の頭を＜意訳：強く殴り、逐語訳：重い-殴る＞これは今回の凶悪犯罪の凶悪犯による主な手段である）（人民網 2009/07/19）

（13）　就是你搞木马病毒也好、做“山寨”骗人上当的网站也好、要对你狠狠的、重重的打击、不能对他们纵容。（つまり、ウイルスを作ろうが、“偽”のフィッシングサイトを作ろうが、必ず君たちを＜意訳：厳しく取り締まり、逐語訳：重い-取り締まる＞、絶対黙っていかないから）（人民網 2009/04/20）

楊（2012：43）から引用、下線及び翻訳は引用者によるもの

（12）と（13）の下線部の中国語を日本語に訳しても、“重击”は「*重く殴る」、“重重的打击”は「*重く取り締まる」とならない。（12）は身体動作だが、（13）の字義通りの意味は身体動作の「強く殴る」の意味で、文脈上の意味はある行為を阻止するために取る行動であるが、日本語では、そこでも「重い」を用いない。つまり、楊の結論に間違いがあり、「（動作を）重く感じる」を表す場合、身体動作の場合でも、抽象的な意味でも日本語と中国語はズレが生じる。

また、楊（2012）は、“重”と「重い」が名詞と共起して、身体、五感などの具体的な圧迫感を表す場合、“重”と「重い」の意味用法はほとんど同じであると述べている。体への圧迫感、味覚、音、色に関する「重い」の日本語の例は以下のみである。

（14）　体への圧迫感：足が重い

（15）　味覚：飲むと少し深み、奥ゆきを感じさせるお茶で、重い感じもする

（16）　音：深く重い低音

（17）　色：重い灰色

楊（2012：34～36）

（14）は、外部動作が肉体への圧迫感を与えるイメージがなく、足がだるいという意味である。（15）は、お茶を飲むとき、味覚への刺激より、感覚上の包括的なイメージと言える。（17）は、日本語では、「濃い色」が最もよく使われる用法である。

ここで一つ注意すべきことは、ある言語でその用例があるかどうかということと、その用例がよく使われているかということでは、言語学的意味が異なるということである。特に対照研究を行う際に、ある言語において、希な例と、ある言語において非常によく使われる例を比べ、共に例があるからといって、両言語が同じであると結論付けるのは危険である。例えば、以下の中国語の五感における“重”の表現は、日本語の「重い」で訳せないものが多い。

（18）　“手重”：殴られて痛く感じる場合、相手の手の力の強さ
（19）　“口重”：塩辛い味を好む
（20）　“味道重”：味が強い
（21）　“脚步声重”：足音が大きい
（22）　“颜色重”：色が濃い
（23）　“气味重”：匂いが強い

（18）～（23）の例の触覚、味覚、聴覚、視覚、味覚において、外部からの刺激の強さに対しては、中国語では“重”を使う。しかし、日本語では、「手が重い」は、疲れていて手が上がらないことを意味しており、触覚上の表現ではない。また、「*味が重い」「*色が重い」「*匂いが重い」「*足音が重い」は日本語としての容認度が低く、中国語のように、外部の刺激源が味覚、視覚、嗅覚，聴覚に与える刺激という意味がない。日本語ではむしろ、外部の刺激を表すとき、「味が強い」「色が強い」「匂いが強い」など日本語では「強い」の使用が一般的である。

つまり、中国語の“重”を用いての一般的に表現が日本語の「重い」と対応しないことがわかる。名詞と共起して、身体動作、五感などの具体的な圧迫感を表す場合、「重い」と“重”の意味用法はほとんど同じであるという楊（2012）の結論は言語事実と大きくずれている。つまり、一般的な動作を表す動詞を修飾し、「（動作を）重く感じる」という意味を表す場合でも、名詞と共起し、身体、五感などの具体的な圧迫感を表す場合で

も、日本語と中国語においてはズレが生じているのである。楊（2012）の結論は改めて検討する必要がある。

2.1.1.3　感覚系の種類

2.1.1.1 では、（8）～（11）の例を挙げて、日本語と中国語において、動作主の身体動作の強さ、と感受者が感じる痛みの強さは日中が異なる可能性を示した。2.1.1.2 では、「（動作を）重く感じる」場合、五感の場合、楊（2012）の結論に不備があることを指摘した。2.1.1.3 では、力の強さの捉え方の日中の異同をより体系的を見せるために、力を受ける身体の身体感覚を整理する。

菊地（2008）では、感覚系を 8 種類に分けている。感覚系の役割は、外界の刺激エネルギーを受容し、なんらかの仕方で電気的情報に変換して脳に送り、受容した感覚器に対応するモダリテイ（modality）の感覚を引き起こすことであると述べられている。表 2-1 は、菊地（2008）が松田（1995）を一部修正してまとめた感覚系の分類である。

表 2-1　力の強さの捉え方と感覚系との関係（日中）

	外部感覚						内部感覚	
	視覚	聴覚	皮膚感覚	嗅覚	味覚	深部感覚	内臓感覚	前庭機能
中国語	重	重	不明	重	重	重	不明	————
日本語	強	不明	不明	強	強	強	不明	————
感覚の性質	色	音	触・圧	匂い	味	力の抵抗	空腹感	ない

表 2-1 によれば、2.1.1.1 で述べている身体動作は四肢の運動により、身体が感じている力（抵抗・重さ）、圧迫感、痛みなど、「深部感覚」である。例（18）～（23）のうち、“手重”（殴られて痛く感じる場合、相手の手の力の強さ）も「深部感覚」である。“口重”（塩辛い味を好む）、“味道重”（味が強い）、“脚步声重”（足音が大きい）、“颜色重”（色が濃い）、“气味重”（匂いが強い）はそれぞれ「味覚」、「聴覚」、「視覚」、「聴覚」に属している。つまり、中国語と日本語では、「深部感覚」と「味覚」、「聴覚」、「視覚」、「聴覚」において差異がある可能性がある。しかし、

「皮膚感覚」、「内臓感覚」においては、日中はどのような違いがあるのか、まだ明らかになっていない（表 2-1）。

次に、これらの感覚系の「通常の適刺激」を見ると、視覚、聴覚、皮膚感覚、嗅覚、味覚、深部感覚は刺激源（身体動作、物）が観察される。刺激源は直接体に作用する。一方、内臓感覚、前庭感覚は刺激源（身体動作、物）が観察されなく、血糖、酸素などの変化により、体の自ら生まれる感覚が多い。例えば、空腹感、尿意など。つまり、視覚、聴覚、皮膚感覚、嗅覚、味覚、深部感覚といった感覚は外部刺激があると言える。一方、内臓感覚、前庭感覚は外部刺激がないと見てとれる。本研究では、外部刺激が直接体に働きかけできる感覚、即ち、視覚、聴覚、皮膚感覚、嗅覚、味覚、深部感覚を「外部感覚」と呼ぶ。一方、外部刺激が直接体に働きかけできない感覚を「内部感覚」と呼ぶ。また、表 2-2 では、前庭感覚は感覚の性質がないので、日中の異同を分析する際に、適切な語彙を定めにくいため、今回の調査から除外する。

表 2-2　感覚系の分類（菊地 2008：４）

モダリティ	感覚器官 部位	末抹神経 部位（受容器）	主たる中枢 部位（投射領）	通常の適刺激	感覚の性質
視覚	眼	網膜第１層の視細胞（桿体と錐体）	後頭葉の視覚領野	光 （可視光）	明暗（白黒）や、赤、黄、緑、青などの色
聴覚	耳	内耳蝸牛基底膜上のコルチ器の有毛細胞	側頭葉の聴覚領野	空気の疎密波 （音波）	調音（純音、周期的複合音）や雑音などの音
皮膚感覚 （表面感覚）	皮膚	パチニ小体、マイスナー小体、ルフィニ終末、メルケル細胞、自由神経終末など	頭頂葉中心後回の体性感覚領野	機械的刺激、温度刺激、侵害性刺激など	触・圧、くすぐる、温・熱、冷、痛、痒など
嗅覚	鼻腔の嗅粘膜	嗅上皮の嗅受容細胞	嗅皮質（嗅脳）	揮発性の物質	薬味、花、果実、樹脂、腐敗などのニオイ
味覚	舌、一部の口腔内部位	乳頭の味蕾の味受容細胞	頭頂葉中心後回の体性感覚領野	溶解性の物質	甘、鹹（塩味）、酸、苦などの味
深部感覚 （固有感覚）	骨格筋、腱、関節	伸張受容器（筋紡錘、腱紡錘）、腱受容器、関節受容器などの固有受容器	頭頂葉中心後回の体制感覚領野	筋・腱・関節に加わる機械的刺激など	四肢の位置や運動の方向・速度、力（抵抗・重さ）、圧、痛など

内臓感覚 （有機感覚）	胃、腸、心臓などの内臓	内臓器官に分布する自由神経終末、圧受容器、伸張受容器、化学受容器など	頭頂葉中心後回の体制感覚領野	圧、血糖、水分不足、血中酸素など	空腹、渇き、排泄・排尿感、心拍動、息詰まり感、痛など
前庭機能 （平衡感覚）	内耳迷路の前庭器官	耳石器および半規管の有毛細胞	？（または多部位）	重力、身体や頭部の直進および回転加速	ない（結果としては、身体の傾きや移動、めまいや乗り物酔いなど）

2.1.1.1 では、Talmy（1988）のＦＤ理論と Ikegami（1994）の【力】スキーマの簡潔モデルに言及し、ＦＤ理論では、力の強さの捉え方という観点が欠けていることを指摘した。

2.1.1.2 では、日本語と中国語の例を挙げ、力の強さを表す時、「（動作を）重く感じる」という意味を表す場合でも、名詞と共起し、身体動作、五感などの具体的な圧迫感を表す場合でも、日本語と中国語においてはズレが生じていることを指摘した。

2.1.1.3 では、感覚系の分類を紹介し、中国語と日本語では、「深部感覚」と「味覚」、「聴覚」、「視覚」、「聴覚」において差異がある可能性を示した。しかし、「皮膚感覚」、「内臓感覚」においては、日中はどのような違いがあるのか、まだ明らかになっていないことを指摘した。これらの問題に関して、本論文の第 3 章で取り上げて詳しく論じる。

2.1.2　【容器】スキーマ

Johnson（1987：22）は、in-out の関係について、以下のように【容器】スキーマの特徴を述べている。

① 容器は外部からの力を遮断または和らげる。
② 容器は内部からの力が外部に出ることを妨げる。
③ 容器の中のものは比較的位置が変わらない。
④ 容器の中のものは内部の人には見やすく、外部の人には見にくい。
⑤ 容器には推移性が働く（鞄の中にある財布の中の硬貨は必ず鞄の中にある）。

鍋島（2003：335）の翻訳を参考

即ち、【容器】スキーマにおいては①や②に表される「境界性」が一つの要素であり、また、③に表される「内容物」、④に表される「視界性」が関わる。

また、山梨（2000：144）は、【容器】スキーマに関わる要素として＜実・空＞、＜内・外＞、＜表・裏＞を挙げている（図 2-3）。ある限定された空間に中身がつまっているか否か、ある空間領域の内か外か、表か裏かといった主体の投影する視点が、容器のイメージ・スキーマによる認知のプロセスと複合的に関わり、これらの視点は人間の知性、資質、性格等の主観的な意味を比喩的につくり上げている。

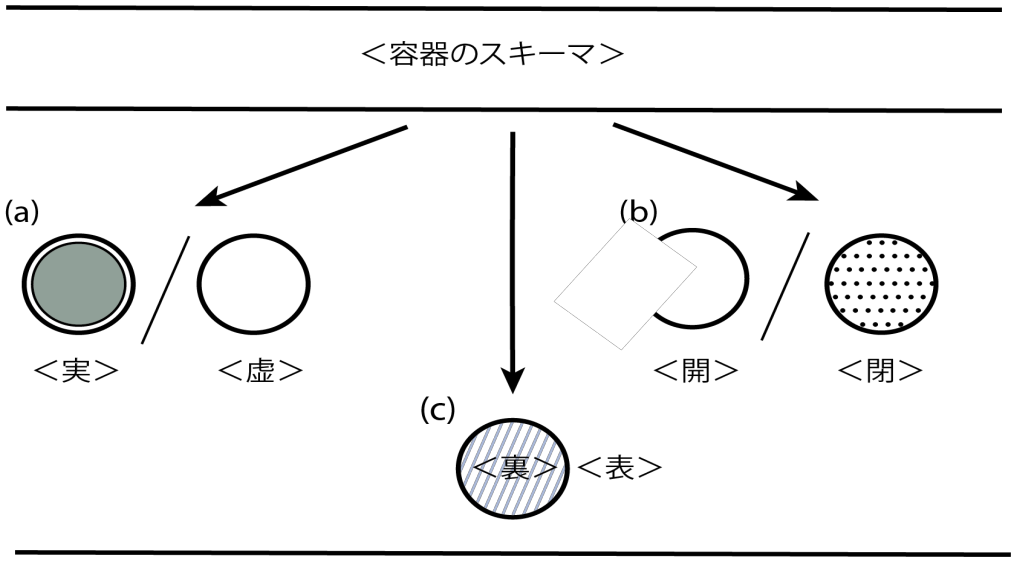

図 2-3　【容器】スキーマ（山梨 2000：147）

これについて、以下の用例が挙げられる。

(24)　彼の頭はからっぽだ。＜実・空＞
(25)　彼女は内向き的な人だ。＜内・外＞
(26)　この人物には裏表がない。＜表・裏＞

山梨（2000：144）

山梨（2000）は、＜実・空＞は「内容物」があるかどうかで区別されるとしている。また、＜内・外＞は閉ざされた空間から外に向かって開かれているかどうかに焦点化されている。つまり容器の「外形」と「境界性」に言及している。また、外部空間にいる人間は視界に容器という障害物があるため、視線が内部まで延びることができなくなり、＜表・裏＞という関係が生まれるとしている。これは「視界性」への言及である。

2.1.2.1　「深い」と“深”に関する日中比較

空間的な量を表す形容詞として、日本語の「深い」と中国語の“深”についてみてみる。水平面を基準とする垂直の隔たりという意味素を持つ「高い」に対して、「深い」は必ず水平面と垂直の関係を持つというわけではなく、「深い傷」のように、基準から物の内部に向かって入りこんで行く隔たりがあるという意味素を持っている（国広 1982）。多くの研究は【容器】スキーマを用いて、「深い」の意味拡張の動機付けを説明している。

小出（2000）は次元形容詞の空間用法と非空間用法について述べている。まず、形容詞「深い」の空間用法は以下の①～④となる。

① 何らかの本体に属する内部空間を対象とする。
② 内部空間内での「延び」の方向は、必ずしも下方とは限らず、水平方向もありうる。
③ 内部空間の開口部を基準点とするが、しかし基準点は明確でない場合も多い。
④ 内部空間の特徴：安定性／堅牢性を持つ、開口部以外が閉じられたものでなくてもよい、密封であってもよい。

小出（2000：4-5）

小出（2000）の①②③は、内容空間の捉え方は基準面から奥までということを表している。容器の向きは必ずしも上下という水平方向との垂直関係だけではなく、容器の開閉部の向きは上向き、横向きもありうる。つまり、容器の「境界性」に言及している。また、④で述べられているように、容器の開・閉という「外形」の特徴も【容器】スキーマのもう一つの要素だと考えられる。

次に、「深い」の非空間的用法として、以下①②が挙げられている。

① 「深い」の対象は、外から観察される状態を基準点とし、内部の見えない部分に延びるなにものかがあることが暗示されるものである。例えば、「深い関係」など。
② その延びの大きいものほど、本質性あるいは程度性が大きくなる。これは、「深い」ところにその物の本質がある、より深くなればなるほどそのものの本来の性質に近づくはずだ、という認識によるものと思われる。例えば、「深い愛」など。

小出（2000：9-10）

非空間的用法①は「視界性」に言及しているが、②は「位置」に言及している。

栗木（2016）は、【容器】スキーマを用いて、「深い」の空間用法と非空間用法の意味拡張の動機付けを以下のように説明している。まず、空間用法について以下のように述べている。

①〔容器〕の焦点化：深い（器、谷、穴、…）
②〔中身〕の焦点化：深い（海、川、泥、…）
③〔位置〕の焦点化：深い（地層、海底、地下、…）

次に、「深い」の非空間的用法のうち、「深い愛情」は【容器】スキーマの〔中身〕に焦点を当て、感情の強さを表している。また、「秋が深い」は〔位置〕に焦点を当て、秋の終わりに近い時点を「深い」で表している。

一方、「深海をイメージした深い青色」は、深い海の底は光が届かず暗いことから、「深い場所は暗い」と言え、「深い場所」のフレームが考えられる。「場所」を表す「深い」が、その場所の「色の暗さ」を表すこともできるという同時性に関するメトニミーによる拡張である（栗木 2016）。

栗木（2016）が記述する〔容器〕〔中身〕〔位置〕は容器の「境界性」、「内容物」に関わり、また、「深い場所は暗い」というのは容器の「視界性」に関わる。容器が深ければ深いほど、光が底まで届かず、明るいところは容器の入り口に近く、暗いところは容器の入り口に遠いと考える。「深い青色」は【容器】スキーマと【光】モデルの両方に関わると考える。

Johnson（1987）、山梨（2000）、小出（2000）、栗木（2016）で記述された【容器】スキーマの要素は、少なくとも表 2-3 に示す 5 種類へと区分される。

表 2-3　【容器】スキーマの要素と諸説の射程

	境界性	外形	内容物	視界性	位置
Johnson (1987)	✔		✔	✔	
山梨（2000）	✔	✔	✔	✔	
小出（2000）	✔	✔		✔	✔
栗木（2016）	✔		✔	✔	✔

「深い」の空間用法に関して、中国語においても“很深的伤口（深い傷）”のように日本語と同じ意味を持っている。しかし、非空間的用法に関して、日本語では「深く関わる」が言えるが、中国語では、“*深深地关联”言えない。一方、中国語では、“很深的影响（深い影響）”が言えるが、日本語では言えない。このような日中間の意味拡張のズレは学習者のコロケーションの学習において大きな困難をもたらし、誤用を引き起こす大きな要因だと考えられる。

趙（2004）は〈深・浅〉に関して、共起関係、文法機能の二つの角度から意味・用法の共通点と相違点を分析している。その中で、日本語は主に朝日新聞の「アサヒ・コム」を、中国語は主に人民日報の“人民网”を用いて例文を収集している。結果は以下の通りである。

① 「深い」と“深”は、具体名詞との共起関係において、基本的な意味で、一致している。

② 時間名詞との共起関係は、「季節」「夜」で一致しているが、その他の時間名詞では、“资历深（経験がある）”など、違いが見られる。

③ 味覚・嗅覚において、日本語では具体的感覚に、中国語では抽象的感情（“意味深长”）に意味の注目点があり、異なっている。

④ 抽象名詞において、抽象名詞の関係では、「関係」でかなり一致しているが、感情の方では、中国語では、“深仇大恨（深く大きい恨み憎しみ）”のように、“仇”“恩”と共起する用法が目立つ。

⑤ 日本語でも、中国語でも、述語にも連体修飾語にもなる場合が、次のような名詞との結びつきに見られる。①空間的場所、②関係、③感情。

⑥　修飾語として、意味の関連した名詞の連体修飾語になる場合と、動詞の連用修飾語になる場合は、「関係」では、日本語と中国語は似ている。「感情」では、日本語は連体修飾用法も連用修飾用法も盛んに使用されているのに対し、中国語は連体修飾用法に偏っている。連用修飾は、“深表”の形で用いることが多い。

しかし、趙（2004）の「深い」の日中比較は意味・用法に留まり、〈深〉に関する日本語と中国語の意味拡張の動機付けの違いが明らかになっていない。

山田（2008）は『海辺のカフカ』（村上春樹 2002）、『霸王別姫』（陳凱歌 1996）、『故郷』（魯迅 1981）の３つの小説の日中訳本をデータとして取り上げ、日本語版の小説に現れて、かつ中国語版の小説に「深い」と共起しやすい語及び少ない語彙（「眠り」「興味」「注意・中心」「息」「色」「香り」「闇」「奥」）を分析し、日中の違いを比較している。しかし、山田（2008）の分析データは量が少なく、〈深〉の意味の全貌が明らかになっているとは言い難い。

徐（2009）は日本語と中国語の辞書を利用し、辞書の意味項目をもとに〈深〉の各意味項目を整理している。その結果、表 2-4 のように、全部で 17 の意味項目のうち、「深い」は 16 の項目に用例が見られ、“深”は 15 の項目に用例が見られる。“深”と「深い」の意味はかなり近いことが明らかとなった。

また、徐は中日対訳コーパスから「深い」に関する表現 1494 例のうち、200 件をランダムに抽出し、“深”（146 例）との意味項目の分布を調べた。結果として、「深い」は 8 の項目に用例が見られ、“深”は 11 の項目に用例が見られた。“深”と「深い」について、中国語の拡張度は日本語より上回っていると述べている。

しかし、徐（2009：10）では、「深い」のすべての用例（1494 例）からランダムに 200 例を選んだことは、「深い」の一部の意味用法と“深”の全部の意味用法を比べることに等しい。その結果当然“深”は「深い」より拡張度が高いという結果になる。そのため、徐の結果は疑わしく思われる。

表 2-4　「深い」と“深”の意義項目（徐 2009：3）

意義項目	日本語	中国語
	深い	深
①　水面から水底までの距離が長い／短い	深い海	深渊
②　上下の距離が長い／短い	深い谷	深耕
③　境界から奥までの距離が長い／短い	傷跡が深い	深山
④　互いに独立している実物が密集している／まばらである	毛深い足	深林
⑤　色が濃い／薄い	深い緑色	深红
⑥　暗い／明るい	深い陰	树荫深浓
⑦　匂い・香りが強い／ほのかである	深い香り	―――
⑧　味が強い／薄い	味が深い	―――
⑨　事の始まりから時がかなりたっている／時があまりたっていない	深夜	深秋
⑩　顕著／微弱	興味深い	印象深刻
⑪　難しい／易しい	―――	艰深
⑫　本質に達する／表面的な領域に止まっている	深い意味	深刻认识
⑬　密接である／疎遠である	深い仲	交情深
⑭　内心的な／公開的な	深く隠れる	心灵深处
⑮　音声が低い／高い	深い声	声音深沉
⑯　たくさん注意を払う／あまり注意を払わない	深く注意する	深信
⑰　感情が強い／薄い	深い感動	深情

金（2017）では、「深い」と“深”のアンケート調査とコーパスから抽出した用例を分析し、以下の結論を得ている。日本語の「深い」と中国語の“深”は、プロトタイプ的意味が類似し、イメージ・スキーマとプロトタイプとの類似性によって意味拡張をする点

でも類似している。しかし、具体事例の認識において、日本語の「深い」は、主にメタファーによって動機付けされるのに対し、中国語の“深”では、メタファーとメトニミー（“深水”）の2種類の動機付けが確認され、相違点が見られた。

しかし、金（2017）は中国語では、“深水”が言えるのに対して、日本語では言えないことから、中国語は容器-内容物の接近性の観点からメトニミーによる意味拡張があるのに対して、日本語にはないと述べている。一方、栗木（2016）によると、日本語では、「深い海、深い川、深い泥」が言える。【容器】スキーマを構成する要素として中身（海、川、泥）が焦点化され、日中共にメトニミーによる意味拡張があると考えられる。よって、金（2017）の結論はさらに検討する余地がある。

2.1.2.2 「深い」の過剰使用

李（2018）では、大規模学習者コーパスのデータを利用し、共起語の情報に基づき、中国人日本語学習者（CH）の形容詞コロケーションの誤用の実態を探った。まず、中国語を母語とする日本語学習者の形容詞の自由産出の傾向と日本語母語話者の異同を調べるために、「筑波ウェブコーパス」から日本語母語話者（JP）のデータを抽出し、総語数を1億語に換算し、日本語学習者（中、韓、英）が産出した16の形容詞の出現頻度を比べた（表2-5）。その結果、学習者と母語話者の各形容詞の産出の割合はほぼ一致した。

表 2-5　形容詞出現頻度（一億語換算）

形容詞	CH	KO	EG	JP
重い	8251	7518	4396	7296
軽い	3646	6750	2988	6911
強い	37118	20558	23763	30456
弱い	11278	11507	6353	6027
明るい	9125	5063	5426	6333
暗い	5159	4909	5254	3561
深い	26309	9972	8070	13449
浅い	1279	307	635	1841
厚い	3070	3989	2301	2511
薄い	4157	4296	1494	4072
濃い	1897	1688	841	5509
淡い	917	460	240	635
高い	45945	45719	43423	49920
低い	9829	6597	6010	12701
大きい	34453	32832	38220	39359
小さい	34304	18410	31593	12629

表 2-5 を図 2-4 に示す。図 2-4 に示したように、自然産出の形容詞の中で、「強い」「深い」「高い」「大きい」は他の形容詞より多く産出されている。このような傾向は母語話者だけでなく、学習者の CH、KO[8]、EG[9]のデータでも同様である。

図 2-4 では、中国語を母語とする学習者（CH）は、JP、KO、EG より「強い」「深い」「小さい」の産出量が多いことを示した。CH と JP、KO、EG において、統計的に差があるかどうかを調べるために、カイ二乗検定を行った。その結果を表 2-6 に示す。

[8] 韓国語を母語とする日本語学習者
[9] 英語を母語とする日本語学習者

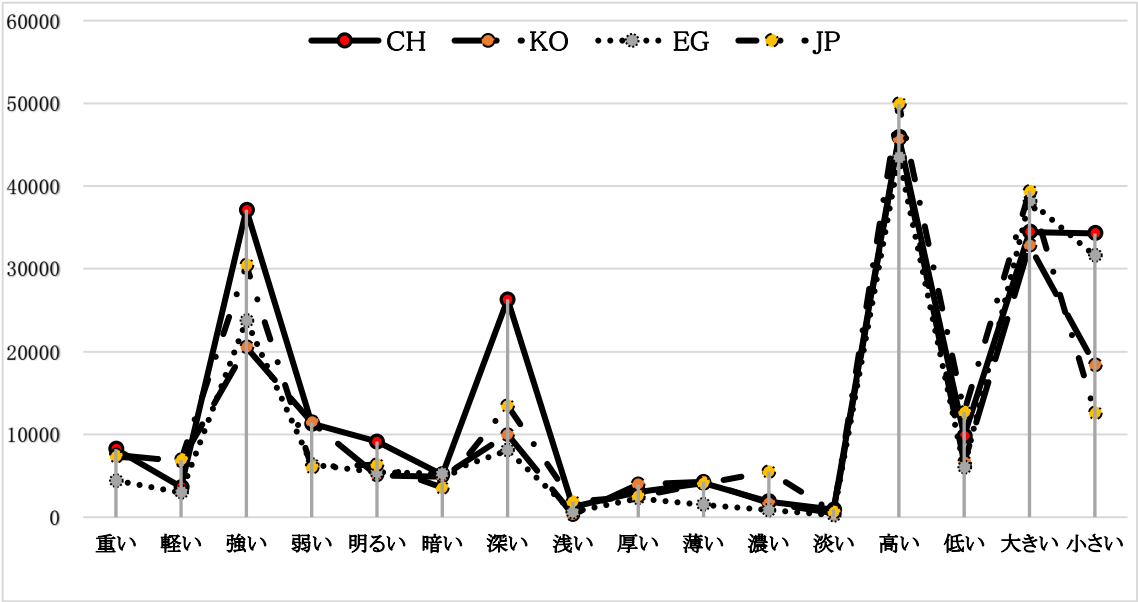

図 2-4　異なる母語話者の形容詞使用傾向（一億語換算）

表 2-6　異なる母語話者の日本語形容詞の産出頻度の差

	度数 （1 億語換算）	χ^2（3） 確率（p）	効果量 （w）	多重比較 （ライアンの名義水準）	効果量 （w）
強い	CH＝37118 KO=20558 EG=23763 JP=30456	5809.11, p<.01	0.23	CH>KO, p<.01	0.29
				CH>EG, p<.01	0.22
				CH>JP, p<.01	0.10
深い	CH＝26309 KO=9972 EG=8070 JP=13449	14006.56, p <.01	0.49	CH>KO, p<.01	0.45
				CH>EG, p<.01	0.53
				CH>JP, p<.01	0.32
小さい	CH＝34304 KO=18410 EG=31593 JP=12629	13376.03, p <.01	0.37	CH>KO, p<.01	0.30
				CH>EG, p<.01	0.04
				CH>JP, p<.01	0.46

表 2-6 に示した通り、「深い」について、CH、KO、EG、JP の産出頻度を比べた結果、産出頻度には有意差が認められた（$\chi^2(3)=14006.56$、$p<.01$）。効果量が 0.5 に近いことから、実質的な差が大きいということがわかる。多重比較の結果では、CH と JP において、効果量が中程度で、実質的な差があると言える。

以上の結果から、「深い」に関して、CH、KO、EG、JP の産出頻度には実質的な差があることがわかり、中国語話者は日本語母語話者より、形容詞「深い」を過剰に使用していることが明らかになった。

続いて、母語話者の修正データに基づき、「深い」形容詞正誤判断の頻度を集計した。結果を表 2-7 に示す。表 2-7 からわかるように、「深い」に関して、産出数 1237 例のうち、不自然なコロケーションは 151 例で、誤用コロケーションは 86 例である。修正語に使われた形容詞で最も多いのは「強い」で、全部で 59 例あり、全体の 68%を占める。日本語の「深い」は中国語の“深”の中心義と同じで、基準になる面から底までの距離が長いことを表している。しかし、拡張義がずれるため、自然産出において、差異が見られると思われる。李（2018）の結果からわかるように、中国語の“深”の拡張義と日本語の「強い」の拡張義は重なる部分があることがわかる。

表 2-7　誤用形容詞コロケーションの頻度

	産出数	不自然な コロケーション	誤用 コロケーション	修正語 1 位	修正数 (%)
深い	1237	151	86	強い	59 (68%)

表 2-7 より、学習者が産出している「深い」のコロケーションの中で、86 例のうちの 59 例が「強い」に修正されている。「深い」のコロケーションのうち、どのような名詞とよく共起して使用しているかを調べるために、「深い」をキーワードに、キーワードの前後の 5 語を単位として、「深い」と係り受けの関係を持つ名詞を調べた。頻度 3 以上の名詞をワードクラウドで図式化し、図 2-5 に示す。ワードクラウドとは単語の出現頻度に応じて、大きさで図示する手法である。色、字体、向きに変化をつけることができるが、図 2-5 では文字の大きさが頻度の高さを意味している。名詞は印象（44）、私（37）、興味（27）、影響（21）、心（20）、中（13）、一番（12）、人（12）、日本

（11）、意味（10）、感動（10）などがある。動詞はする（54）、いる（41）、なる（30）、ある（27）、持つ（22）、残る（17）、感じる（13）、思う（10）、受ける（10）などがある。

図 2-5 「深い」と共起する名詞（ワードクラウドによる）

図 2-5 では、学習者は「印象、理解、意味、記憶」の思考類名詞、「興味、感動、感情、気持ち」といった感情類名詞の程度を表すとき、「深い」をよく使うことがわかる。また、他者、相手に対する影響の強さを表すとき、「深い」を頻繁に使っている。

これらの名詞（印象、興味、影響、意義、感動、了解、記憶、理解、イメージ、感情、気持ち）をターゲット語（T）として、それぞれ中国語と日本語において、〈深〉と〈强〉のどちらと共起しやすいかを明らかにするために、「北京大学語料庫」（CCL）と「筑波ウェブコーパス」（TWC）を用いて調べる。中国語では、“很深的＋T”、“T＋深刻”、“深刻的＋T”、“深深地＋T”と“T＋强烈”“强烈的＋T”“很强的＋T”の頻度を調べ、日本語では、「深い＋T」「T＋が深い」と「強い＋T」「T＋が強い」の頻度を調べた。その結果を図 2-6、2-7 に示す。

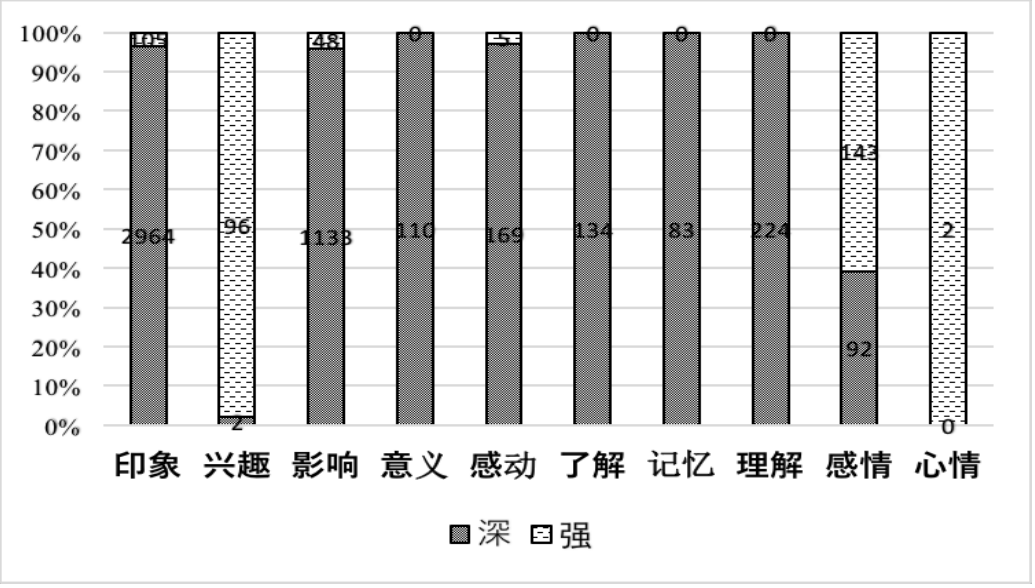

図 2-6　中国語の“深”と“强”と共起する名詞

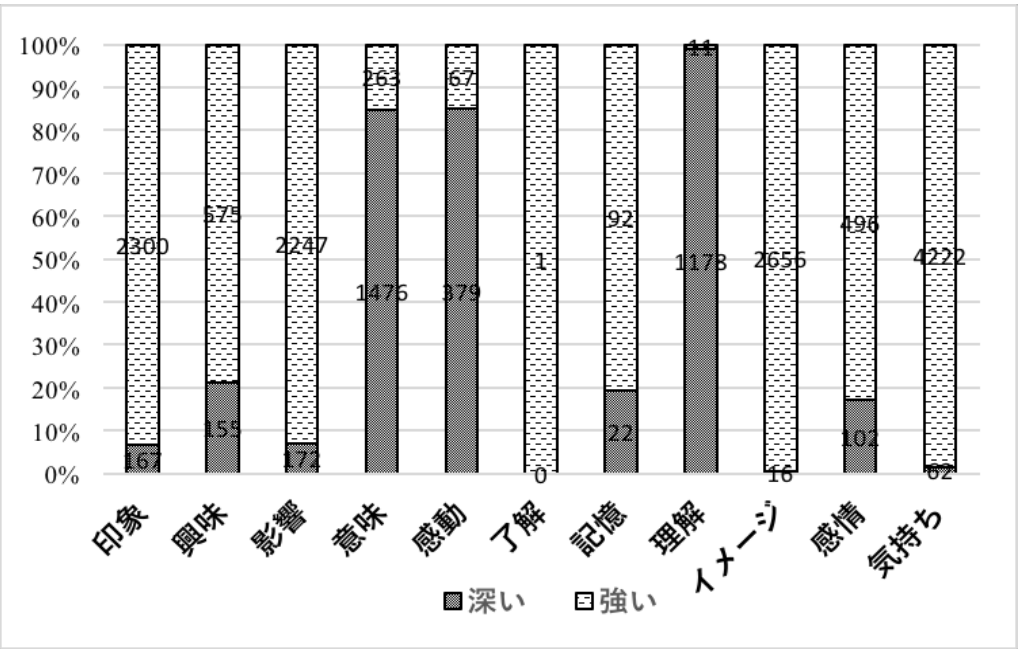

図 2-7　日本語の「深い」と「強い」と共起する名詞

図 2-6、2-7 からわかるように、思考、感情に関する名詞と共起する場合、中国語では、“深”をよく使うが、日本語では、「強い」をよく使う。しかし、なぜこのような偏りがあるのか、李（2018）では、十分に検討されていない。

2.1.2.3　【容器】スキーマの依存度

韓（2014b）は、日中英の＜コミュニケーション＞のメタファーを考察した結果、【容器】スキーマの依存度は、中国語＞日本語＞英語　であると主張している。その結論は２段階を経て論証されている。

①　中国語・日本語＞英語
②　中国語＞日本語

韓（2014）は、＜身体部位＞、＜言葉＞、＜思考＞の三者の関係について図 2-8 のように示している。まず、＜言葉＞が＜思考＞を内包し、さらに身体部位が＜言葉＞を内包する。この内包関係について、中国語や日本語では積極的に関与しているのが＜身体部位は容器＞＜言葉は内容物＞である。一方、英語では、＜言葉は容器＞＜意味は内容物＞という内包関係に注目する。そのため、【容器】スキーマの依存度は、①中国語・日本語＞英語である。

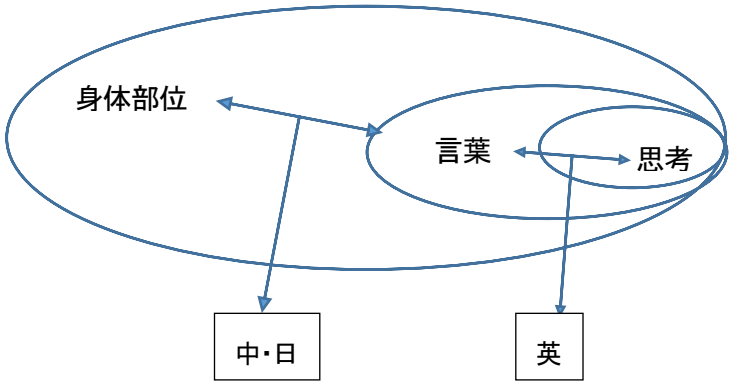

図 2-8　身体部位、言葉、思考との関係（韓 2014、引用者によって作図）

さらに、例（27）のように、英語の文は中国語に訳すと不自然なため、＜言葉＞と＜思考＞の内包関係が中国語は英語より少ないと韓（2014）は主張している。

（27）

a. Try to get your thoughts across better.

? 请让你的想法通过得再顺畅一些。

→请将你的想法表达得再明确一些。

[自分の考えをもっと分かりやすく表現してみなさい。]

b. Don't force your meanings into the wrong words.

? 请不要把你的意思硬塞到错误的词语中去。

→请选择恰当的词语表达你的意思。

[もっと適切な語で自分の考えを言いなさい。]

c. I don't get any feelings of anger out of his words.

? 我没有从他的话中得到任何愤怒的感情。

→我觉得他的话中并不带任何愤怒的感情。

[彼の言葉からは怒りに関するいかなる感情も感じられない。]

（28）

「言葉を放つ」、「メッセージを投げる」、「意見をぶつける」

韓（2014：144）

次に、（28）のように、日本語では、身体部位が言語化されない場合がある。そのため、②中国語＞日本語、中国語は日本語より【容器】スキーマの依存度が高いとしている（韓 2014）。しかし、（27）（28）の反例はいくらでも挙げられる。

（29）　他的话里蕴藏深意。（彼の話に深い意味が含まれている）

（30）　把你的想法说出来。（あなたの考えを言ってください）

例えば、（29）では、相手とやりとりして、言語化された言葉の中から意味を読みとることを表している。＜言葉＞と＜思考＞の内包関係である。（30）では、言葉で思考を表すことを意味している。身体部位も言語化されていない。（29）は（27）の反例で、（30）は（28）の反例である。つまり、韓（2014）が挙げている証拠は不十分であると言える。また、【容器】スキーマの依存度は学習者の「深い」の産出どういう関係があるのか。本論文の第3章の2節では、これらの問題を取り上げて論じることとする。

2.2　概念メタファーに関する先行研究

メタファーには広義のメタファー（比喩全般）と狭義のメタファー（隠喩）がある。広義のメタファーは、いわゆる「レトリック」や「修辞」とほぼ同義で使われている。シミリ（明喩）、メタファー（隠喩）、メトニミー（換喩）、シネクドキ（提喩）などが含まれる。狭義のメタファーは主に概念メタファーを指している。認知意味論の研究においては、メタファー（隠喩）、メトニミー（換喩）、シネクドキ（提喩）は意味拡張の動機付けとして重要な役割を果たしていて、概念メタファーが関係している。以下、瀬戸（1997）、松本（2003）、鍋島（2011）の研究を踏まえて、メタファー、シネクドキ、メトニミーの比喩の異同を説明する。

2.2.1　メタファー（隠喩）、メトニミー（換喩）、シネクドキ（提喩）

メタファーの伝統的定義は、「類似性」に基づいており、「A は B だ」（A is B）の形式が典型的である。一方、メトニミーは「近接性」に基づき、「（現実）世界の中で隣接関係にあるモノとモノとの間で、一方から他方に指示がずれる現象」である（谷口 2003：2；瀬戸 1997：43）。例えば、「ヤカン（→水）が沸く」である。さらに、「全体」と「部分」の考えが重要である。「全体」と「部分」の関係は「の一部」と「の一種」の関係がある。その中、モノを対象として、その全体を節で分けていく「分析分類法」（partaonomy）は「の一部」に対応している。

一方、「の一種」は類と種の「含む-含まれる」という関係に基づく「包摂分類法」（taxonomy）に対応していて、これはシネクドキである。例えば、「花見（→桜）をする」である。

シネクドキは、類と種の間の包摂関係に基づく意味的伸縮現象である（瀬戸 1997：49）。類と種は、ともにカテゴリー（範疇）である。カテゴリーとは、共通の特徴を備

えた個々の要素の集合である。類はより大きなカテゴリーであり、種はそこに含まれるより小さなカテゴリーを意味する（瀬戸 1997）。花見の花を例にすれば、花と桜、またバラ、菊は意味世界の類と種の包摂関係に基づくシネクドキで、桜が散るのは花びらが散るという意味で、花と花びらは現実世界におけるモノ、一本の桜の木を巡る「全体」と「部分」の関係で、メトニミーである（瀬戸 1997）。

シネクドキ（提喩）をメトニミー（換喩）に含む立場もあるが、本論文では、メトニミーとシネクドキの意味拡張のプロセスにおいて違う働きがあることから、シネクドキ（提喩）、メトニミー（換喩）を違う概念として扱う。

瀬戸（1997：196）は三者の関係を「認識の三角形」にまとめている。メトニミーは現実世界に属し、シネクドキは意味世界に属し、またメタファーは身体によって仲立ちされ、両世界の橋渡しを行う。それぞれ孤立状態にあるのではなく、お互いに交渉を持つことがある。次の図 2-9 でまとめる。

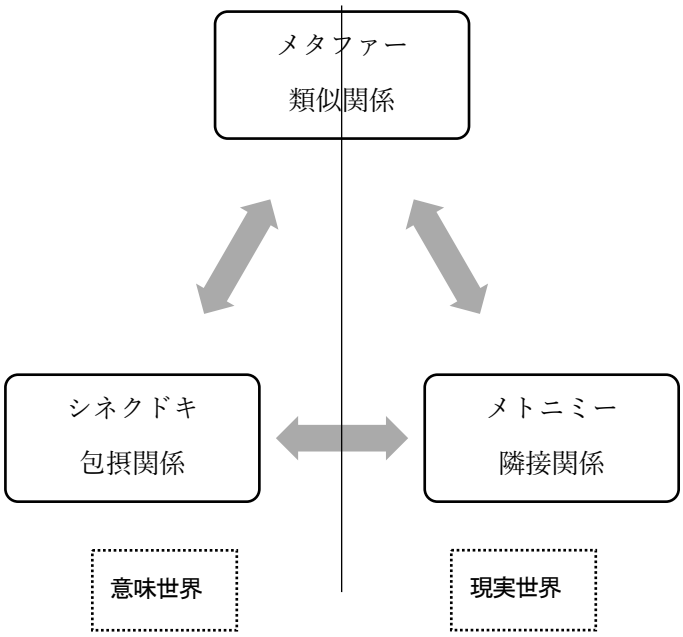

図 2-9　三者関係（瀬戸 1997：196 に基づき、引用者により一部修正[10]）

[10] 瀬戸（1997：196）の図 4（メタファー、シネクドキ、メトニミーの図式）と図 5（類似関係、包摂関係、隣接関係の図式）を合併している。

メトニミーは、空間的隣接を基本として、時間的隣接へと拡張する。時間的隣接とは時間の前後関係であり、それはしばしば因果関係として把握される。一方、シネクドキによる展開は類（より包括的なカテゴリー）から種（より限定されたカテゴリー）への展開（特殊化）と種から類への展開（一般化）の例がある。例えば、accident が「偶然の出来事」から「不幸な偶然の出来事（事故）」への展開するのは特殊化の例であり、「飯（→食べ物）が食えない」は一般化の例である（瀬戸 2001）。

2.2.2　概念メタファーの定義

従来のメタファー研究は代替説、逸脱説、比較説、語用論説、相互作用説、カテゴリー包含説が主要な説である。その後、Lakoff ＆ Johnson（1980）は、メタファーの研究を一新させ、メタファーの本質は、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を理解するものと解釈し、概念メタファー（Conceptual Metaphor）の理論を提唱した。それによれば、メタファーは、喩えるものが存在する領域、即ち起点領域（モト領域）から、喩えられるものが存在する領域、即ち目標領域（サキ領域）への領域間の写像である。次の例文を見てみる。

（31）　新しい人生の<u>出発点</u>に立つ。
（32）　人生の<u>交差点</u>には信号も標識もない。
（33）　人生は<u>終点</u>が見えない旅である。

我々は「旅」という具体的な概念を用いて、「人生」という抽象的な概念を理解する際、旅の構造としての「出発点」「交差点」「終点」を、それぞれ人生の中に起きる出来事に対応づけ、写像させている。写像関係を図で示すと、図 2-10 のようになる。（31）～（33）は LIFE IS A JOURNEY＜人生は旅＞という概念メタファーに基づいて生まれたメタファー表現である。本研究では、概念領域間の対応関係を＜概念メタファー＞と呼び、概念メタファーを具現化したものを「メタファー表現」と呼ぶ。また、起点領域と目標領域を関連つける語（出発点、交差点、終点）を「媒介語」と呼ぶ。

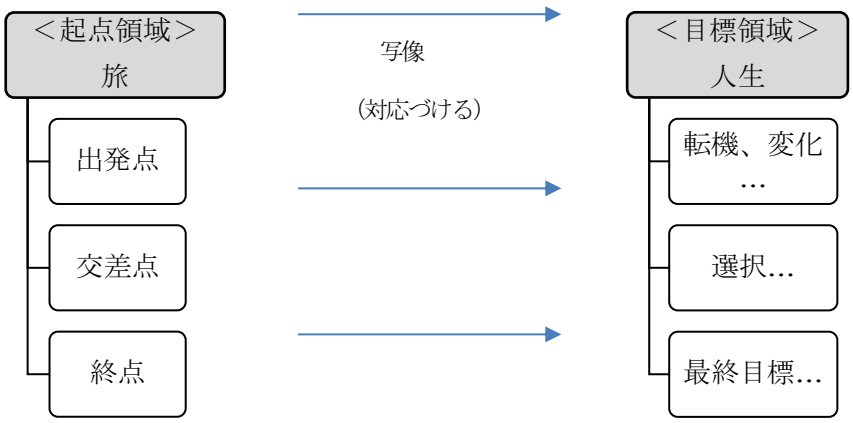

図 2-10　<LIFE IS A JOURNEY>の写像

鍋島（2011）に従い、概念メタファーを「起点領域と目標領域の写像（構造的対応関係）」と定義する。＜起点領域＞は具象的で表現しやすく、経験豊かな事物で、＜目標領域＞は抽象的で表現しにくく、身体的な経験があまりない事物である（鍋島 2011）。領域はまた source domain、モト領域、根源領域と呼ばれ、目標領域はまた target domain、サキ領域と呼ばれることがある。

2.2.3　メタファーの種類

概念メタファーの理論では、メタファーを異なる領域間の概念的写像の実現として考える。しかし、実際の用例を見ると、メタファー性に段階の差が見られる。次の例文を見てみる。

(34)　He held five icicles in each hand.
(死んだ男のどちらの手にも氷柱が 5 本下がっていた)

(35)　The wind was whispering through the trees.（木々を渡る風がささやいていた）

(36)　He attacked very weak point in my argument.
(彼は私の議論の弱点をことごとく攻める)

(37)　crane（鶴、起重機）

(38)　pedigree（鶴の爪×→家系図）

Deignan（2005）、渡辺他（2010：47-56）から引用）

（34）では、icicles の字義通りの意味は氷柱であるが、文脈上の意味は死んでいる人の指を指している。死んでいる人の指を氷柱に喩えている。このような「革新的なメタファー（innovative metaphor）」は非慣用的で、本来文学表現としてよく使われている。それに対して、（35）では、風の音を人が囁くように理解し、人間以外の存在を人間のように見立ている。それは擬人法に基づくメタファーである。

（36）では、attack は多義語であり、「敵を攻める」と「相手の論点を攻める」という二つの意味は共に日常的によく使われている。attack の字義通りの意味は戦争や試合など勝ち負けがある場合、相手の軍隊、チームを攻めて、相手を破り、負けさせようとする具体的な動きである。こうした動きが具体レベルから抽象レベルへ拡張し、相手の論点を破り、成り立たせないようにすることを attack という。文脈上の意味、つまり比喩義は字義通りの意味から発展してきており、比喩義は字義通りの意味に依存している。

（34）と比べて、（35）（36）は一般的によく使われていて、「慣用化したメタファー（conventional metaphor）」である。

（37）では、crane は「鶴」と「起重機」の二つの意味を持っている。「鶴」から「起重機」への意味拡張の動機付けを考えた場合、外見の類似性に注目すると一般の人が理解できる。しかし、指摘されない限り「鶴」と「起重機」はそれぞれ違う単語（同音異義語）として使われる傾向がある。現在では「起重機」という比喩義は中核的意味「鶴」に依存しないと一般に認識されており、それは「死んだメタファー（dead metaphor）」といわれる。

（38）では、pedigree の歴史的な意味は鶴の爪であり、現代ではその拡張義である家系図が字義通りの意味として使われている。Deignan（2005）では、このようなメタファーを「歴史的なメタファー（historical metaphor）」と呼んでいる。要するに、一言でメタファーと言っても、メタファー性（革新的なメタファー、慣用化したメタファー、死んだメアファー、歴史的メアファー）に差が存在する。Deignan はコーパス言語学の手法を使い、メタファーの種類と認定基準を表 2-8 のように提示している。

表 2-8　言語表現の認定と分類（Deignan 2005、渡辺他 2010 の翻訳を参考）

メタファーの種類	認定基準
1.革新的メタファー （34）　icicles →氷柱	語のコーパス用例 1,000 件中 1 件未満、あるいは用例すべてが同一出典からの場合。
2.慣用化したメタファー （35）　whisper →囁く （36）　attack →攻める（論点）	革新的メタファーと歴史的メタファーの認定基準に照らし、革新的でも歴史的でもないもの。コーパス言語学あるいは意味論の基準に照らして、比喩義は中核的意味に依存する。
3.死んだメタファー （37）　crane →鶴、起重機	革新的メタファーと歴史的メタファーの認定基準に照らして、革新的でも歴史的でもないもの。コーパス言語学あるいは意味論の基準に照らし比喩義は中核的意味に依存しない。
4.歴史的メタファー （38）　pedigree →鶴の爪× →家系図○	以前の字義がコーパスに示されない、もしくは意味がかなり変化し、現代の言語使用者には同音異義とみなされない場合。

この認定基準はある程度メタファーの種類を明確化しているが、いくつの問題点が残っている。まず、革新的メタファーについて、Deignan の認定基準では量的な目安が決められている。しかし、実際的な認定手続きを考えると、以下のような問題がある。まず、コーパスで同じ表現を使う語句を抽出する。次に、その表現はメタファーであるかどうか抽出した語句をすべて確認し、選定する。最後に、メタファーと認定される語句の数を全表現数で割って、1000 倍に結果を計算する。その上で革新的メタファーの認定基準に照らし合わせ、メタファーであるかどうかを認定するのであるが、その認定方法はコーパスの規模によって操作不可能な部分がある。万単位の用例を手作業で判定するのは現実的には不可能に近い。

次に、歴史的メタファーの認定基準では、以前の字義はコーパスに現れないと述べているが、それはコーパスの年代と規模によって実現可能性が異なる。具体的に言うと、50

年前までのデータを用いて構築しているコーパスと、100 年前までのデータから構築しているコーパスで調べると、異なる結果が出る可能性がある。さらに革新的メタファーの認定基準と同じように、個々の用例を判定するのは難しい。

さらに、慣用化したメタファーと死んだメタファーの認定基準ではまず革新的なメタファーや歴史的メタファーでないことを判断した上で認定を行うとしている。上記のような、革新的、歴史的メタファーの 2 種類の認定が難しい状況では、慣用化、死んだメタファーの認定も当然困難になるだろう。要するに、単に Deignan（2005）の認定基準では操作不可能な部分が多いのである。メタファーをどのように認定するか、どのような種類があるについて、改善が必要である。

2.2.4　メタファーの認定手順

前述のように Deignan（2005）のメタファーの認定基準についてはさらに検討する余地がある。しかし、彼が述べた言語メタファー研究における理想モデル構築のための 2 点の注意事項がメタファーの認定手順の構築にある程度方向性を示してくれる。以下はこの 2 点の注意事項を述べる。第一に、その語に字義通りの意味が存在しているかいないかを判断することであり、これによって歴史的に比喩化した表現とそうでないメタファーを区分することができる。第二に、領域間の組織的な言語表現の写像関係があるかないかを判別する。孤立的に非字義的意味で用いられる「一回限り」のメタファーは概念メタファーの写像の一部でしかないので、概念メタファー理論の伝統に軽視される傾向があるからである。本研究は Deignan（2005）の議論を踏まえて、以下の方向でメタファーの認定手順を考える。

Deignan（2005）の 2 点の注意事項から、メタファーを認定するには何段階かの手順が必要であることが明らかになっている。メタファーの認定手順は、まず、ある言語表現がメタファーであるかどうかを判別する。次に、2.2.2 で述べた概念メタファーの定義に基づき、起点領域と目標領域の写像が成立するかどうかを判断する。さらに、2.2.3 で述べたように、メタファー性は何段階かに分けられるため、どんな種類のメタファーにどのような特徴があるのか、その特徴はどのように認定手順に反映すればいいのか、といった点に注意すべきである。

メタファーの認定基準について、他に Pragglejaz Group（2007）（Metaphor Identification Procedure, 以下 MIP2007）の研究がよく挙げられる（Low 2010；鍋島・中野 2016）。Pragglejaz Group（2007）は、メタファーは以下の認定手順を示した。

1. テキスト全体を読む
2. 語の区切りを決定する
3.
   3a. それぞれの語に対して、文脈上の意味を決定する
   3b. それぞれの語に対して、基本義を決定する
   3c. もし文脈上の意味（a）と基本義（b）の間に乖離がある場合、その乖離が対照であり、かつ、比較によって理解できるか判定する。
4. できる場合、メタファーと認定する

鍋島・中野（2016）の日本語訳を参考

鍋島・中野（2016）は、MIP2007 の認定基準の用語の不透明性と写像の概念が排除されているといった問題点を指摘し、理想のメタファー（MIPi）認定基準はどうあるべきかを検討した。しかし、具体的な認定手順は示されていない。そこで、本論文の第 4 章では、メタファー認定手順を提案し、詳しく論じる。

2.2.5　概念メタファーの日中比較

言語が異なることによって、概念メタファー、イメージ・スキーマにおいてズレが生じる可能性がある。Yu（1995）は、英語と中国語に存在する「怒り」のメタファー表現を比較し、両言語は、＜怒りは火＞という中心的な概念メタファーを共有しながら、英語のメタファー表現は＜怒りは水＞に偏り、中国語のメタファー表現は＜怒りは気＞に偏ることを指摘している。その例として、英語では、“He is breathing fire”のような例がある。中国語では“七窍生烟（目・耳・鼻・口から煙が出る）”、“怒气冲冲（ぷんぷんと怒る）”などの表現を挙げている。また、中国語のメタファー表現は体内の臓器と関連しているのが特徴的で、それは古代中国哲学の陰陽自然観、及び漢方薬の五要素に関わって

いるとしている。例えば、“他大动肝火”（He got flamed up in liver/He flew into a rage）である（Yu 1995：62）。

Yu（1995）、谷口（2003）の結果から、両言語の概念メタファーを比較するとき、①起点領域あるいは目標領域、及び②イメージ・スキーマにズレが生じる可能性がある。そのため、学習者が目標言語（L2）を学習する際に、同じ概念メタファーに基づく言語表現であれば、母語（L1）の知識を転用して学習を進めることが予想できる一方、概念メタファーの具現化は母語と目標言語で対応していない場合、母語からの転用は誤用を引き起こすことが予想される。

2.2.5.1 ＜思考＞メタファー

＜思考＞メタファーに関する先行研究としてLakoff ＆ Johnson（1999）、鍋島（2004）、松井（2007、2010）、Yu（2003、2009）、韓（2014）などが挙げられる。論点は「考えそのもの」と「考えと身体部位との関係」に分類される。

まず、「考え」という抽象的な概念を具体的なものの存在と捉え、「考え」を「形があるもの」に喩える点で、日英中で共通性が見られる。例えば、考えがまとまりのない状態を表す時、「考えがバラバラ」、“零碎的想法（バラバラな考え）”、“ideas fall apart”のような日英中で似たような表現がある。

次に、「考え」を「食べ物」に喩え、人の体に取り入れることが理解することだとみなす点でも、日英中も共通性が見られる。＜理解することは消化することである＞/日/（鍋島 2004）、＜考えは食べもの＞、＜アイデイアを獲得することは飲食すること＞/中/（韓 2014）、＜Acquiring Ideas Is Eating＞/英/（Lakoff ＆ Johnson1999）が挙げられる。

さらに、韓（2014）では、中国語における＜思考＞メタファーの体系は以下のようにまとめられている。表 2-9 からわかるように、中国語における＜思考＞のメタファーは（I）＜考えは物理的なもの＞、（II）＜考えることは身体行為＞という 2 つの上位メタファーに大別されたうえで、それぞれのメタファーはさらにいくつかのサブメタファーに分けられる。

表 2-9　中国語における＜思考＞メタファーの体系（韓 2014：138）

上位メタファーの種類	サブメタファーの種類
(I)　考えは物理的なもの	考えの性質は物理的なものの性質； 考えは力； 考えは植物； 考えは食べ物； 考えは液体； 考えは火
(II)　考えることは身体行為	考えることは動くこと； 考えることは知覚すること； 考えることは対象物を操作すること； アイディアを獲得することは飲食すること

以上の先行研究から３つの問題点が残されている。一つ目は、身体部位のどこが考えを知覚するかという点において、日英中には差異が見られる。Yu（2003）は中英を比べ、＜THINKING IS MOVING＞＜THINKING IS SEEING＞の２つの概念メタファーを挙げ、空間移動と視覚感知という身体経験が中英＜思考＞メタファーに根ざしていると述べている。そして、中国語では、考えを行う場所が“脳（脳）”や“心（心）”であることを指摘している。

図 2-11 のように体を容器として捉え、考えが容器を出入りすることで、考えを知覚することを考える場合、【起点–経路–終点】スキーマ、【容器】スキーマがこの２つの概念メタファーを支えている（Yu 2009）。

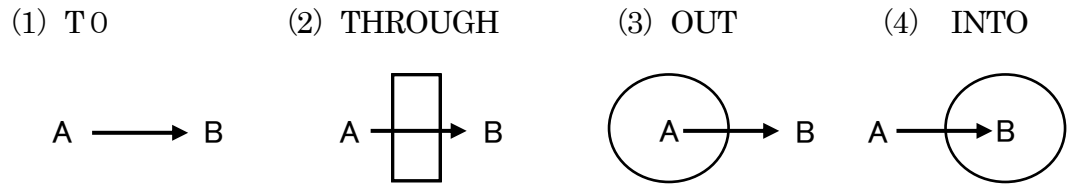

図 2-11　＜思考＞メタファーのイメージ・スキーマ（Yu 2009：106）

一方、松井（2007、2010）では、知性、思考、感情などの心的現象が、日本語と英語において身体のどの部位で生ずるかについて考察している。その結果、英語では、取り入れ先が明示されていない場合もあるが、日本語では、常に「頭」か「腹」であると述べている。

以上のように、身体部位のどこが知覚器官であるかについて、日本語と中国語において違いがあることがわかる。中国語では、“头（頭）”と“脑（脳）”を使い分ける。“头”は具体的な身体部位を表し、“脑”は具体的な身体部位を表す他に、思考を司とる身体部位である。例えば、中国語では、“用脑想（脳で考える）”とは言うが、“*用头想（頭で考える）”とは言わない。一方、日本語では、「脳で考える」より「頭で考える」の方が容認度が高い。TWC では「頭で考える」は 2920 例で、「脳で考える」は 54 例しかない。「脳」より「頭」の方が考えを知覚する器官と言える。そのため、＜思考＞メタファーに基づく表現が日中間において、目標領域にズレが生じることが予想される。韓（2014：92）では、中国語では、＜頭は考えを入れる容器＞であると述べている。しかし、実際に挙げている中国語の用例はすべて“脑”に関する表現である。つまり、韓（2014）の研究は修正する必要がある。

二つ目は、韓（2014：92）では、中国語では、＜頭は考えを入れる容器＞であると述べ、容器の種類として、密封容器、スクリーン、ろう板などを挙げている。山梨（2000：144）は、【容器】スキーマには、ある限定された空間に中味がつまっているかどうか、ある空間領域の内か外か、表か裏かといった側面があることを指摘している。考えが頭を出入りすることで、考えの知覚を言語化するが、それは【容器】スキーマによって支えられている。しかし、スクリーンとろう板といった起点領域は、考えが頭にあるかどうか、出入りするかどうかより出現・消失、頭に刻むことを焦点化している。よって【容器】スキーマの特徴が見られないため、同じ概念メタファーにまとめるのは妥当ではない。

三つ目は、韓（2014）が挙げている＜考えることは動くもの＞に関する用例を見る。

（39）　<u>动</u>脑筋（頭を働かせる）

（40）　<u>转</u>念头（思案をめぐらす）

（41）　脑子<u>转得快</u>（頭の回転が速い）

（42）　脑袋<u>变浆糊</u>了、想不通了

（頭が回らなくなり（直訳：のりになる）、納得できなかった）

（43）　真是个木头脑袋、和你说都说不明白了

（頭が固い（直訳：頭が木でできている）、いくら説明してもわからないなんて）

韓（2014：133）、引用者により一部修正[11]

（39）から（43）では、＜考えることは動くもの＞のサブメタファーの＜考えることはものの動き＞の例として挙げられている。韓（2014）では、＜頭は容器、考えは内容物＞として捉える場合、＜内容物＞がさらさらの液体であれば、＜内容物＞は自在に回るため、このような写像メタファーができたと述べている。しかし、（39）から（43）の中で（42）だけは液体との関連が見られるが、ほかの用例は液体との関係を連想するのは困難である。本論文の第5章では、＜思考＞メタファーに関して日中の違いについてさらに検討する。

2.3　コロケーションに関する先行研究

2.3.1　コロケーションの定義と構造

コロケーションは「語群」「連語」「語結合」とも言われる。国広（1985）は、２語以上の語の結びつきを、その連結の固定度と意味の慣習化によって、慣用句、連語、普通の句に区別している。そして、コロケーションの種類を以下の表2-10のようにまとめた。表2-10の「油を売る」のような表現は、語が固定的な結びつきで特定な意味を表すものである。いわゆる慣用句と呼ばれ、構成要素の部分の意味から慣用句の意味が予想できないものである。それに対して、「本を読む」は「本を返す・買う・借りる」、あるいは「小説・日記・宿題を書く」のように、語が自在に組み合わさり、構成要素の部分の意味から句全体の意味が予想できるものもある。これは、いわゆる「普通の句」である。最後に、「手に入れる」のような連語は、構成要素の部分の意味から全体の意味が予想できるが、語の結びつきがある程度固定されている。

[11]　（43）の日本語訳を修正している。

表 2-10　語と語の結びつきと意味の慣習化との関係

	慣用句 （油を売る）	連語 （手に入れる）	普通の句 （本を読む）
語の結びつき	固定	固定	自由
意味の慣習化	固定（推測不能）	ない（推測可能）	ない

Cowie & Howarth（1996）は語の結び付きを、コロケーションの概念レベルが上がるごとに変異性と複雑性が増す 4 つのレベルに分けている。以下の表 2-11 の（a）は国広の分類の中の連語に当てはまる。語と語の結びつきが固定で、部分の意味から全体の意味が推測できる。（b）、（c）、（d）は国広の「普通の句」をさらに精緻化しているものである。

表 2-11　Sub-types of collocation（Cowie & Howarth 1996）

(a) INVARIABLE COLLOCATION
break a journey
foot the bill
(b) COLLOCATION WITH LIMITED CHOICE AT ONE POINT
take/have/be given precedence (over NP)
give/allow/permit access to NP
have/feel/experience a need (for NP)
(c) COLLOCATION WITH LIMITED CHOICE AT TWO POINTS
find/experience trouble/difficulty in DOING NP
get/have/receive a lesson/tuition/instruction (in NP)
(d) OVERLAPPING COLLOCATIONS
convey a point → convey regrets
express argument →express condolences
communicate view → *communicate regrets
get across opinion → *get across condolences

Cowie & Howarth は「（b）のコロケーションは、意味が似通った特定の語によって埋められるスロットが１つあり（take/have/be given precedence （over NP））、（c）のコロケーションはスロットが２つあり（find/experience trouble/difficulty in DOING NP）、変異性と複雑性が増している」と述べている。さらに、（d）のコロケーションは最も複雑で、興味深いと述べている。具体的には、convey、express、communicate、get across は「メーセッジを相手に渡す」という意味があり、convey と express は regret と condolence が共起できるが、communicate と get across は共起できない。しかし、なぜスロット内で言葉の置き換えができるのかについて、Cowie & Howarth（1996）では言及されていない。

野田（2007）は、コロケーションを文法的なコロケーションと意味的なコロケーションに分けて、文の構造からコロケーションを考察している。まず、文法的なコロケーションとは、「しか～ない」のように、ある語（または成分）が他の語（または成分）の文法的なカテゴリーを選択し、限定するものである（野田 2007：19）。一方、意味的なコロケーションは、ある語（または）成分が他の語（または成分）の意味的なカテゴリーを選択し、限定するものである。例えば、「焼肉を食べた」が言えるが、「*ビールを食べた」とは言わない。野田（2007）の分類はコロケーションの中身をより明確にしている。

野田（2007）は、意味的なコロケーションと文法的なコロケーションの違いを以下のように述べている。意味的なコロケーションは、文法的なコロケーションに比べて、「このようにする傾向がある」という弱いものが多い。意味的なコロケーションに反していても、比喩的な表現や擬人的な表現として成り立つことも多いと述べている。例えば、「蒸気機関車は石炭を食べて走るんだ」である。つまり、前述したコロケーションの恣意性の観点から考えると、意味的なコロケーションは文法的なコロケーションより恣意性が高く、多くの場合比喩的な表現や擬人的な表現と関わっている。

本論文は意味的なコロケーションに焦点を当て、特になぜ意味的なコロケーションはこのようにする傾向があるかの（恣意性）についてさらに探っていきたい。また、比喩といえば、本体（比較されるもの）と喩体と（比較するもの）からなっている。どんな本体がどんな喩体に喩えられるかのかということが明らかでなく、また、本体を喩体に喩えて生まれる意味が文化によって異なるので、そこから生まれる言語間の恣意性も学習者にとって一つの難関だ考える。

Wolter（2006）は、学習者の母語（L1）と目標言語（L2）のコロケーションの習得の関係について、L1 の語彙的／概念的知識が学習者が、L2 語彙間での結合を体系づける際に、助けになるとともに妨げにもなると述べている。例えば、形容詞が名詞を修飾するという選択的関係は日中に共通することであり、学習者に教えなくても学習者が L1 の語彙的／概念的知識を利用して、L2 の「形容詞＋名詞」のコロケーションが習得できる。選択的関係は学習者の学習に助けになるが、統合的関係は学習者の学習を妨げる。なぜなら、曹・仁科（2007）で挙げられている中国人学習者の誤用例を考えてみると、「*能力が強い」を「能力が高い」としてしまう例のように、選択的関係は基本的にどの言語使用者でも同じであるが、統合的関係は既存の母語の語彙ネットワークの再構築を要求するからである。つまり、統合的関係は学習者のコロケーション習得において一つの難点である。

以上の先行研究を踏まえて、本論文では、コロケーションを「ある言語コミュニティーのメンバーに慣習的に使われ、文法的に、あるいは意味的に繋がりを持つ複数の語の連合」と定義する。

2.3.2　概念メタファーとコロケーションとの関係

鍋島（2011）は、「勇気が湧く」、「気持ちが溢れる」、「怒りに満ちる」のような表現は、＜感情は水＞という概念メタファーに基づいていると述べている。「勇気、気持ち、怒り」は目標領域＜感情＞に属しているため、自由に置き換えることが可能である。また、「湧く、溢れる、満ちる」は起点領域＜水＞に属しているので、自由に置き換えられる。なぜなら、それは Cowie ＆ Howarth のスロットの言葉で置き換えて考えてみれば、＜感情＞という目標領域と＜水＞という起点領域はそれぞれ一つのスロットに相当するからである。目標領域と起点領域は固定されているが、領域内に属する言葉であれば置き換えられる。つまり、概念メタファーの構造から、我々はなぜスロット内の言葉が置き換えられるのか、またなぜ前のスロットが後ろのスロットとの結びつきが要求されるのかが理解できる。

近年、概念メタファーに基づく指導法はコロケーションの習得に効果があるという研究が見られる（Kövecses ＆ Szabó 1996、Boers 2000、鐘・井上 2013）。Kövecses ＆ Szabó（1996）は、up、down が含まれる英語のコロケーションの習得実験を行なった結果、＜MORE IS UP＞、＜HAPPY IS UP＞といった概念メタファーを意識させた実験

群は統制群より即後のテストの正解率が約 9%上回っていると報告している。また、鐘・井上（2013）は「上・下」に関する概念メタファーを用いて、暗記法と概念メタファー理論を生かした応用認知学的な指導法の授業効果を比較している。後者からは事後テストにおいて既習の表現だけでなく、同じ「上・下」の概念メタファーに関わる未習の表現の正答率も高いという結果が得られている。つまり、概念メタファーは目標言語にあるさまざまな語彙表現の記憶と理解を促し、外国語学習者のコロケーションの習得促進に繋がると考えられる。

また、コロケーションの誤用の原因について、従来中国人日本語学習者のコロケーションの誤用の原因は主に母語の直訳によるものだと言われている（曹・仁科 2006b、2007；小森他 2012；李 2016）。その原因は日本語と中国語は似たような漢字が多く、学習者が母語（L1）の語形、音韻、意味的、統語的知識を利用し、目標言語（L2）のコロケーションを習得していくからだと考えられる。しかし、実際には母語にない、つまり非直訳による誤用も起きているが、その原因についてまだ明らかになっていない。

佐竹（2015）は、学習者が「動詞＋名詞」コロケーションを過剰使用または過少使用しているかどうか、よく使用される不自然な「動詞＋名詞」の組み合わせがあるか、「動詞＋名詞」コロケーションや不自然な組み合わせの使用は習熟度に応じて変化するかどうかについて、日本人英語学習者コーパスと英語母語話者コーパスを比較して調べている。その結果、先行研究と一致している結果が示されており、学習者が使用するコロケーションが母語話者が使用するコロケーションより少ないことが明らかになった。次に、学習者が産出している「動詞＋名詞」のコロケーションは、母語の転移による正しい産出もあれば、不自然な産出も見られる。不自然なコロケーションの割合は、習熟度が上がるにつれ、増加することが明らかになった。佐竹（2015）は、学習者のコロケーションの産出は母語の正転移や負転移の影響を受けつつ、産出している不自然なコロケーションは主に母語の直訳によるものだと指摘している。母語の直訳問題に関して、李（2016）で詳しく論じている。

李（2016）は、「名詞＋を＋動詞」のコロケーションについて、中国人日本語学習者を対象に、学習者作文コーパスに基づいて、学習者の日本語能力とコロケーションの使用状況、及びコロケーションの誤用傾向を調べている。

まず、李（2016）では、コロケーションの使用状況に関して、日本語能力レベル別、語彙能力レベル別と文法能力レベル別で分析したところ、日本語能力レベルに比例してコ

ロケーションの産出量が増えなかったが、日本語の語彙能力、文法能力レベルに比例してコロケーションの産出量が増えていることが示されている。しかし、初級、中級、上級のグループ間において有意差は見られなかった。また、日本語能力、語彙能力、文法能力レベルに比例してコロケーションの正用率が上がらなかった。逆に、上級になるにつれて、誤用率が上がっている。つまり、コロケーションの産出能力の発達は第二言語の一般的な能力に比べて遅れていることが示された。

次に、李（2016）は、コロケーション誤用の種類を「共起」「造語」「文法関係」「その他の誤用」「共起＋造語」「共起＋文法」に分けている。「共起」タイプの誤用は81 項目で誤用全体（174）の約半数を占めており、最も誤用しやすいタイプであることを示した。さらに、「共起」タイプのコロケーションの誤用を対象に、母語の影響を検証したところ、47 項目（約 60%）の誤用表現は母語の直訳によるものであることを示した。しかし、母語にない語と語の結びつき、つまり、非直訳のコロケーションの誤用の原因はまだ明らかになっていない。

李（2016）と佐竹（2015）では、それぞれ異なる目標言語を学習している学習者を調査対象にしているにも関わらず、①習熟度が上がるにつれて、間違っているコロケーションや不自然なコロケーションの数が増えること、②母語の直訳がコロケーションの誤用を引き起こす主たる原因であることの 2 点において合致している。つまり、L2 学習者が中上級になったらコロケーションを産出する能力が伸びていないことが伺える。そして、誤用の原因は母語の直訳の影響が大きいことが読み取れる。しかし、母語の直訳ではなく、ほかにコロケーションの誤用を引き起こす要因があるのか、別の角度からコロケーションの構造や習得を研究する必要がある。

直訳とコロケーションの処理に関して、Yamashita ＆ Jiang（2010）の実験は注目に値する。Yamashita ＆ Jiang（2010）では、直訳した日英一致する 24 のコロケーション（make lunch、 heavy stone）と、直訳して日英不一致する 24 のコロケーション（kill time）及び 48 個の存在しないコロケーション、の正誤判断の処理時間と正解率を調べている。母語話者と比べて、EFL、ESL の処理時間が ESL>EFL の順で長いことがわかった。また、直訳が対応しているコロケーションと比べて、EFL だけが直訳不一致のコロケーションの方が処理時間が有意的に長い。さらに、処理の誤用率については、ESL、EFL 共に直訳不一致のコロケーションの処理時間が有意に長い。同じく、ESL より EFL の方が、誤用率が高い。 実験の結果は母語の正転移の効果を明らかにしたうえ

で、目標言語環境で第二言語を学んだ学習者の処理時間が短いことから、大量インプットがコロケーションの理解に繋がることを示している。

しかし、大量のインプットは必ずしもコロケーションの学習効果に繋がるとは限らない。Webb, Newton ＆ Chang（2013）では、繰り返しはコロケーションの学習に及ぼす効果を調べた結果、即後のテストでは同じコロケーションに 15 回出会った場合、コロケーションのフォームと意味理解の点数が 10 回、5 回、１回、０回出会った場合より有意に高いことがわかった。しかし、遅延テストの結果では繰り返しによる学習効果が認められなかった。つまり、頻度だけでは学習者のコロケーションの習得が促進できるとは言い難い。

Szudarski ＆ Carter（2016）はインプット・フラッド（input flood）とインプット強化（input enhancement）の効果を調べている。その結果、インプット・フラッドにインプット強化（ターゲットコロケーションに下線を引く）を加えることで、コロケーションの習得を促進することが明らかになったが、ただフォームリコールとフォーム認識のレベルに限り、コロケーションの意味理解を促す効果が見られなかった。つまり、Liu（2010）が述べたように、認知的、言語学分析の知見を無視し、単なる「注意–記憶」ストラテジーでコロケーションをチャンクとして教えることはコロケーションの意味理解と産出には繋がらない。

では、コロケーションはいかに習得されるのだろう。李（2016）はコロケーションを大きい語彙として捉えれば、中国人日本語学習者のコロケーション習得のプロセスは Jiang（2000）の L2 語彙習得モデル（図 2-12）に当てはまると述べている。

Jiang（2000）では、L2 の語彙発達は３つの段階に分けられる。第一段階は、新しい L2 語彙項目が作られ、音韻と表記の形式情報（formal specification）しかなく、しかも孤立した存在である。L2 と概念リンクがなくて、L1 を経由して概念にアクセスできる。第二段階は、L2 の音韻と表記の形式情報と L1 の意味・統語（lemma）を徐々に統合する。L2 から概念にアクセスできるが、その結びつきが弱い。第三段階、L2 の独自の lexeme と lemma が確立される。L2 から概念にアクセスできる段階である。

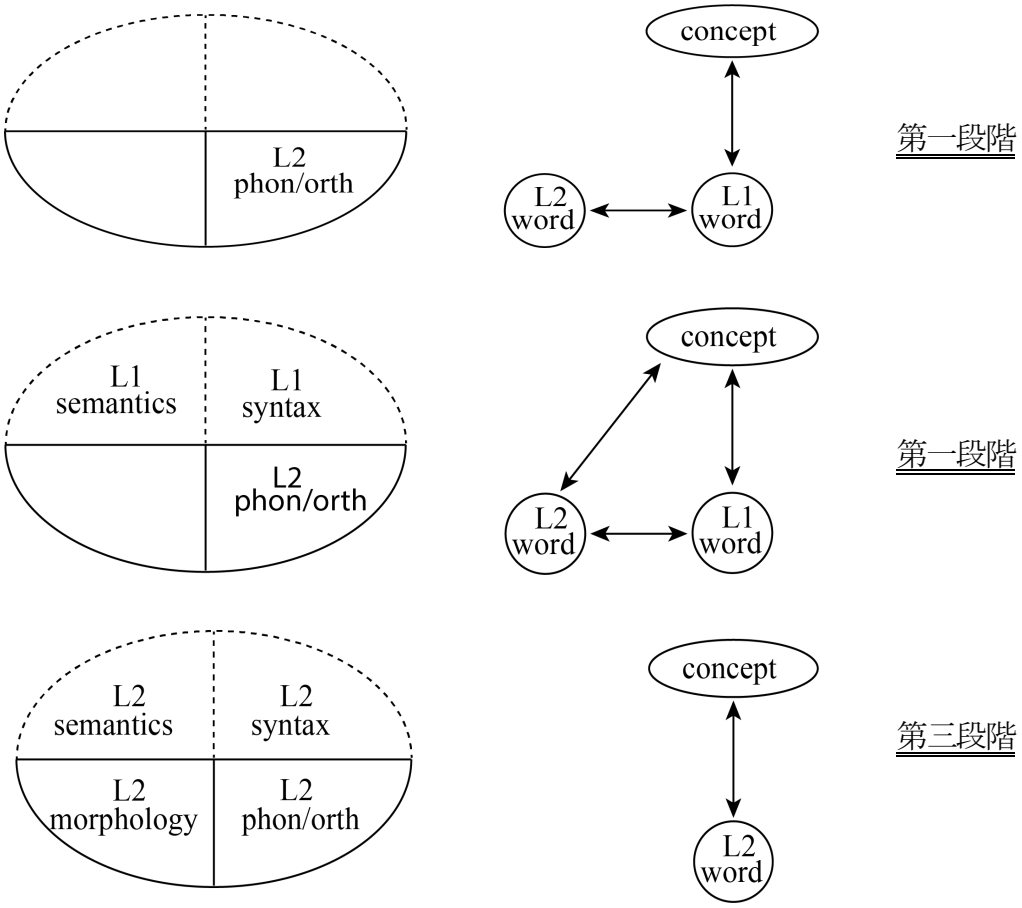

図 2-12　Jiang（2000）L2 語彙習得モデル

しかし、以下の２つの疑問が浮かぶ。１つ目は、コロケーションを大きい語彙として捉えてよいかどうかということである。コロケーションが語彙と最も異なるところは、コロケーションは語と語の結び付きで、恣意的なものではなく、概念メタファーによって支えられていることである。そのため、本稿で検証したように、コロケーションの産出は母語と目標言語の一対一の直訳より、母語の概念メタファーに影響される。2 つ目は、母語の直訳ではない誤用についてである。確かに日本語と中国語は似たような漢字が多く使われるので、学習者が L1 の形式情報、意味的、統語的知識を利用し、L2 を習得していくだろうと考えられる。しかし、母語に直訳できないコロケーションの誤用について、Jiang（2000）のモデルでは、その誤用の原因について説明できない。例えば、李（2016）で扱う誤用例から以下のものが観察される。

（44）　直訳-「興味を培養する」（李 2016：190）

（45）　非直訳-「興味を抜く」[12]

中国語では、学習者の興味を育てるという意味を表す時、“培养兴趣（興味を培養する）”という。（44）「*興味を培養する」は母語の直訳だが、（45）の「*興味を抜く」は中国語に訳して、“*拔兴趣”という間違った表現となる。つまり、（45）は母語の直訳ではない誤用である。このような誤用はJiang（2000）のモデルで説明できない。上記のように、第二段階のL2習得は、L1の意味、統語知識に頼っている。言い換えれば、L1の意味・統語と直接的に関連が見られず、傾向的に現れるL2の誤用について、Jiang（2000）のモデルは無効になる。本論文の第6章では、概念メタファーの観点から＜興味＞を目標領域とする概念メタファーの日中の異同を論じる。

2.3.3　メタフォリカル・コンピテンスと概念誤用

Danesi（1993）は、以下のように、学習者がL1の概念構造に基づき、L2の語彙、文法構造を用いてL2を産出している現象を指摘し、概念流暢性（Conceptual Fluence、CF）の重要性を強調した。

概念流暢性は認知的マッピング操作（cognitive mapping operation）という。それは、複数のストラテジーを含み、感覚経験を概念化の世界にマッピングすることを意味している（Danesi 2008）。例えば、（46）～（48）は＜人生は旅＞という概念メタファーに基づくメタファー表現である。

（46）　新しい人生の<u>出発点</u>に立つ。

（47）　人生の<u>交差点</u>には信号も標識もない。

（48）　人生は<u>終点</u>が見えない旅である。

我々は「旅」という具体的な概念を用いて、「人生」という抽象的な概念を理解する際、旅の構造としての「出発点」「交差点」「終点」を、それぞれ人生の中に起きる出来

[12] 李（2016）では、直訳と判断された誤用表現の一覧表があるが、非直訳と判断された誤用表現の一覧表がない。（45）は、筆者が李（2016）での判断基準に基づいて、李（2016）と同じ学習者コーパスを使い、非直訳の誤用例として選び出すものである。

事に対応づけ、写像させている。このような起点領域と目標領域のマッピング操作の流暢性が概念流暢性である。

Danesi（2008：234）では、起点領域と目標領域のマッピング操作の能力をメタフォリカル・コンピテンス（Metaphorical Competence、MC）として扱っている。MC は、「言語能力」（Linguistic competence）、「コミュニケーション能力」（Communicative competence）とともに、目標言語習得においては欠かせない要素と指摘している（Danesi 1993、1995、2008、2016）。

Danesi（2008：234）は、以下のように、MC を定義している。

MC は抽象的な概念を具体化し、適切なイメージ・スキーマおよび起点領域にアクセスする能力である[13]。

つまり、L2 を身につけるには、抽象概念を適切なイメージ・スキーマおよび起点領域に写像する能力を身につけることが重要である。MC に関する研究は、以下２種類に分かれている。１つはメタファー自体の理解、産出に関する研究である。Gardener & Winner（1978）、Pollio & Pickens（1980）及び Pollio, Smith & Pollio（1990）が挙げられる。これらの研究は、子供が研究対象であり、メタファー表現の理解力、新しいメタファー表現の産出力、更に、新しいメタファー表現の使用偏好などが研究されている。

もう１つは概念メタファー能力を第二言語習得分野に導入し、概念メタファー能力の高低と目標言語の習得関係を論じる研究である。Littlemore（2001）は、MC は①新しいメタファー表現の産出力、②新しいメタファー表現の理解流暢性、③新しいメタファー表現の意味を識別する能力、④新しいメタファー表現の意味を識別する速度、の４つの要素から構成される、と述べている。

Littlemore（2001）は英語学習者の MC 発達とコミュニケーション能力や認知スタイルの関連性などについて調査している。その結果、①全体的に MC の構成要素間（新しいメタファー表現の産出力、メタファー表現理解の流暢性、メタファー的な意味の識別

[13] 日本語訳は筆者による。原文は次のとおりである。“Metaphorical competence（as it has been called in previous work）is clearly, the ability to access appropriate image schema and source domains in the concretization of abstract concepts.”（Danesi 2008：234）

力、メタファー的な意味を識別する速度）の相関が強くないこと、②全体的に包括的認知スタイルの学習者が分析的認知スタイルの学習者より MC テストの得点が高いこと、③MC の各構成要素とコミュニケーション能力の間にほとんど相関が見られないことが明らかになった。

次に、Littlemore & Low（2006）は広く使われている Bachman（1990）のコミュニケーション能力モデルを用いて、言語使用と学習困難の例を提示しながら、コミュニケーション能力のすべての分野（文法能力、文章能力、発話内能力、社会言語学能力、ストラテジー能力）において、MC が重要な役割を果たしていることを論じた。また、第二言語学習では、初級から上級までメタファー能力は外国語学習、教育、試験に密接に関わっていることを示した。

前述のように、MC は抽象的な概念を具体化し、適切なイメージ・スキーマおよび起点領域にアクセスする能力である。L2 を身につけるには、抽象概念を適切なイメージ・スキーマおよび起点領域に写像する能力を身につけることが重要である。一方、ある抽象概念に対して L1、L2 の異なる写像が学習者の概念誤用（Conceptual Error、CE）を引き起こすと予想される。

Danesi（2008）は、L2 を身につけるには、L2 の言語構造だけでなく、L2 の概念構造（Concept System）を身につけなければならないと述べている。

L2 を身につけることは、単なる L2 を使用するのではなく、CS2（the conceptual system of the target culture）を通して L2 にアクセスすることを意味している。学習の初期段階では、学習者は無意識に CS1（the learner's native conceptual system）を通して L2 構造にアクセスしているが、その後、L2 に習熟すると、CS2 を通して L2 構造にアクセスすることができるようになる。しかし、これまでの研究で示されているように、L2 構造にアクセスすることは CS2 をすべて吸収し、さらにそれに直接アクセスする方法を明示的に教えた場合にのみ可能になる（Danesi 2008）。そうでない場合、学習者が産出した L2 は、言語表現として L2 の格好をしていながら、概念構造では CS1 のまま―（CS1）L2―である。たとえ語彙、文法知識が上級レベルに達しても、概念流暢性が依然として低いレベルのままなのである。つまり、L2 を身につけるには、（CS1）L2 から概念構造まで CS2 である（CS2）L2 へのシフトが必要だということである。したがって、学習者の誤用の分析には、概念誤用の観点が有効であるが、これまでの研究は、学習者の誤用を母語の直訳であるかどうかという言語転移（Linguisitic transfer）の問題とし

て捉えるに止まっている。L1 と L2 の「直訳」、「非直訳」の誤用に着目し、日中の認知の異同を論じる研究は管見の限りない。

2.4　研究課題と研究方法

課題 1：イメージ・スキーマにおいて、日中でどのような違いがあるのか。

1.1 【力】スキーマにおいて、日中でどのような違いがあるのか。

1.2 【容器】スキーマにおいて、日中でどのような違いがあるのか。

課題 2：どのように概念メタファーを認定するのか。

課題 3：概念メタファーにおいて、日中でどのような違いがあるのか。

3.1 ＜思考＞メタファーにおいて、日中でどのような違いがあるのか。

3.2 ＜興味＞メタファーにおいて、日中でどのような違いがあるのか。

本研究では、直観的言語分析と比べ、コーパスによる言語使用の観察には幾つかの利点があることをすでに述べてきた。コーパスによるコロケーションの習得研究や概念メタファーの研究も多く現れている（李 2016、劉 2017、韓 2014、後藤 2018 など）。本研究は認知言語学とコーパス言語学の知見を生かし、概念メタファーの日中の異同と学習者のコロケーションの誤用との関係を明らかにし、具体的に、日本語コーパス、中国語コーパス、学習者コーパスを利用する。

2.4.1　日本語コーパス

表 2-12　日本語書き言葉コーパス一覧

コーパス名	総語数	検索ツール
現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）	約 1 億 430 万語	「中納言」 「NINJAL-LWP for BCCWJ」
日本語歴史コーパス（CHJ）	約 1400 万語	「中納言」
近代語のコーパス（CHJ）	約 210 万語	「中納言」
筑波ウェブコーパス（TWC）	約 11 億語	「NINJAL-LWP for TWC」
国語研日本語ウェブコーパス（NWJC）	約 100 億語	「梵天」

本研究は現代日本語の書き言葉に現れている概念メタファーに基づくコロケーションを研究対象とするため、以下３つの条件を備える日本語コーパスのデータが望ましい。

① 現代日本語のデータを中心とするコーパス
② 同じ概念メタファーに基づくコロケーションが複数に現れることを前提に、総語数が多いコーパス
③ 日本語の使用実態を表し、コロケーションの頻度が自動的に集計できる検索ツールが備わるコーパス

以上のことを踏まえ、本研究は「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（以下、BCCWJ）と「筑波ウェブコーパス」（以下、TWC）を利用する。BCCWJ は、検索ツール「中納言」を利用する。TWC は、日本語母語話者の自然産出データを日本語ウェブサイトから収集し、構築した約 11 億語のコーパスである。TWC は検索ツール「NINJAL-LWP for TWC」（以下、NLT）を利用する。NLT は、国立国語研究所と Lago 言語研究所が共同開発したコーパス検索システム NINJAL-LWP（NINJAL-LagoWordProfiler）を利用している。このツールはレキシカルプロファイリングという手法を用いて、名詞や動詞などの内容語の共起関係や文法的振る舞いを網羅的に表示する

ことができる。また、各共起表現の度数は自動で集計されている。図 2-13 と図 2-14 は「筑波ウェブコーパス」検索画面と検索結果である。

図 2-13　NLT の検索画面

図 2-14　NLT の検索結果

2.4.2　中国語コーパス

表 2-13　中国語書き言葉コーパス一覧

コーパス名	総語数	検索ツール
現代漢語語料庫（CNC）	約 1900 万字	http://www.aihanyu.org/cncorpus/CnCindex.aspx
北京大学語料庫（CCL）	約 7 億字	http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/index.jsp?dir=gudai
百度学術（BDXK）	不明	http://xueshu.baidu.com/usercenter/show/baiducas?cmd=page

①現代漢語語料庫（以下、CNC）

CNC は、現代漢語語料（約 1900 万）と古代漢語語料（約 1 億字）からなっている。CNC の特徴として、品詞のタグ付け検索ができる。また、検索ツールがあり、検索結果がテキストファイルでダウンロードできる。

②北京大学語料庫（以下、CCL）

CCL は約 7 億語で、現代漢語語料（約 5 億）と古代漢語語料（約 2 億）からなっている。現代語料に当たるものは新聞雑誌、小説、説明文、法律、学術文献が含まれる。ウェブ検索が支持され、検索結果がテキストファイルでダウンロードできる。

③百度学術（以下、BDXK）

本研究は中国語の概念メタファーに基づくコロケーションを抽出するために、現在公開されている中国語のコーパスを利用する。しかし、日本語のコーパスと比べて、①と②のコーパスの現代中国語の語料の総語数が少ない。そのため、③百度学術も合わせて利用することにする。百度学術は無料で学術資源を検察することができるプラットフォームである。キーワード検索及びテキストマイニングなどの技術を生かして学術研究に貢献することを目的とする。百度学術は総語数不明だが、単なるウェブサイトでのキーワード検索で用例を抽出することと比べて、百度学術は出所、著者、出版年などの情報が明記されることが利点である。

よって、本研究は①②③のコーパスの特徴に合わせて利用する。

表 2-14　日本語学習者コーパス一覧

コーパス名	元データ	検索ツール	添削	学習歴	日本語レベル	テーマ	学習者作文数	母語話者作文数	総文数
寺村誤用例集データベース	×	○	○	×	×	8 種類	×	×	3131
オンライン日本語誤用辞典	×	○	○	○	○	11	40 編	×	654
学習者作文コーパス「なたね」									
作文対訳コーパス	○	×	×	×	×	10	1669 編	66 編	不明
日本語学習者作文コーパス（JC）	○	○	○	○	○	2 種類	304 編	×	不明
日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース	○	×	○	○	○	1 種類	112 編	134 編	不明
JCK 作文コーパス	○	○	×	×	○	3 種類	120	60	×
学習者中間言語コーパス	○	×	×	○	×	不明	不明	×	不明
多言語母語の日本語学習者横断コーパス	○	○	○	○	○	6 種類	不明	50	不明
Lang-8 Corpus of Learner Japanese	○	×	○	×	×	不明	不明	×	490,330
日語学習者書面語語料庫	×	○	○	○	×	不明	1931 編	×	不明

2.4.3　学習者コーパス

表 2-14 は現時点（2018/05/08）で公開されている中国人日本語学習者を含む日本語学習者コーパスである。研究は自然産出に現れる語と語の結びつきの誤用を研究対象とするため、以下の 3 つの条件を備える学習者コーパスのデータが望ましい。

① 形態素分析に適する元データが公開されていること
② 母語話者による添削結果が公開されていること
③ 同じ概念メタファーに基づくコロケーションの誤用が複数に現れることを前提に、作文数及び総文数が多いこと

以上ことを踏まえ、本研究は「日本語学習者作文コーパス」及び「Lang-8 Corpus of Learner Japanese」を利用する。

① 日本語学習者作文コーパス（http://sakubun.jpn.org/）

日本語学習者作文コーパス（以下、JC）は初級から上級までの日本語学習者 304 名の作文データ収録されている。そのうち、作文のテーマは、「外国語が上手になる方法について」（192 名分）と「インターネット時代に新聞や雑誌は必要か」（112 名分）である。中国語を母語とする学習者の作文数は 160 である。

② Lang-8 Corpus of Learner Japanese（http://cl.naist.jp/nldata/lang-8/）

Lang-8 は相互添削型 SNS とも言われ、2011 年 10 月の時点で 77 の言語をサポートし、317,307 のユーザーが登録している（水本他 2013）。Lang-8 Corpus of Learner Japanese（以下、Lang-8 学習者コーパス）は Lang-8 のデータから作成されている。Lang-8 学習者コーパスの特徴として、以下の 3 点がある。①従来の学習者コーパスより規模が大きい。②Lang-8 のユーザー情報から学習者の母語がわかる。③学習者の作文とその添削文のペアを簡単に手に入れることができることである。しかし、1 文に対して複数の添削があり、また、修正不完全な場合もある。

第 3 章 イメージ・スキーマに関する日中の異同

第 3 章では、学習者の「重い」「深い」の「直訳」と「非直訳」の誤用例に基づき、【力】スキーマ、【容器】スキーマの日中の認知の異同を検討する。

3.1 【力】スキーマに関する日中の異同

第 2 章の 2.1.1.1 節では、Talmy（1988）のＦＤ理論と Ikegami（1994）の【力】スキーマの簡潔モデルに言及し、ＦＤ理論では、力の強さの捉え方という観点が欠けていることを指摘した。また、2.1.1.2 節では、日本語と中国語の例を挙げ、力の強さを表す時、「（動作を）重く感じる」という意味を表す場合でも、名詞と共起し、身体動作、五感などの具体的な圧迫感を表す場合でも、日本語と中国語においてはズレが生じていることを指摘した。

2.1.1.3 節では、感覚系を外部刺激が観察できるかどうかによって、「外部感覚」と「内部感覚」に分けている。また、中国語と日本語では、「深部感覚」と「味覚」、「聴覚」、「視覚」、「聴覚」において差異がある可能性を示した。しかし、「皮膚感覚」、「内臓感覚」においては、日中はどのような違いがあるのか、まだ明らかになっていないことを指摘した。本章では、これらの問題について詳しく論じる。

表 3-1 力の強さの捉え方と外部感覚・内部感覚との関係（日中）

	外部感覚						内部感覚	
	視覚	聴覚	皮膚感覚	嗅覚	味覚	深部感覚	内臓感覚	前庭機能
中国語	重	重	不明	重	重	重	不明	————
日本語	強	不明	不明	強	強	強	不明	————
感覚の性質	色	音	触・圧	匂い	味	力の抵抗	空腹感	ない

以上のことを踏まえて、3.1 では、まず、学習者コーパスから「重い」に関する「直訳」と「非直訳」の誤用を抽出する。次に、【力】スキーマが深部感覚（身体動作、皮膚感覚）に現れる日中の異同を明らかにし、さらに、この異同が五感（視覚、聴覚、嗅覚、

味覚）[1]まで広がるのかについて調べる。最後に、内部感覚の日中の異同を明らかにする。具体的には、以下の 4 つの課題を設定し調査を進める。

RQ1：「重い」の「直訳」と「非直訳」の誤用は何があるのか。

RQ2：身体動作（深部感覚、皮膚感覚）に関わる力の強さを表すとき、中国語では、“重”と“强”のどちらが、日本語では「重い」と「強い」のどちらがよく使用されるのか。

RQ3：五感（視覚、聴覚、嗅覚、味覚）において、中国語では“重”と“强”のどちらが、日本語では、「重い」と「強い」のどちらがよく使用されるのか。

RQ4：内部感覚（内臓感覚）において、中国語では“重”と“强”のどちらが、日本語では、「重い」と「強い」のどちらがよく使用されるのか。

3.1.1 RQ1：「重い」に関する「直訳」と「非直訳」の誤用

まず、学習者コーパスから「重い」に関する誤用例を抽出し、身体動作・五感、抽象概念に関わる誤用例をまとめる。それを中国語に訳した上で、母語の「直訳」か「非直訳」かを判断する。具体的には、Lang-8 学習者コーパスから「重い、重く、重か」を含む文を抽出したものを、日本語母語話者に形容詞のコロケーションの誤用を修正してもらい、身体動作及び外部の刺激が五感に与える刺激の強さを表す例を全部で 10 例抽出した。それぞれ中国語の対訳と身体動作・五感の対応関係を表 3-2 に示す。

[1] 以降は視覚、聴覚、嗅覚、味覚をまとめて五感と呼ぶ。

表 3-2　「重い」に関する学習者の誤用（1）－ 身体動作・五感

	誤用例	身体動作・五感	中国語訳
1	（前略）今日の朝、トイレを出るがはやいが、足がすべて、重く転んでしまった。	身体動作	重重地跌倒了
2	喉は火を焼けるように痛い、熱も出った、心臓の重い声もはっきり聞こえった、力も全然出なかった…	聴覚	很重的声音
3	重くて緩いリズム、単調でゆっくりな仕草、大声をあげて泣きわめく伴奏、断続的で不撓不屈の太鼓、雑然としている三味線、何でも不気味で静寂な感じをしている。	聴覚	*又重又慢的韵律
4	午後から、氷粒が降って、落ちた音が重くて授業を受けたまま、たまたま窓外にちらっと見ると、ぼんやりしちゃった。	聴覚	*声音很重
5	皆さんご存じのように、日本人は淡いものが好きです、しかし、カレーは味が重いです。	味覚	味道重
6	初めで刺身をたべたけど、からしの粉末の味が重いので、あまりすきではありません。	味覚	味道重
7	一応青いとはいえ、朝は浅くて清々しい、昼間は幻いほど鮮やか、夜は深くて重い青さでした。	視覚	?很重的蓝色
8	命令ではないれど言ったとおりにしてなかったら、重い顔にして息をついて心配ような様子になります。	視覚	*很重的脸
9	まず、日差しの直射を弱くして欲しい、適当な温度と湿度及び重い影のある環境作りを次のように入手しました。	視覚	*很重的阴影
10	昨日、わたしの町は重い雨です。	視覚 or 聴覚	*很重的雨

表 3-2 では、外部の刺激が身体・五感に与える刺激の強さを表すときに学習者が起こしたコロケーションの誤用である。そのうち、母語の直訳に当たる誤用もあれば（誤用例 1、2、5、6）、母語にない語と語の結びつき、つまり非直訳の誤用もある（誤用例 3、4、7、8、9、10）。

誤用例 3 では、音が聴覚に与える刺激を表している。誤用例 7 は、色が暗いという意味である。誤用例 8 は、日陰が濃いという意味である。7、8 ともに視覚の表現である。誤用例 10 は、雨が強いを表すとき、中国語では、“雨很大（雨が大きい）”を言うのが普通である。“*雨很重（雨が重い）”、“*很重的雨（重い雨）”は非文である。ザーザー降っている雨が人間の視覚及び聴覚に与える刺激の強さで考えてみれば、視覚、聴覚も学習者が誤用していることがわかる。誤用例 3、4、7、8、9、10 は中国語の対訳が非文になる。

表 3-2 の結果をみると、中国語を母語とする日本語学習者が産出している「重い」に関するコロケーションの誤用は母語の「直訳」や「非直訳」にも関わらず、「重い」を身体動作および五感に使用するときに起きていることが明らかになった。

次に、学習者コーパスから、思考、感情、抽象概念に関わる誤用例（8 例）をまとめる。それぞれ中国語の対訳を表 3-3 に示す。

表 3-3　「重い」に関する学習者の誤用（2）－ 思考、感情、抽象概念

	誤用例	中国語訳
11	中国人は人々も重い故郷情念がありますね。	很重的思乡情节
12	しかし、その虚しさ、苦しさは簡単に消えることが出来なく、逆に日毎に増長し、最後に耐えられないほど重くなって、呼吸も出来ないほど重くなって、最後に自らの死でその虚無感と苦痛を終わらせるほかありません。	*空虚和苦痛～变重
13	日本の生花や茶道や和歌や障壁画などは例外なく文化の息吹が重く感じさせる。	文化气息很重
14	精神定力の不足（これこそため、茶道などへの重い頼りがある）のせいで、複雑な生存競争の中に、生存の本能によって生きて、波や流れに身を任せて、猛烈な勢いで走っていっている。	*很重的依赖
15	昔、男をもっと好き傾向は重いです。	*倾向很重
16	その中、「うざい」が一番言葉が重いと感じる。	～词很重
17	七月の試験が合格したいので、最近勉強の強さがちょっと重い。	*强度很重
18	輻射も重くなるそうです。	*辐射很重

表 3-3 は、五感以外に、思考、感情、抽象概念において学習者に現れるコロケーション誤用である。そのうち、母語の直訳に当たる誤用もあれば（誤用例 11、13、16）、母語にない語と語の結びつき、つまり非直訳の誤用もある（誤用例 12、14、15、17、18）。

誤用例 11 は、故郷に対する強い感情を持っていることを表す。誤用例 12 では、虚しさと苦しさという感情がだんだん強くなることを表す。誤用例 13 では、文化が鑑賞者に与える抽象的な影響を表す。誤用例 14 では、茶道への依存が強いことを表す。誤用例 15 は、傾向が強いことを表す。誤用例 16 では、「うざい」という言葉が聞き手に対して与

える刺激が大きいことを表す。誤用例 17 では、勉強のプレシャがだんだん強くなることを表す。誤用例 18 では、放射線が強くなることを表す。

誤用例（11）～（18）は思考、感情、抽象概念において、感受者が感じている外部からの影響の強さを記述している。学習者の母語にない語と語の結びつきにも関わらず、学習者に「重い」の使用が好まれることがわかる。

3.1.2　RQ2：身体動作（深部感覚、皮膚感覚）における日中の異同

本節では、身体性を基盤に、身体動作レベルから【力】スキーマの日中の異同を調べる。3.1.2.1 節では、中国語における〈重〉と〈強〉の使用傾向を明らかにし、3.1.2.2 節では、日本語における〈重〉と〈強〉を明らかにする。

具体的な研究方法は以下のように示す。日本語では、形容詞に連体形、終止形、連用形が存在する。「重い」を例にすると、「重いカバン」（連体形）、「カバンが重い」（終止形）、「重くのしかかる」（連用形）となる。それに対応する中国語の“重”は“很重的包”、“包很重”の性質形容詞の“重”と“重重地压”の状態形容詞“重重”になる。

朱（1982）は、中国語の形容詞を性質形容詞と状態形容詞に分けている。前者は“f＋形容詞＋的”（f は“很、挺”を表す程度副詞）という形を取りやすい。後者は特に二音節性形容詞において“形容詞＋的/地”（書き言葉の場合“地”が多い）の形で動詞を修飾すると述べている。つまり、日本語の「重い」の連体形と終止形は中国語の“重”に対応しているが、連用形は中国語の“重重”に対応している。同じように、力の強さを表す日本語の「強い」の連体形と終止形は中国語の“强”に対応しているが、物事に与える影響の強さを表すとき、中国語の形容詞“强烈”に対応している。

本節では、表 3-4 に示したように、朱（1982）で述べられている性質形容詞と状態形容詞の特徴を踏まえ、動詞と共起する場合の、日本語の「重く＋V」「強く＋V」と中国語の“重重地＋V”“强烈地＋V”における〈重〉と〈强〉の使用選好について調べる。また、名詞と共起する場合の、日本語の「重い＋N」「Nが重い」「強い＋N」「Nが強い」と中国語の“很重的＋N”“N＋很重”“很强的＋N”“N＋很强”の形について、コーパスの文例を調べ、〈重〉と〈强〉の使用選好について分析する。

表 3-4　調査項目

	連用形	終止形	連体形
中国語	很重的＋N	N＋很重	重重地＋V
	很强的＋N	N＋很强	强烈地＋V
日本語	重い＋N	Nが重い	重く＋V
	強い＋N	Nが強い	強く＋V

3.1.2.1 では、中国語における〈重〉と〈強〉の使用傾向を明らかにすることを目的とする。まず、中国語の例を見ていく。下線と翻訳は引用者が加えたもの、以下同様である。

(19)　好像是有一个看不见的拳头、重重地打了江玫一下。(見えないパンチみたいで、江玫さんを＜意訳：強く殴った、逐語訳：重い-殴る-た＞)(『红豆』)

(20)　他重重地撞向贝伦，正巧将它脸朝天的撞过海浪中。(彼は贝伦さんに＜意訳：強くぶつかった、逐語訳：重い-ぶつかる-た＞)、贝伦さんが仰向けで波の中に転んだ。(『龙枪编年史 02』)

中国語の場合、(19)(20)のように、“重重地”は身体動作の力の強さを記述している。一方、“强”を使った“*强烈地打”(逐語訳：強い-殴る)、“*强烈地撞”(逐語訳：強い-ぶつかる)は非文である。他には、“重重地摔(逐語訳：重い-投げつける)、“重重地敲”(逐語訳：重い-叩く)のいずれも“强烈地”に置き換えられない。つまり、中国語では、身体動作の力の強さを表すとき、〈強〉より〈重〉の方が選好されている。

続いて、日本語における〈重〉と〈強〉の使用傾向を明らかにする。日本語の例を見ていく。

(21)　彼女の平手が、強く頬を打った。(『リレー小説』)

(22)　そして、また、ドンドンと、ドアを強くたたく音。(『25 歳　荷酷』)

日本語の場合、（21）（22）のように、身体動作の力の強さを記述する場合、「強い」が用いられる。「*重く打つ」、「*重く叩く」は非文である。他にも「強く蹴る」、「強く握る」などがある。これらはいずれも「重い」に置き換えられない。つまり、身体動作によって引き起こされる身体感覚（深部感覚）の場合、中国語では〈重〉の使用が好まれるのに対して、日本語では、〈強〉の使用が好まれることがわかる。

次に、皮膚感覚に関する例を見る。

(23)　重重地搓手（＜意訳：強く手を擦る、逐語訳：重い-擦る-手＞）

(24)　重重地揉眼睛（＜意訳：強く目を揉む、逐語訳：重い-揉む-目＞

(25)　新芽（葉）が素手で扱えるような温度になったら、両手で強く揉む。
(http://www.o-cha.net/japan/dictionary/made/japan/japanese_tea11.html)

(26)　理想的には、手のひらや指先が皮膚と強くこすれることのないように注意しながら汚れを泡で包み込むようにし、泡で落とすことがポイントです。
(http://bihada.p-use.net/oteire/skincare.html)

『大辞林』（第３版）によれば、「擦る」とは、物に他の物を押し当てて何度も動かし、摩擦するという意味である。「擦れる」とは、物と物がすれ合うという意味である。「揉む」とは、両方の手のひらで物を挟んで擦るという意味である。例（23）～（26）は皮膚感覚に属している。「擦る」は中国語の“搓”にあたるが、「揉む」は“揉”にあたる。例（23）（24）のように、中国語では、“重重地搓手（重く手を擦る）”“重重地揉眼睛（重く目を擦る）”を言うが、“*强烈地搓手（強く手を擦る）”“*强烈地揉眼睛（強く目を揉む）”を言わない。一方、日本語では、例（25）（26）のように、「強く揉む」「強く擦れる」を言うが、「*重く揉む」「*重く擦れる」を言わない。つまり、皮膚感覚において、中国語では〈重〉の使用が好まれるのに対して、日本語では、〈強〉の使用が好まれることがわかる。深部感覚と皮膚感覚における日中の異同を表 3-5 に示す。

表 3-5　深部感覚・皮膚感覚における〈重〉と〈強〉の使い分け（日中）

	深部感覚	皮膚感覚
中国語	重	重
日本語	強	強

さらに、中国語のＣＣＬから“重重地”“强烈地”と動詞が共起する時のパターンを調べた。その結果、「重重地＋Ｖ」は939例、「强烈地＋Ｖ」は1338例であった。「重重地」と共起する上位10語（度数）は“摔（111）、打（59）、叹（47）、撞（41）、拍（37）、压（36）、跌（25）、敲（24）、点（24）、落（23）”であった。これらは人の身体動作の力の強さを表すときによく使われる語である。つまり、動作主（Agent）の力の強さを表す際、中国語の場合は、〈重〉の使用が好まれていると言える。図3-1に「重重地＋Ｖ」と共起する上位10語を示す。

一方、「强烈地」と共起する上位10語（度数）は“感受（217）、感到（101）、吸引（86）、意识（74）、感觉（217）、表现（43）、谴责（30）、反对（28）、要求（26）、刺激（24）”である。図3-2は“强烈地＋Ｖ”の上位10語を示している。

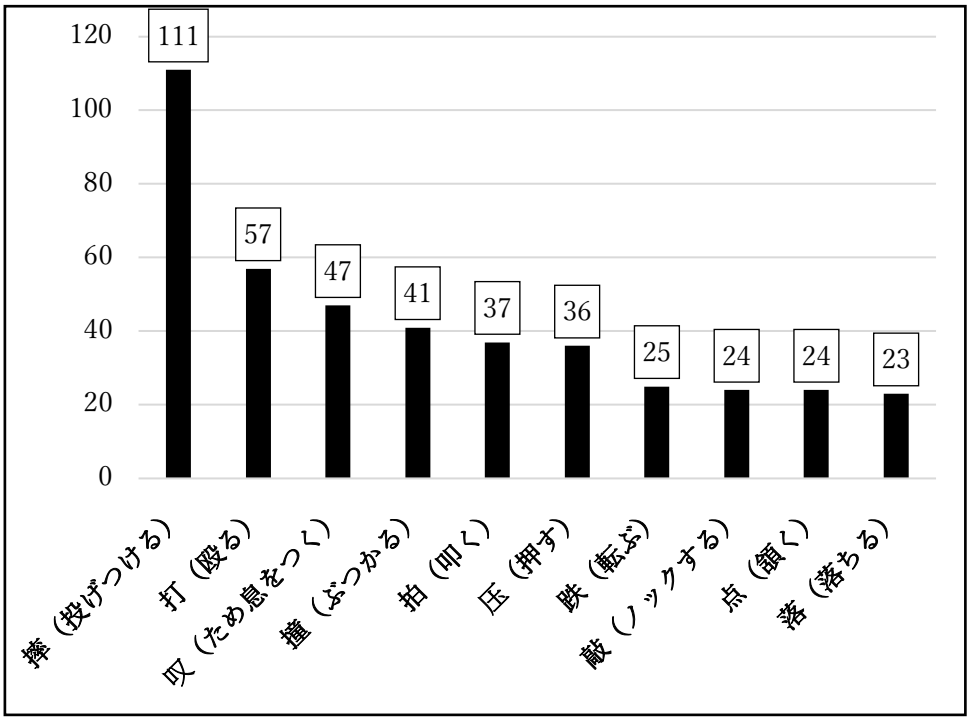

図 3-1　中国語“重重地＋Ｖ”の上位10語（単位：回）

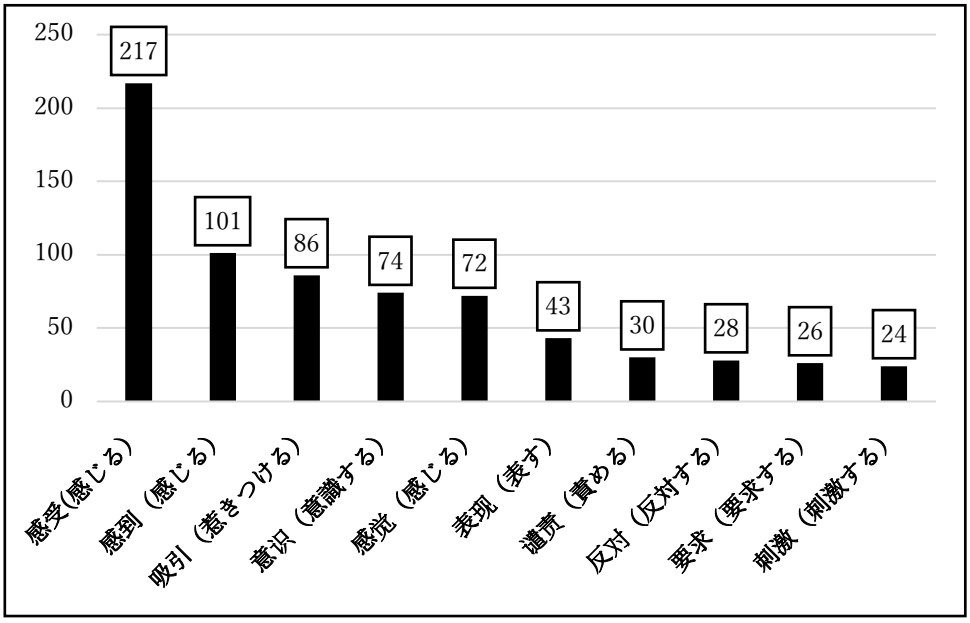

図 3-2　中国語の“强烈地＋V”の上位 10 語（単位：回）

(27)　记者此次云南少数民族地区之行、同样强烈地感受到一种自力更生的力量。（記者は今回の雲南少数民族地域の取材において、同じく自力更生する力を＜意訳：強く感じた、逐語訳：強い-感じる＞）（『报刊精选』）

(28)　她疲惫极了、而且她强烈地意识到了饥饿的存在。（彼女はとても疲れている。また、お腹が減っていることを＜意訳：強く意識した、逐語訳：強い-意識する＞）（『龙枪-夏焰之巨龙』）

(29)　例如在开会中、有人强烈地反对你刊登广告的提议、因为这个人认为多数的广告支出都是平白的浪费。（例えば会議中、広告を載せるという案に＜意訳：強く反対する、逐語訳：強い-反対する＞）人がいる。それは広告が役に立たないし、お金の無駄遣いにしかならないと思っているからである。（『哈佛经理手册』）

図 3-2 により、“强烈地”とよく共起する動詞は身体動作ではなく、“感受”、“感到”、“感觉”のように外部からの抽象的な刺激を受け、自分の中で形成される思い、感じ、あるいは感情の強さに〈強〉が用いられている。また、“表现”、“谴责”、“反对”、“要求”のように、人の主張の強さを表すときに〈強〉がよく使われることがわかる。さらに、日本語の「強い」「重い」の違いを明らかにする為に、TWCの 2 語比較

の機能を利用し、「強い」「重い」と同じ動作を表す動詞の組み合わせ（「強く＋V」「重く＋V」）の使用頻度を調べた。結果を図 3-3 に示す。

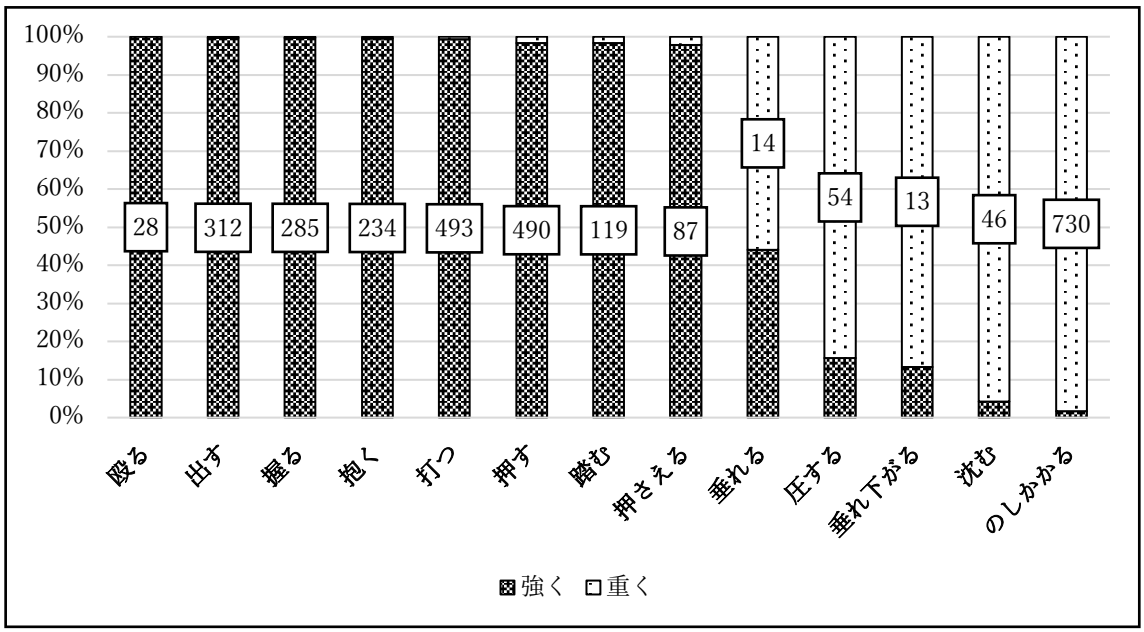

図 3-3　「強く」「重く」の使用傾向（単位：回）

図 3-3 からわかるように、日本語では、「打つ、押す、押さえる、出す、握る、抱く、殴る」の動詞グループと「のしかかる、圧する、沈む、垂れる、垂れ下がる」の動詞グループの傾向が異なっている。

『大辞林』（第 3 版）によれば、「のしかかる」の基本義は「体をのばして相手の上におおいかかる」、「圧する」の基本義は「おさえつける」、「沈む」の基本義は「重量のあるものが今の位置・程度から下方へ動いていって姿が没する意」、「垂れる」の基本義は「重みで下にだらりとさがる」、「垂れ下がる」の基本義は「下方にさがる」である。「打つ」グループと異なり、「のしかかる」グループに属する動詞は、動作の方向性が上から下へ移動することが特徴的である。日本語では上から下へ移動する力を記述するとき、物が自由落下する時の重力として捉えることを示している。「のしかかる」グループは動作の力強さを表す時、「重い」の使用が好まれる。それは「重い」の基本義から拡張されたと考えられる。一方、「打つ」グループの動詞は動作の方向性が特に規定

されておらず、そのため、身体動作の強さを表す時、「強い」の使用が好まれると考えられる。

以上により、図 3-4 のように、中国語の〈重〉は重力による「下向きの動作」の強さを表す一方、動作主と感受者の間の力の強さを表していることがわかった。それに対して、日本語では、「下向きの動作」は〈重〉で捉えているが、動作主と感受者の間の力の強さは〈強〉で捉えていることがわかった。

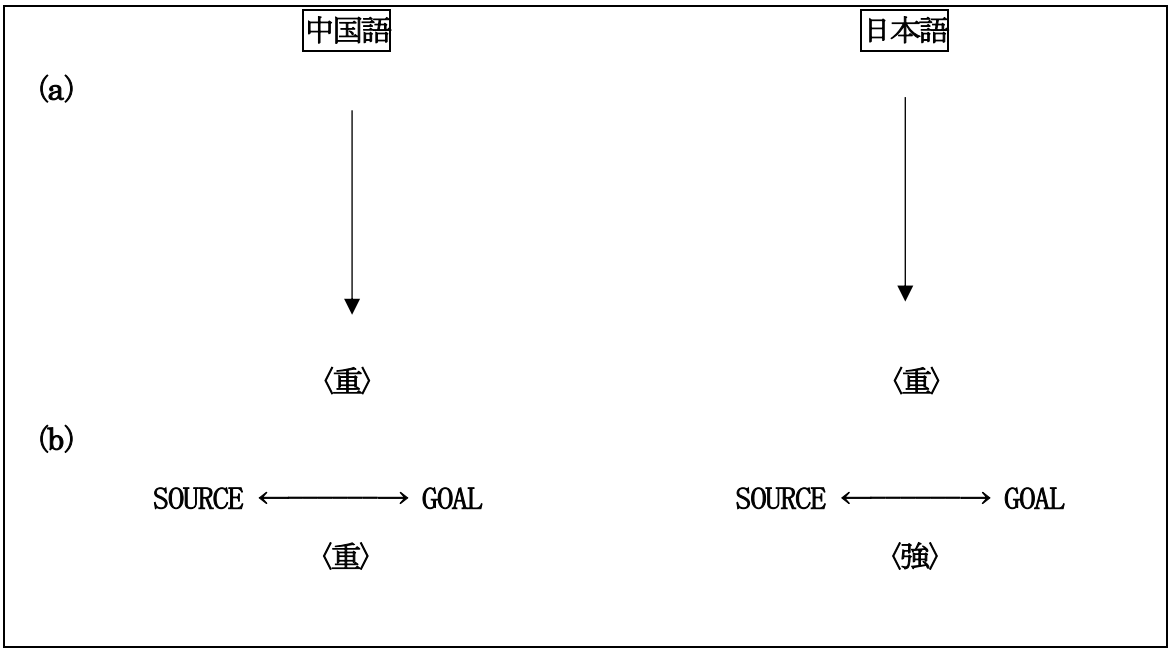

図 3-4　〈重〉と〈強〉の使い分け（日中）

3.1.3　RQ3：五感（味覚、嗅覚、視覚、聴覚）における日中の異同

続いて、「味覚」「嗅覚」「視覚」「聴覚」に関する用例を見る。

(30)　但由于这种农药的气味很重、尽管进入市民家中水管的自来水药物浓度很低、仍然有一种刺鼻的异味。(農薬の＜意訳：匂いが強い、逐語訳：匂い-重い＞）ので、市民の上水道に入る薬物の濃度が低いにもかかわらず、きつい匂いをしている)(『新闻报道』)

(31)　西安的小吃口味很重、比如羊肉泡馍、服务员会上一盘大蒜头和辣酱给你调味。(西安の名物は＜意訳：味が強く、逐語訳：味-重い＞、例えば、羊肉泡馍のように、味の調整のため、店員が大きい皿でたくさんの大蒜と唐辛子を持ってくるのは普通である)（ネット）

(32)　邵红娇笑笑、拉上窗帘、颜色很重的窗帘、然后将灯拉亮、这时亮铜看清了窗帘是紫色的。(邵红娇さんが微笑みながらカーテンをしめた。カーテンの＜意訳：色は濃くて、逐語訳：色-重い＞、電気がついたあと、亮铜さんはやっとその紫のカーテンがはっきり見えた)(『原始风景』)

(33)　传来一阵沉重的上楼的脚步声、喘息的声音很重、说明这个人呼吸困难。(階段を登る音が聞こえてきて、＜意訳：息が荒い、逐語訳：息-の-音-重い＞。それはこの人の呼吸が困難であることを表している)(『福尔摩斯探案集』)

(30)(31)(32)(33)は、それぞれ〈重〉が嗅覚、味覚、視覚、聴覚を表わす名詞と共起する例である。(30)は、農薬の匂いの刺激が強く、量が少なくても上水道に入ったら、市民は気付く。“气味很重”は匂いが強いことを意味している。(31)は、西安の食べ物の特徴として味の刺激が強く、よく大蒜や唐辛子などを味の調整に使う。“口味很重”は味覚への刺激が強いことを意味している。(32)は“颜色很重”は“重”の量が多いという意味から色素が多いという意味に拡張され、色の濃さを表す。(33)は、低くて太い音が“重”である。つまり、中国語では、“重”が味覚、嗅覚を表す名詞と共起する時、感覚器官に与える近感覚的な刺激の強さを表すが、“重”が視覚、聴覚を表す名詞と共起する時、暗い色や低い音が感覚器官に与える遠感覚的な刺激の強さを表す。

続いて、日本語の例を見る。

(34)　あとソースの味が強くてびっくり！
(http://www.applique-soft.com/staff.html)

(35)　途中、獣の匂いが強くなって警戒した。
(http://suzukaminoyamaaruki.web.fc2.com/cn8/pg166.html)

(36)　使われる三味線は強い音の出る「太棹（ふとざお)」が主。
(https://www.jikabuki.com/learning_jikabuki/glossary/)

(37)　乾くと、青から黒味の強い色に変化する。
(http://www.near-mint.com/fountainpen/inks.html)

（34）（35）（36）（37）は、それぞれ「強い」が味覚、嗅覚、聴覚、視覚を表す名詞と共起する例である。（34）は、ソースの味が味覚に与える刺激の強さを表している。（35）は、獣の匂いが嗅覚に与える刺激を表している。（36）では、楽器の音の強さを表している。（37）は、色の強さを表している。つまり、日本語では、身体に与える刺激の強さは〈強〉であり、そのまま、他の感覚に転用されていることがわかる。

さらに、コーパスを用いて、味覚、嗅覚、聴覚、視覚において、日中〈重〉と〈強〉の使用傾向を明らかにする。具体的には、日本語の「強い」、「重い」と中国語の“强”、“重”とを味覚、嗅覚、聴覚、視覚表わす名詞の共起頻度を調べるために、TWC、CCLを使って、形容詞の終止用法（例：味が強い）と連体用法（例：強い味）を調べる。

まず、TWC と CCL において、①「Nが強い、強い＋N」「Nが重い、重い＋N」、②「N＋（很）强、（很）强的＋N、强＋N、N＋（很）重、（很）重的＋N、强＋N」の使用頻度を調べた。共起する日本語の名詞は楠見（1988、2004）を参考に、「味、匂い、色、音」を調べた。中国語の名詞は日本語と対応する「口味、气味、颜色、声音」を調べた。各名詞の出現頻度が全体に占める割合を図 3-5（日本語）、図 3-6（中国語）に示す。

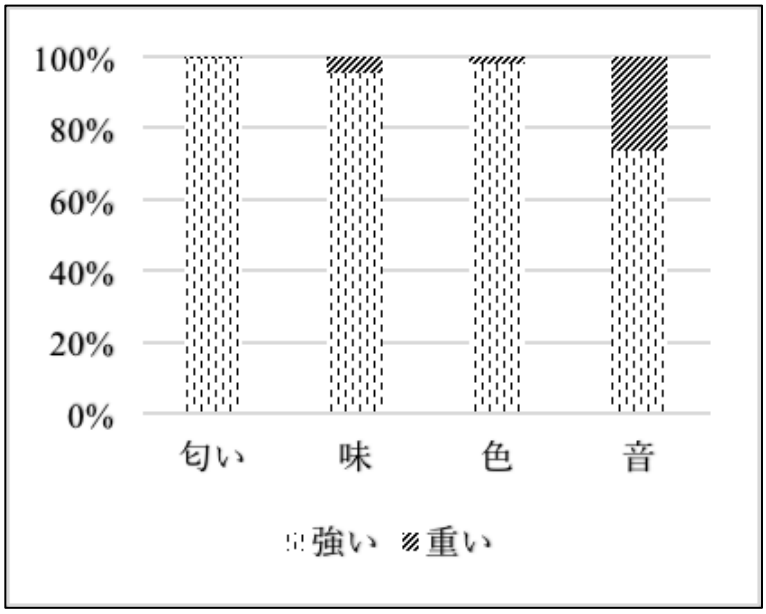

図 3-5　日本語「強い」「重い」の使用

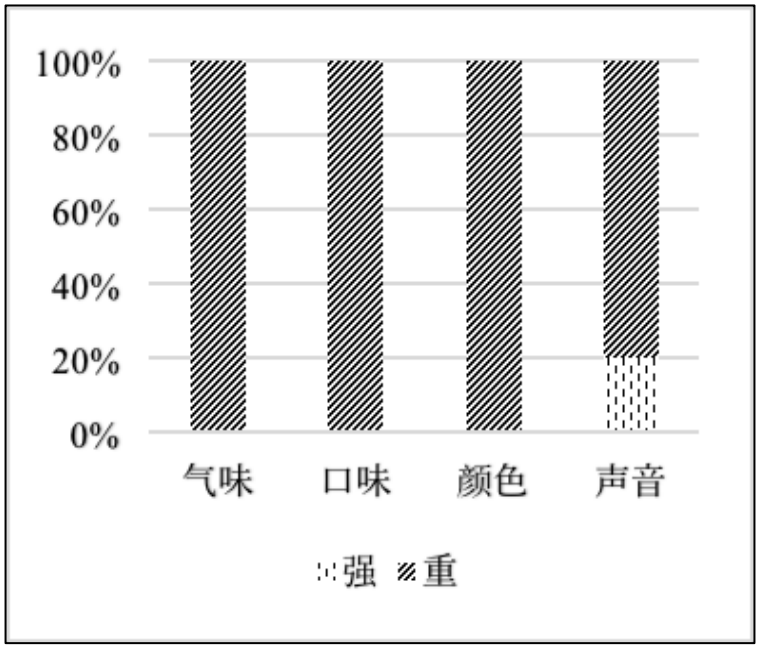

図 3-6　中国語“强”“重”の使用

図 3-5 を見ると、日本語の場合、〈強〉が広範囲に使用されていることがわかる。一方、図 3-6 を見ると、中国語の場合、〈重〉が「味覚」「嗅覚」「視覚」「聴覚」と共起しやすいことがわかる。

3.1.3 では、具体的な用例を挙げ、コーパスでの〈重〉と〈強〉の使用傾向を調べ、五感において、日本語と中国語の〈重〉と〈強〉の使用傾向を明らかにした。具体的には、日本語では、〈強〉が、「味覚」「嗅覚」「視覚」「聴覚」を表す名詞と共起しやすい。一方、中国語の場合、〈重〉は「味覚」「嗅覚」「視覚」「聴覚」を表す名詞と共起しやすい。3.1.2 の結果と同じ傾向があり、中国語では、身体動作（深部感覚、皮膚感覚）に限らず、五感（味覚、嗅覚、視覚、聴覚）においても〈重〉の使用が好まれる。身体動作から五感にわたり、一貫性を持っているところが興味深い。中国語と日本語の異同を表にまとめると、表 3-6 になる。

表 3-6　五感における〈重〉と〈強〉の使い分け（日中）

	味覚	嗅覚	視覚	聴覚
中国語	重	重	重	重
日本語	強	強	強	強

3.1.4　RQ4：内部感覚（内臓感覚）における日中の異同

(38)　对于一个饥饿感很强的人来说（＜意訳：空腹感が強い、逐語訳：空腹感-強い＞人に対して）（『家庭医学（下半月）』2017）

(39)　尿后总有未尽感；有时尿意很强（小便後まだすっきりにならなく、＜意訳：尿意が強い、逐語訳：尿意-強い＞）（『江西中医学』2000）

(40)　「空腹感が強くなる」から食べる?
(http://www.b-diet.com/)

(41)　目覚めた瞬間の尿意が強く、トイレまで間に合わないことがあります。
(http://www.nyoucare.jp/counsel/menu_02.html)

中国語の例（38）（39）と日本語の例（40）（41）では、空腹感と排尿感の強さを記述する時、ともに〈強〉が用いられる。“*饥饿感很重（空腹感が重い）”“*尿意很重（尿意が重い）”と「*空腹感が重い」「*尿意が重い」は全部非文である。つまり、内臓感覚だけは日本語と中国語は同じで、〈強〉が好まれる（表 3-7）。

表 3-7　内臓感覚における〈重〉と〈強〉の使い分け（日中）

	内臓感覚
中国語	強
日本語	強

3.1.1、3.1.2、3.1.3、3.1.4 では、中国語、日本語コーパス、学習者コーパスのデータを利用し、語共起の情報に基づき、日中の【力】スキーマの異同を探った（表 3-8）。その結果、①身体動作の強さ(深部感覚、皮膚感覚)を表す時、中国語は〈重〉、日本語は〈強〉の使用が好まれる、②中国語では、味覚、嗅覚、視覚、聴覚は〈重〉で捉える。一

方、日本語では、味覚、嗅覚、視覚、聴覚に対する刺激の強さは〈強〉で表すことが示される。③内臓感覚において、日本語も中国語も〈強〉で表している。

表 3-8　力の強さの捉え方と外部感覚・内部感覚との関係（日中）

	外部感覚						内部感覚	
	深部感覚	皮膚感覚	視覚	嗅覚	味覚	聴覚	内臓感覚	前庭機能
中国語	重	重	重	重	重	重	強	————
日本語	強	強	強	強	強	強	強	————
感覚の性質	力の抵抗	触・圧	色	匂い	味	音	空腹感	ない

日中【力】スキーマの異同を図 3-7 に示す。図 3-7 では、身体（皮膚）を境界に、外部感覚と内部感覚を区分する。中国語では、外部からの刺激（身体動作、五感）に与える刺激は〈重〉で捉えられる。一方、日本語では、外部からの刺激（身体動作、五感）に与える刺激は〈強〉で捉えられる。内部感覚に関して、中国語と日本語は同じように〈強〉で捉えられる。

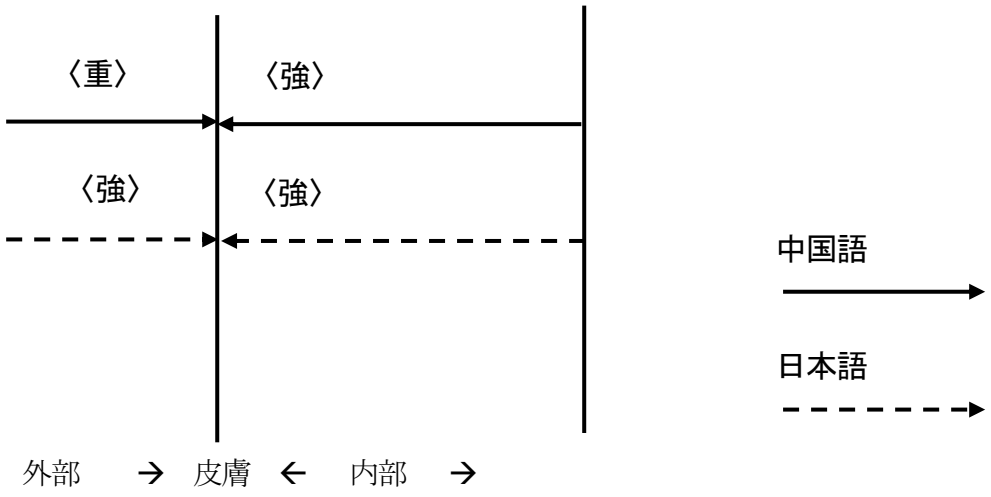

図 3-7　〈重〉と〈強〉の使用傾向（日中）

3.1.5　本節のまとめ

3.1 節では、まず、Lang-8 学習者コーパスから「重い」に関する誤用例を抽出し、身体動作・五感及び思考、感情、抽象概念に分けて、誤用を分析した。次に、身体動作（深部感覚、皮膚感覚）、及び身体感覚（視覚、聴覚、嗅覚、味覚）、内臓感覚において、【力】スキーマの日中の異同を明らかにした。

その結果、身体動作（深部感覚・皮膚感覚）において、日本語では、「強く殴る」「強く擦る」のように、外部からの刺激の強さを〈強〉で表している。一方、中国語では、“重重地打（逐語訳：重い-殴る）”“重重地搓（逐語訳：重い-擦る）”のように、外部からの刺激の強さを〈重〉で表すことを明らかにした。

次に、五感（嗅覚、味覚、視覚、聴覚）において、日本語と中国語では、〈重〉と〈強〉はどちらの使用が好まれているかを調べた結果、日本語では、〈強〉が中心に、嗅覚、味覚、視覚、聴覚にまで使用されており、中国語では、“气味重（逐語訳：匂い-重い）”“口味重（逐語訳：味-重い）”“颜色重（逐語訳：色-重い）”“声音重（逐語訳：音-重い）”のように、〈重〉が使用されていることを明らかにした。

さらに、内臓感覚において、日本語でも中国語でも、「空腹感が強い」“饥饿感很强（逐語訳：空腹感-強い）”のように、内臓感覚は共に〈強〉で表している。表 3-8 のように、日本語では、外部から内部までの身体感覚が同じで、連続していると言えるが、中国語では、身体（皮膚）を境界に、外部感覚は〈重〉、内部感覚は〈強〉のように身体感覚が分かれている。

3.2　【容器】スキーマに関する日中の異同

3.1 節では、身体性をめぐる【力】スキーマについて、日中比較を行った。その結果、中国語では、皮膚を区分として、外部からの刺激（動作、色、味、音、匂い）は〈重〉として捉える傾向があることが明らかになった。一方、内部で感じている感覚は〈強〉の使用が好まれる。中国語では、外部と内部を分けて考える傾向がある。それに対して、日本語では、外部からの刺激と内部で感じている感覚の強さは同じ〈強〉で表している。外部と内部の感覚が連続していることがわかる。

3.1 節の結果を踏まえ、以下の推論が考えられる。中国語では、抽象物（言葉、思考、感情）を感知するとき、抽象物が外部から内部（身体部位）に入る、また内部（身体部位）から外部に出ることが頻繁に言語化される。即ち、＜言葉＞＜思考＞＜感情＞に関するメタファーは【容器】スキーマの依存度が日本語より高いと推測できる。

3.2 節では、まず、学習者コーパスから「深い」に関する直訳と非直訳の誤用を抽出する。次に、＜言葉＞メタファー、＜思考＞メタファーの【容器】スキーマの依存度に関して、日中を比較する。以下３つの課題を設定する。

RQ1：「深い」に関する「直訳」と「非直訳」の誤用は何か。

RQ2：＜言葉＞メタファーに関して、日本語と中国語のどちらが【容器】スキーマの依存度が高いのか。

RQ3：＜思考＞メタファーに関して、日本語と中国語のどちらが【容器】スキーマの依存度が高いのか。

3.2.1　RQ1：「深い」に関する「直訳」と「非直訳」の誤用

まず、Lang-8 学習者コーパスから「深い、深く、深か」を含む文を抽出したものを、日本語母語話者に形容詞のコロケーションの誤用を修正してもらい、中国語に訳した上で、母語の「直訳」か「非直訳」かを判断する。それぞれ中国語の対訳を表 3-9 に示す。「深い」に関する誤用例は全部で 87 例である。「非直訳」の誤用例は 35 例で、「直訳」の誤用例は 52 例である。

表 3-9　「深い」に関する学習者の誤用

	誤用例	中国語訳
42	以前からずっとそう思ったんですけど、最近この感覚は深くなる。	*感觉变深
43	夢は大きければ大きだけ実現できない時の失望も深い。	*失望很深
44	だから、オランダに行って見たい気持ちが深くなっています。	*心情变深
45	私たちは地震の応急の方法を深く身につけなくてはいけないです。	*深深地掌握
46	その一ヶ月、勉強のことに深く専念になって、入学のためにちゃんと準備をしてみておいた。	*深深地专心于
47	なぜか分からないけど、毎日遊んでばかりして、、知識の幅はこんなに深くないですか?	*知识的宽度没有那么深
48	日本への憧れが深くなっていく自分が、もう一回日本へ行くことを決心した。	*憧憬很深
49	日々にたって広くなる環境汚染や気候異常なと、今の人たちは環境に保護しようとい気持ち深く持つになりました。	*有很深心情
50	子供は好奇心が深いものですね。	*很深的好奇心
51	竜神が選んだ子供は必ず知恵深いな子だ。	*智慧深
52	老年化は日々が送るにつれて一層深くなった。	*老龄化日益加深
53	日本人がなんてそんなに礼儀を大事しているだろうと深く疑問をしておりました。	*很深的疑问
54	ファッシュンに深い興味を持っておしゃれな人たちの呼び方だ。	*很深的兴趣
55	でも、日本と日本語に持った深い興味のために、続いて勉強してきました。	*很深的兴趣
56	自分がランドスケープデザインに深い興味を持っているから、ランドスケープを中心として、勉強していました。	*很深的兴趣
57	皆はこのような話題に深く興味があります。	*很深的兴趣

58	日本語を勉強していながら、私は自分の将来の道の行方を考えた上に、自分の深い興味を持ってる日本マンガ文化に代表される***学を勉強しようと決意した。	*很深的兴趣
59	私は***学院**学科の卒業生で、日本のマンガやアニメに深い興味を持って大学に入ってから日本語を自学し始めた。	*很深的兴趣
60	よほどのネットユーザーは末日に深い興味を持っている。	*很深的兴趣
61	二年間の日本語の勉強を通して、この専門に深い興味を持つようになります。	*很深的兴趣
62	今までの三年間、ずっと日本語と日本文化に深い興味をもっていて、勉強してきました。	*很深的兴趣
63	世界で一流大経済国として何を支えられて興味が深いあります	*很深的兴趣
64	実はもう一つ、大学時代に野球をしたことがありますので、深い興味を持つようになりました。	*很深的兴趣
65	私は日本の教育歴史を深い興味が持っています。	*很深的兴趣
66	幼いとき絵を書くことが好きだから、芸術デザンに深い興味があります。	*很深的兴趣
67	周りの友人がもう親になっているから、自分にもほしくなっているし、子供がいないと将来後悔するし、主人と義理の両親の絆も深くなってほしいし、いまの職場からも逃げたい。	*关系变深
68	しかしながら、何かわからないが、私は子供時代からずっと英語には興味深いんだ。	*兴趣深
69	近頃、探偵に対する題材のドラマに興味が深いです。	*兴趣深
70	今探偵のドラマに興味が深いです	*兴趣深
71	昔の日本で地震のゆれ易い地域の名前は「川」、「谷」、「池」などの漢字をつけて、揺れにくい地域は「台」、「丘」、「山」の漢字をつけることに興味に深いです。	*兴趣深

72	ショッピングをする時、そして区役所で健康保険金を支払う時に、係員がお皿を出して、お皿の中から料金を取るのに興味が深い。	*兴趣深
73	私はいろいろ考えてやはりこの前先生が私に教えた課題に興味が深いです。	*兴趣深
74	それから、私は日本語に興味がだんだん深くなりました。	*兴趣变深
75	日本の面積はそんなに広くなくて人口も小さいし、でもそんないい製品、特別電子製品は深く影響を世界に与えている原因は何ですか？	*给世界了很深的影响
76	わたしは日本のドラマにも、小説、人や文化にも、深い好感や興味を持っています。	*很深的好感
77	一番深い印象は主人公が親父の手に握られた白くて小さな石を気づけた場面です。	印象最深
78	日本の教育方面について、孔健祥林は日本人は子供に取り扱う態度は甘やかして育てませんで、苦労に耐えさせるのは最も深い印象だと思っています。	印象最深
79	この「人間を知るために」という文章を読んでいたあと、私の心に残ったことはいろいろありますが、印象が一番深いのは「人間は一人では生きることができないのです。」という言葉です。	印象最深
80	シンポジウムで、印象中最も深いのはオーストラリアの学生でした。	印象最深
81	印象の深いのは動脈瘤のクリップ手術で、小畑先生と杉江先生は脳神経解剖によく熟知、各種の複雑な構造の動脈瘤手術を簡単になって、その巧みで完璧な手術の技巧は私の印象を深くならせる。	印象深
82	デビューＣＤの表紙に、漢字の「嵐」の印象は深いです。	印象深
83	特にひとつの場面は印象が深くて、感動しました。	印象深
84	昔、有名な歌手、俳優である刘德华はとてもイメージ深いｃｍがありました。	印象深
85	以下はイメージ深い言葉：（父から息子へ）Don’teverletsomebodytellyouyoucan’tdosomething,notevenme.	印象深

86	そればかりではなく、歴史についての本を読み終わると、すぐ忘れて印象深くない。	印象不深
87	「論語」は中国のさまざまな方面に影響深いです。	影响很深
88	この作品は二つの主題を表現します、でも、私にとって感深いのは喜助の「足りるを知っている」の態度です。	感触很深
89	そして、グローバリゼーションの進むと伴って、世界でのコミュニケーションが深くなって、外国からの観客もよくいる。	交流加深
90	私にとって、桂林への一番深いイメージはたくさん山がある。	最深的印象
91	中には私に深い影響したのは二三名いました。	深受影响
92	オランダの影響を深く受けたのことを教科書で習っていました。	深受影响
93	日本の建物は禅宗の思想の影響を深く受けられて、日本は禅宗の歓迎ところが世界でその他の国家に対して珍しくて、（後略）	深受影响
94	私は先生のユーモアに笑われた同時に、深く励まされて,度胸や会話のために努力しようと決心しました。	深受鼓舞
95	いろいろな不思議な景色とおいしそうな食べ物が私に深く引き付けました。	深深吸引
96	よい大学に入りさえすれば、輝かしい未来が迎えられるというロジックは、学生だけではなく、先生と親も深く信じています。	深深地相信
97	このよな日本精神は私の心を深く打ってしまいました。	深深地打动了
98	古典文学はその民族の文化の性格を深く反映することができると思う。	深深地反映了
99	ENDLICHERI☆ENDLICHERI さんの母「アナタとこの桜をあと何回見られるんやろか」と言って時、彼の気持ちを深く分かった。	深深地了解了
100	人間はいつも繰り返する生き物だと深く思っています。	深深地觉得
101	今まで知らないことをすっかり知ったことかつ深く実感されたことはいいことではないか？	深有实感
102	転校したあと、樹はきっと心の深い奥に浅い痛みと後悔があっただろう。	内心深处

103	深くの印象を残ったのは食べ放題です。	留下深刻印象的是
104	今日はめつらしにニュースに聞きました、それで、一つのニュースを深く印象にのこたんだ。	留下了深刻的印象
105	昨夜、中国語で“萨摩耶”というの犬が夢見る、きっと昨日犬のピクチャーを見た後、その犬のかわいいの顔を深く印象される。	留下了深刻的印象
106	皆さんからもらったあの玫瑰はそんなに深い印象を残っているのは、たぶん自分が努力したのかもしれない。	很深的印象
107	特に札幌大学文化学部の教育理念は〈共生と調和〉は私に深い印象を残ります。	很深的印象
108	（前略）これらの少女は人々に深い印象を残されています。	很深的印象
109	小さい頃見たある映画で、知り合わない人に写真を助けて撮ると願う、頼まれた人がカメラを持ったまま逃げてしまうというシーンを、子供頃の私に、深い印象をさせました。	很深的印象
110	今の町では、外国人がよく見れて、あまり珍しくではないけれど、こんな風に宣伝のは、人に深い印象が与えていた。	很深的印象
111	特に両親の微笑は私に深い印象をあげます。	很深的印象
112	それ憂鬱の顔と憂鬱の空模様は私に深い印象を残っていました。	留下了很深的印象
113	夏の花火大会と豊灯祭りはわたしに特に深い印象を残った。	很深的印象
114	年の夏休みは私に深い印相を残してくれた。	很深的印象
115	私にとって、印象をもっとも深くつけるのは　彼女の””パパとムスメの７日間”というテレビドラマです。	留下了很深的印象
116	なぜというと、面白い作品は人に深い印象を残させやすいですから。	很深的印象
117	その中の一つは私に深い印象を残した。	很深的印象
118	これは私の頭の中で深い印象が残した。	很深的印象
119	A 私も慣れました、特にうちの食堂の料理はおいしいです、山田さんは大学の深い印象はなんですか。	很深的印象

120	それから, 情報もハイテク局地戦に深い影響を伝えています, 情報戦の役割は重要になっていることを意識され, 今中国には, 通信ネットワークを利用した訓練、地対地ミサイルの発射などが行われました。	很深的影响
121	子供時の友たちは常に特別な意義がある思います, 長時間の一緒に暮らすのを通じて, 互いに深い影響をして, 趣味や習慣を十分理解できますので, 一生の親友になるかもしれません。	很深的影响
122	王さんは私にとって、深い影響を果たし、ともにもっとも忘れられない人だ。	很深的影响
123	地震の深い影響を心配しています。	很深的影响
124	＜西遊記＞は中国のクラシック四大奇書で一冊で、中国人の心に非常に深い影響力があります。	很深的影响力
125	古代人は人は死んたら、墓の位置とか配置とかは後代に深い影響力を持ていった。	很深的影响力
126	古代人は人は死んたら、墓の位置とか配置とかは後代に深い影響力を持ていった。	很深的影响力
127	あの年に、今でも記憶がまた深いことがある、隣人の八歳のお兄さんは私に顔がはれあげるほど殴られた、それで、ちんぴらチームのみんなに褒められた。	记忆深刻
128	中国には「家族」という意識は深く、中国人の心の中で根を下ろしている。	深深扎根于

学習者の誤用例のうち、「*深い興味」、「*深い印象」「*深い影響」が最も多い。中国語では、“很深的印象”“很深的影响”と言うが、“很深的兴趣”とは言わない。よく使われる表現は“很浓厚的兴趣（直訳：濃厚な興味）”である。それだけでなく、（42）～（76）では、「*感覚は深くなる」「*失望も深い」「*気持ちが深くなる」「*深く身につける」「*深く専念する」「*知識の幅はこんなに深くない」「*憧れが深くなる」「*気持ち深く持つ」「*好奇心が深い」「*知恵深いな子」「*深く疑問をする」など表現も中国語に直訳すると、非文になる。

また、「深い」とよく共起する名詞をみると、「知識、疑問、印象、記憶」など思考類の名詞、「感覚、失望、気持ち、憧れ、興味」など感情類の名詞が多い。「直訳」でも、「非直訳」でも学習者が「深い」の使用を好むことが示される。一方、日本語では、思考と感情の程度が大きいことをいう時、「強い」がよく使われる。なぜこのような違いが現れるのか、先行研究と 3.1 節の結果を踏まえて、3.2 節で【容器】スキーマの依存度から日中の異同を探る。

3.2.2　RQ2：＜言葉＞メタファーの【容器】スキーマの依存度

3.2.2.1　中国語の“话”及び日本語の「言葉」と身体部位との共起

第 2 章では、韓（2014）の問題点を指摘した。3.2.2.1 では、日本語コーパスと中国語コーパスから「言葉」と“话”を含む文をすべて抽出し、＜身体部位は容器、言葉は内容物＞、＜言葉は容器、意味は内容物＞の写像に一致している文を分析する。量的分析から【容器】スキーマの依存度を明らかにする。

データの抽出手順を以下のように示す。まず、中国語コーパス（CNC）のタグ付データから名詞である“话/n”を含む文をすべてダウンロードし、元データとする。全部で 5060 文がある。CNC を使う理由は、テキストデータにはタグ付形式のデータがあるからである。中国語では、“说話（話す）”のように、単なるキーワード検索では、“话”を含む動詞なども抽出することになる。CNC では品詞を指定して検索できるので、元データの精度が上がる。

次に、日本語コーパス（BCCWJ）から「言葉」を含む文すべてダウンロードし、元データとする。全部で 38490 文がある。検索キーは以下の通りである。

キー：　（語彙素読み="コトバ" AND 品詞 LIKE "名詞%"）
WITH OPTIONS tglKugiri="|" AND tglBunKugiri="#" AND limitToSelfSentence="1" AND tglFixVariable="2" AND tglWords="20" AND unit="1" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF"

最後に、＜身体部位は容器、言葉は内容物＞、＜言葉は容器、意味は内容物＞の写像に一致する文の数をカウントする。

中国語の元データから身体部位の“口”“嘴”“耳”“眼”“肚子”“心”“胸”を含む文を抽出し、＜身体部位は容器、言葉は内容物＞の写像と一致する文だけカウントする。そして、日本語のデータからも身体部位の「口、耳、目、腹、心、胸」を含む文を抽出し、＜身体部位は容器、言葉は内容物＞の写像と一致する文だけカウントする。元データを一万語で換算し、図 3-8 に示す。

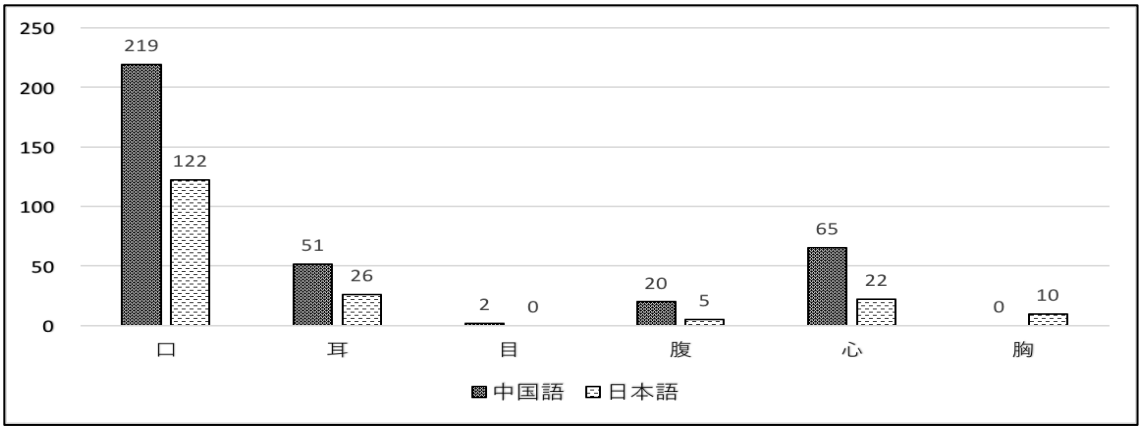

図 3-8　言葉と身体部位の共起頻度（一万語換算）

図 3-8 では、「胸」以外に中国語の用例が日本語より多いことが示される。具体的に以下のような用例がある。

（129）小英话一出口、自己也感到问得不合适、脸涨得通红。（《未冻僵的蛇》1979）

逐語訳：英さん-言葉-と-出る-口、自分-も-感じる-聞く-ない-適切、顔-膨らむ-真っ赤。

意訳：言葉が英さんの口から出ると、すぐまずいと気づかれ、英さんの顔が真っ赤になった。

（130）你眼睛里有话。（《隐形伴侣》1986）

逐語訳：あなた-目-中-ある-言葉。

意訳：あなたの目には話が見える。

（131）这话传到王海润耳朵里、反倒使他镇静了。（《新生命的创造者》1985）

逐語訳：この-話-伝わる-王海潤さん-耳-中、逆に-させる-彼-落ち着く。

意訳：この話が王海潤さんの耳に入って、逆に彼を落ち着かせた。

（132） 魏莲生有满肚子的话、无法对他倾吐；（《“幸运儿”的艰难历程》1984）

逐語訳：魏莲生さん-ある-満ちる-腹-の-話、できない-対象-彼-語る。

意訳：魏莲生さんが言いたいことがたくさん、彼に話すことできない。

（133）“说吧、说吧、不要犹豫了、把心里的话都掏给这位同志！”

逐語訳：話す-ましょう-話す-ましょう、ない-躊躇する、心-中-話-すべて取り出す-対象-この-人。

意訳：話しようよ、話しようよ、迷わずに、心に思うこと全部彼に打ち明けて。

（129）では、「口」を容器として捉え、「言葉」は容器の中の内容物である。そして、内容物が容器から出ることを写像している。（130）では、「目」を容器として捉え、「言葉」は容器の中の内容物である。そして、内容物が容器の中にあることを写像している。（131）（132）（133）では、それぞれ、「耳」「腹」「心」を容器として捉え、「言葉」はその容器の中の内容物である。（129）～（133）は<身体部位は容器、言葉は内容物>のメタファー表現である。さらに以下の作例を見る。

（134） 把话吞进肚子里（言葉を飲み込む）

（135） 他的话浮现在脑海里（言葉が浮かぶ）

（136） 他的话略过脑际（言葉がよぎる）

（137） 他的话萦绕心头（言葉が飛び交う）

（138） 一个词跃入人们的眼帘（言葉が飛び込む）

（139） 话堵在心里（言葉が詰まる）

（140） 老师的话左耳进、右耳冒（先生の話を聞き流す）

（141）　他的话不断在脑海里回响（言葉が渦巻く）　*場所省略可能

（142）　他说漏了嘴（言葉を漏らす）　*場所省略可能

以上（134）から（142）では、場所の明記が要求されている。場所を削除した場合、非文になる。一方、日本語の訳語で場所の明記が要求されていない。つまり、中国語は日本語より、【容器】の依存度が高く、言葉の表出を表すとき、【容器】スキーマが顕在化していることが明らかになった。一方、（134）から（142）の日本語対訳のうち、「言葉」を水のように捉え、＜言葉は水＞の写像に一致する例が多い（135、140、141、142）。

3.2.2.2　中国語の“话”及び日本語の「言葉」と意味を表す語彙との共起

3.2.2.1 節と同じ手順で、中国語の元データから意味を表す言葉の“意思”を含む文を抽出し、＜言葉は容器、意味は内容物＞の写像と一致する文だけカウントする。そして、日本語のデータからも「意味」を含む文を抽出し、＜言葉は容器、意味は内容物＞の写像と一致する文だけカウントする。元データを一万語で換算し、図 3-9 に示す。

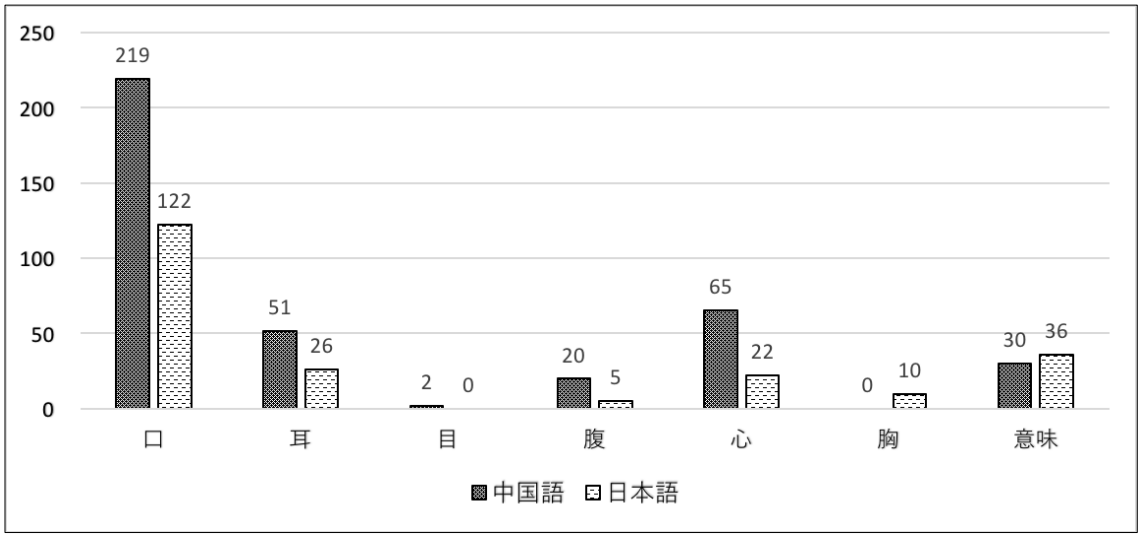

図 3-9　言葉と身体・意味の共起頻度（一万語換算）

図 3-9 では、＜言葉は容器、意味は内容物＞の写像に一致している文は、中国語と日本語があまり差がないことを示している。中国語は 30 文、日本語 36 文である。つまり、中国語と日本語を比較した場合、＜身体部位は容器、言葉は内容物＞の写像に限って、【容器】スキーマの依存度が中国語＞日本語であることが明らかとなった。

3.2.3　RQ3：＜思考＞メタファーの【容器】スキーマの依存度

3.2.2 と同じように、日本語コーパスと中国語コーパスから、思考を表す語彙を抽出し、そのうち、身体部位と共起するものを抽出する。そして、＜身体部位は容器、考えは内容部＞の写像に一致している文を分析して、量的から【容器】スキーマの依存度を明らかにする。

データの抽出手順を以下のように示す。まず、中国語コーパス（CNC）のタグ付データから“想法/n”“念头/n”を含む文をすべてダウンロードし、元データとする。“想法/n”は 356 例で、“念头/n”は 179 例である。

次に、日本語コーパス（BCCWJ）から「考え」を含む文すべてダウンロードし、元データとする。全部で 9467 文がある。検索キーは以下の通りである。

キー：　（語彙素読み="カンガエ" AND 品詞 LIKE "名詞%"）
WITH OPTIONS tglKugiri="|" AND tglBunKugiri="#" AND limitToSelfSentence="1" AND tglFixVariable="2" AND tglWords="20" AND unit="1" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF"

最後に、＜身体部位は容器、考えは内容物＞写像に一致する文の数をカウントする。

中国語の元データから身体部位の“脑”“心”を含む文を抽出し、＜身体部位は容器、考えは内容物＞の写像と一致する文だけカウントする。そして、日本語のデータからも身体部位の「頭」、「心」を含む文を抽出し、＜身体部位は容器、考えは内容物＞の写像と一致する文だけカウントする。元データを一万語で換算し、図 3-10 に示す。

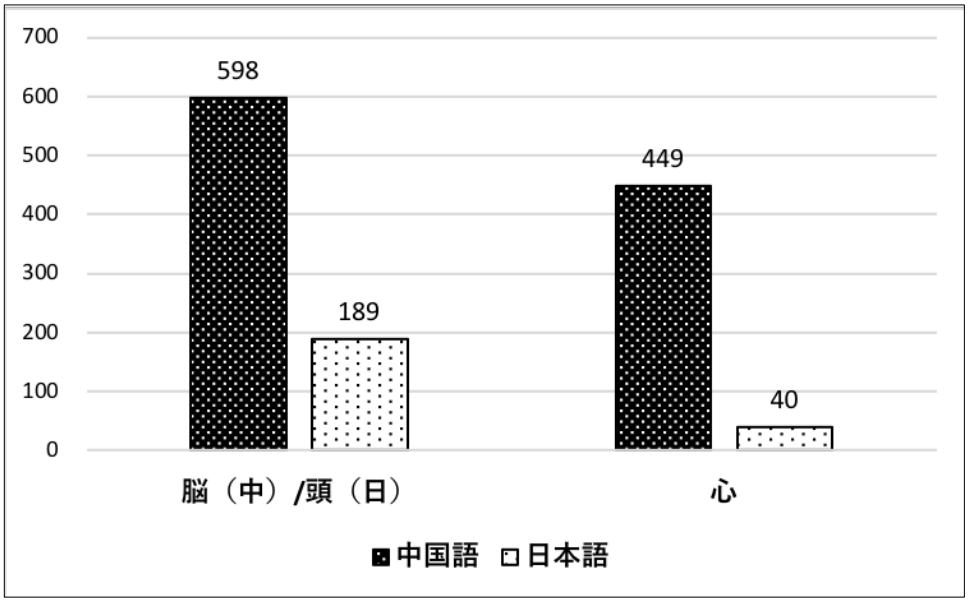

図 3-10　思考と身体部位の共起頻度（一万語換算）

図 3-10 に示すように、＜身体部位は容器、考えは内容物＞の場合、日本語より中国語の方が身体部位の「脳」「心」と共起しやすい。＜言葉＞メタファーだけでなく、＜思考＞メタファーに関しても、中国語は日本語より【容器】スキーマの依存度が高い。

3.2.4　考察：なぜ中国語は【容器】スキーマの依存度が高いのか

3.1 節では、中国語では、皮膚を区分として、外部からの刺激（身体動作、五感）は〈重〉として捉える傾向があり、日本語では、外部からの刺激の強さと内部で感じている刺激の強さは同じ〈強〉で表し、外部と内部感覚が連続していることを明らかにした。つまり、中国語では、人間を外部世界に対立させ、内部と外部を分けて物事を捉えている。一方、日本語では、人間を外部世界に融合させており、内部と外部の境界が弱く、物事を＜連続体＞として捉えている。そこで、＜言葉＞メタファーを用いてさらに検証を進める。まず、以下の例を見る。

（143）　私が子どもの頃でさえ使わなくなった言葉があふれている。

（http://www.soratoumi.com/keiei/hint/syouka.html）

*溢出了很多我小时候不用的词。

→出现了很多我小时候不用的词。

(144)　巷では円高不況という言葉が溢れだし、何やら暗いムードも漂い始めています。

(http://www.aso-taro.jp/lecture/talk/080321.html)

街上*溢出了日元升值经济不景气这样的话、笼罩着一种不祥的气氛。

→街上出现了日元升值经济不景气这样的话、笼罩着一种不祥的气氛。

(145)　あなたは、おかあさんに対して冷たい言葉をあびせます。

(http://www.jp.seicho-no-ie.org/faq/04/0438.html)

你对妈妈*泼了很无情的话。

→你对妈妈说了很无情的话。

(146)　成果主義という言葉が浸透する前には、「能力主義」という言葉もあった。

(http://www.keiomcc.net/terakoya/2004/12/report22.html)

在成果主义这个词没有?渗透之前、已经能力主义这个词了。

→在成果主义这个词没有流行之前、已经能力主义这个词了。

(147)　私は男の言葉を背後にきき流して直に柏の宿へ向った。

(https://www.aozora.gr.jp/cards/000308/files/46589_25539.html)

他的话我*听流、直接去了柏宿舍。

→他的话我听完就忘了、直接去了柏宿舍。

(148)　面接というのは面接官の心に言葉が染み込んでいかないと良い評価に繋がりません。

(http://www.jyukennews.com/02study/st-mensetu.html)

面试的时候如果说的话不能*渗透进面试官的心就没法得到高的评价。

→面试的时候如果说的话不能给面试官留下深刻印象就没法得到高的评价。

(149)　育児は最大の仕事、この言葉が身に染みます。

(http://spirit102.blog22.fc2.com/blog-entry-660.html)

育儿是最重要的工作、这个话*渗入身体。

→育儿是最重要的工作、这个话感同身受。

(150)　四六時中、頭の中で倒産や自己破産という言葉が渦巻いています。

(http://www.jigyosaisei110.com/listing/collateral.html)

我脑中总是*翻腾着倒闭、破产这样的词。

→我脑中总是萦绕着倒闭、破产这样的词。

（151）　空虚で無意味な言葉をだらだらと垂れ流すだけだ。

（http://dogma.at.webry.info/201112/article_7.html）

只是*排放一些很空没有意义的话。

→只是说一些很空没有意义的话。

（152）　その番組の最後には、次のような言葉が流れたそうです。

（http://onair-blog.jp/hellofive-koji/entry/186206.html）

那节目的最后、*流出了这样的话。

→那节目的最后、播出了这样的话。

（153）　「ひきこもり」という言葉が流通し始めたのは1980年代である。

（http://www.idesohei.net/withdrawal.html）

[隐蔽青年]这个词最初开始*流通是1960年。

→[隐蔽青年]这个词最初开始流行是1960年。

（154）　急に、今まで考えもしなかった言葉が胸の奥に湧いた。

（http://anohi.iza-yoi.net/inno/inno13.html）

突然、从没有想过话涌现在我的胸口。

（155）　授業中に先生の言葉を一字一句漏らさずにノートに取る事は出来ません。

（http://neetsha.jp/inside/comic.php?id=12026&story=1）

课上不能将老师的说的话一字不漏的记录下来。

以上のように、日本語では、＜言葉＞を＜水＞に喩え、言葉の出現、拡散、相手に送ることも水の容態を規定する動詞を使っている。一方、これらの動詞を中国語に訳すと、非文になることが多い。「湧く」「漏らす」（漏れる、聞き漏らす）だけは容認度が高いである。日本語では、＜言葉＞を＜水＞という連続体と捉え、水の様々な様態で言葉の表出を表している。

しかし、日本語では、言葉に関する表現が完全に【容器】スキーマから独立しているとは言えない。【容器】スキーマに関して、先行研究であげた要素のうち、「湧く」「渦巻く」は【容器】スキーマの内部空間が背景化している。「溢れる」「溢れ出す」「漏れる」「こぼれる」「流す」「垂れ流す」は【容器】スキーマの境界性によって支えられ、内部空間から外部空間へ流動体が移動することが背景化している。「浸透する」「染み込む」「染みる」は外部空間から内部空間に入ることが背景化している。「流れる」「流通

する」は【線と移動】スキーマと【容器】スキーマの融合で【導管】スキーマが背景化している。つまり、日本語では、【容器】スキーマは＜言葉は水＞に内蔵され、背景化しているのである。

次に、中国語の例を見る。

（156）　我十分高兴、十分激动、从我心灵中涌出一句话、就是这篇文章的题目。

逐語訳：私-とても-嬉しい、とても-興奮する、場所-私-心-中-湧く-出る-一文、こそ-この-文章-の-タイトル。

意訳：とても嬉しいし、ドキドキしています。心に一つの文が湧いてきて、この文章のタイトルになった

（157）　郑华怕吴丰说漏了嘴、忙说、不说了、过去的事不说了！大家都加班去！

逐語訳：鄭華さん-恐る-呉豊さん-話す-漏れる-口、急ぐ-話す、ない-話す、過去-の-こと-ない-話す。みんな-すべて残業-行く。

意訳：鄭華さんは呉豊さんが話を漏らすのではないかと思って、もういい、過去のこともういい、みなさん早く残業に戻ろうと言って、みんなを解散した。

（156）、（157）では、中国語コーパスにも同じ＜言葉は水＞の写像に一致する用例がある。しかし、日本語と異なる点として、中国語では、言葉の出所、即ち身体部位が言語化する特徴がある。つまり、【容器】スキーマが顕在化しているのである。このことが3.2.3の結論を裏付けている。

3.2.5　本節のまとめ

本節では、日中両言語の【容器】スキーマの依存度を明らかにした。中国語と日本語は＜身体部位は容器、言葉は内容物＞＜身体部位は容器、考えは内容物＞という写像において、差が見られたが、＜言葉は容器、意味は内容物＞という写像においては差が見られなかった。中国語は日本語より【容器】スキーマの依存度が高いことが明らかになった。

さらに、【個体（複数個体）】と【連続体】の観点から＜言葉は水＞を考察し、日中両言語は【容器】スキーマと関与していることが明らかになった。しかし、中国語は【容

器】スキーマの顕在化が要求される場合が多い。日本語では、【容器】スキーマが多くの場合＜言葉は水＞という概念メタファーに内蔵され、背景化されていることが明らかになった。

3.3　本章のまとめ

3.2 節では、量的に韓（2014）の結論を裏付け、さらに修正した。韓（2014）は、日中英の＜コミュニケーション＞メタファーを考察し、日本語では言葉を＜連続体＞として捉えているのに対して、中国語では言葉を＜個体もしくは複数個体＞として捉える傾向があると述べている。

本章で結果を示したように、中国語では、言葉を＜個体もしくは複数個体＞として捉える場合、個体が容器から出入りすることが観察されやすく、＜容器＞の顕在化が要求される。それに対して、日本語では、言葉を＜流動体＞として捉える場合、＜容器＞が背景化している。なぜこのような違いが出たかというと、人間の最も基本的な身体経験（【力】スキーマ）において日中が異なるからである。

本章の結論を踏まえて、抽象概念を【連続体】の＜水＞として捉える場合、思考、感情の強さを表す際には、流動体の力動性によって表す。抽象概念を【個体】として捉える場合、思考、感情の強さを表す際には、個体の重さ、容器の深さによって表すことが予想できる。つまり、中国語では、思考・感情の強さを表す時、外部の刺激の強さそのものの記述に止まる場合は、「重い」の使用が好まれる。外部の刺激が人間の内部（思考、感情）に与える影響の強さを記述する時には、「深い」の使用が好まれる。一方、日本語では、外部の刺激の強さそのもの、それが内部に与える影響、および内部で感じている思考・感情の強さを表す場合は「強い」の使用が好まれることが示唆される。

3.1 節、3.2 節で論じた中国語と日本語のイメージ・スキーマの異同を図式化し、図 3-11 で示す。

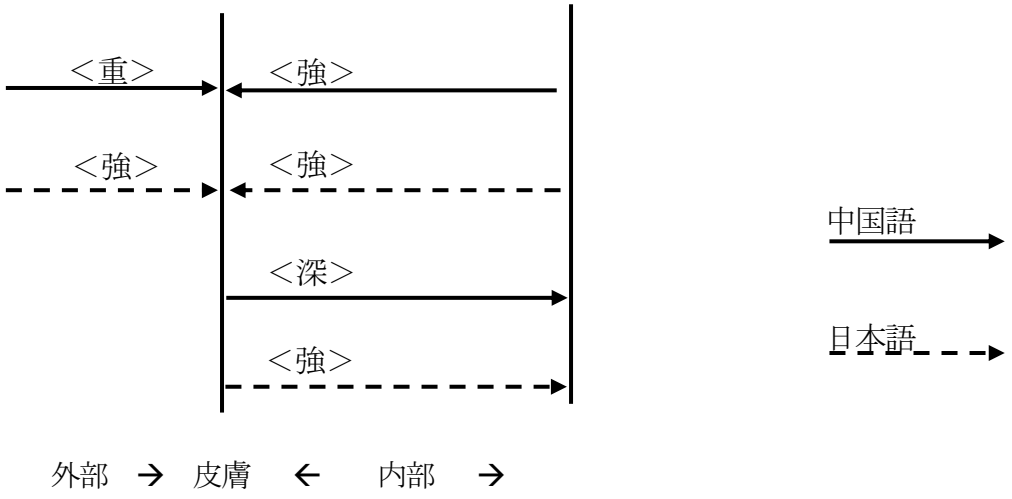

図 3-11 〈重〉〈深〉〈強〉の使用傾向（日中）

第 4 章 概念メタファーの認定手順–＜情報＞を例に

4.1 研究目的

先行研究では、メタファーの認定基準について、Pragglejaz Group（2007）（以下MIP2007）の研究がある（Low2010；鍋島・中野 2016）。鍋島・中野（2016）は、MIP2007 の認定基準の用語の不透明性と写像の概念が排除されているといった問題点を指摘し、理想のメタファー（MIPi）認定基準はどうあるべきかを検討した。しかし、具体的な認定手順は示されていない。

4.2 メタファー認定手順の提案

本章は Deignan（2005）、Pragglejaz Group（2007）、鍋島・中野（2016）を参考にし、一部改変して、メタファーの認定手順を 3 ステップに分ける。各ステップの内容は以下の通りである。Step1 はメタファーを認定する。Step2 は概念メタファーを認定する。Step3 はメタファーの種類を認定する。以下にステップごとに述べる。

4.2.1 Step1 メタファーの認定手順

Step1： メタファーを認定する手続きを以下に示す。

1.1 まずテキスト全体の意味を理解する。

1.2 語[1]の区切りを決定する

1.3 それぞれの語に対して、文脈上の意味（M’）を決定する

1.4 それぞれの語に対して、字義通りの意味[2]（M）を決定する

1.5 文脈上の意味（M’）と字義通りの意味（M）の間に乖離があるかどうかを判定する。

1.6（a）乖離があり、しかも文脈上の意味が字義通りの意味と比較によって理解できる場合、メタファーと認定する。

（b）乖離があるが、文脈上の意味が字義通りの意味と比較によって理解できない場合、死んだメタファーと認定する。

---

[1] 語（語彙単位）は辞書の見出し語を判定基準とする。

[2] 字義通りの意味の特徴は、具体性の高いもの、五感を喚起することなど、身体的な行為に関わるもの、曖昧でなく、明確なもの、歴史的に古いもの。

(c) 乖離がない場合、メタファーではないと認定する。

Step1 では、Step 1.1～1.5 まで、MIP2007 に従い、鍋島・中野（2016）の翻訳を参考とする。Step 1.6（a）（b）（c）は新たに考案したものである。以下では、具体的に Step1 の認定手順に基づき、本研究に使う研究データ「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース」（2011）（以下は作文コーパスの日本語母語話者の作文を例にして分析してみる。

二つ目に情報の取捨選択の問題がある。インターネット上では膨大な情報が氾濫しており、その選択は受信者に一任される。他方新聞や雑誌では、その作業を記者が引受けるため、受信者としては、容易に有益な情報に辿り着くことが可能である。三つ目に、一番大きな問題として、情報の源泉の違いがある。新聞や雑誌は、記者が自ら取材をすることで情報をつくり出す、いわば情報発信者とメディアが一体となった機構といえる。しかし、インターネットは媒体の枠を出ることはなく、情報の源泉は各々の発信者に依存するのみである。

（作文コーパス　JP049 第 3 段落後半から引用）

まず Step 1.1 テキスト全体の意味を理解し、Step 1.2 語の区切りを決定する。「目」に関しては、Step 1.3 字義通りの意味（M）は「光の刺激を受けとる感覚器官」に対して、Step 1.4 文脈上の意味（M’）は「ものの順序を表す」である。Step 1.5 によれば、文脈上の意味（M’）と字義通りの意味（M）に乖離がある。Step 1.6（b）文脈上の意味は字義通りの意味と比較によって理解できないので、死んだメタファーとして認定する。

次に、「氾濫する」に関して、Step 1.3 字義通りの意味（M）は「河川の水が堤防からあふれ出ること」で、Step 1.4 文脈上の意味（M’）は「好ましくない物がひろがりはびこること」である。つまり、情報量が多すぎることは受信者にとって好ましくないことがひろがっていることを表している。Step 1.5 文脈上の意味（M’）が字義通りの意味（M）と乖離していて、さらに文脈上の意味は字義通りの意味と比較によって理解できるので、Step 1.6（a）によって「氾濫する」をメタファーとして認定する。

次に、「辿り着く」について、Step 1.2 字義通りの意味（M）は「いろいろ苦労して目的地にやっと行き着く、空間的移動」で、Step 1.3 文脈上の意味（M'）は「目的に達成するまでの道のり」である。つまり、有益な情報に辿り着くということをいろいろ苦労して目的地にやっと行き着くことで表している。Step 1.5 文脈上の意味（M'）と字義通りの意味（M）に乖離があって、さらに文脈上の意味は字義通りの意味と比較によって理解できるので、Step 1.6（a）によって「辿り着く」をメタファーとして認定する。

続いて、「源泉」について、Step 1.3 字義通りの意味（M）は「水、温泉などのわき出るところ」で、Step 1.4 文脈上の意味（M'）は「情報が生ずるところ。起点」である。つまり、情報の生ずるところは水温泉などの湧き出るところと表している。1.5 文脈上の意味（M'）と字義通りの意味（M）に乖離があって、さらに文脈上の意味は字義通りの意味と比較によって理解できるので、Step 1.6（a）によって「源泉」をメタファーとして認定する。

表 4-1　メタファーの認定例

メタファー	字義通りの意味（M）	文脈上の意味（M'）
（二つ）目；（三つ）目	光の刺激を受けとる感覚器官	ものの順序を表す
（情報が）氾濫する	河川の水が堤防からあふれ出ること	情報という好ましくない物がひろがりはびこること
（情報に）辿り着く	いろいろ苦労して目的地にやっと行き着く、空間的移動	情報を獲得するという目的に達成するまでの道のり
（情報の）源泉	水、温泉などのわき出るところ	情報が生ずるところ。起点
（媒体の）枠	物の骨組みや囲み	物事の制約。範囲

最後に、「枠」について、Step 1.3 字義通りの意味（M）は「物の骨組みや囲み」で、Step 1.4 文脈上の意味（M'）は「物事の制約、範囲」である。つまり、媒体の制約、範囲は物の骨組みや囲みと表している。Step 1.5 文脈上の意味（M'）と字義通りの意味（M）に乖離があり、さらに文脈上の意味は字義通りの意味と比較によって理解できるので、Step 1.6（a）によって「枠」をメタファーとして認定する。まとめると表 4-1 になる。

Step1 のメタファーの認定手続きでは、文脈上の意味（M’）と字義通りの意味（M）の間に乖離があるかないか、また文脈上の意味は字義通りの意味と比較によって理解できるかないかはメタファーを認定する上で重要な判断基準である。Step1 に従えば、2.2 で述べた Deignan のメタファー種類（表 1）の中で、歴史的メタファーは現代の言語使用者には、文脈上の意味（M’）と字義通りの意味（M）の間に乖離がないと認識しやすいため、メタファーではないと認定する。本論文では歴史的メタファーはメタファーとみなさないことにとし、メタファー種類の中から除外する。

4.2.2　Step2 概念メタファーの認定手順

Step2： 概念メタファーを認定する手続きを以下に示す。

2.1 文脈上の意味（M’）と字義通りの意味（M）に乖離がある語をピックアップし、媒介語とする。

2.2 媒介語の字義通りの意味は一つのカテゴリーにまとめ、起点領域（Y）とする。

2.3 媒介語の文脈上の意味は一つのカテゴリーにまとめ、目標領域（X）とする。

2.4 同じ目標領域（X）と起点領域（Y）を共有するメタファーが複数あることを確認する。

2.5 目標領域（X）と起点領域（Y）間の要素間で複数の写像関係が成立するか判定する。

2.6 できる場合、一つの概念メタファーと認定する。概念メタファーを支えるメタファーをメタファー表現とする。

本論文では文脈上の意味（M’）と字義通りの意味（M）に乖離がある語を「媒介語」と命名している。「情報が氾濫する」を例にして説明すると、文脈上の意味（M’）と字義通りの意味（M）に乖離がある語は「氾濫する」である。「氾濫する」の文脈上の意味は「情報という好ましくない物がひろがりはびこること」で、「情報」に関する表現である。字義通りの意味は「河川の水が堤防からあふれ出ること」で、「水」に関する表現である。つまり、「氾濫する」という語を通して、「情報」を「水」と関係づけ、文脈上の意味と字義通りの意味の橋渡しの役割を担っている。よって、本研究は「氾濫する」のような、起点領域と目標領域を結びつける語を「媒介語」と名付ける。

Step2.1 に基づき、表 4-1 のメタファーの中で、「氾濫する」「辿り着く」「源泉」「枠」を媒介語とする。続いて、Step 2.2「氾濫する」「源泉」の字義通りの意味はそれぞれ「河川の水が堤防からあふれ出ること」、「水、温泉などのわき出るところ」で、「水」に関する表現のため、＜水＞というカテゴリーにまとめ、＜水＞を起点領域（Y）とする。Step 2.3「氾濫する」「源泉」の文脈上の意味は「情報という好ましくない物がひろがりはびこること」、「情報が生ずるところ。起点」で、「情報」に関する表現のため、＜情報＞を目標領域（X）とする。Step 2.4「情報が氾濫する」と「情報の源泉」は、同じ目標領域＜情報＞と起点領域＜水＞を共有する。

また、筑波ウェブコーパス（TWC）の検索ツール（NLT）を使って調べると、「情報が流れる」「情報が漏れる」「情報が漏洩する」のような表現があり、Step 2.5「情報の氾濫は水の氾濫」、「情報の源泉は水の源泉」「情報の流れは水の流れ」「情報が漏れることは水が漏れること」「情報が漏洩することは水が漏洩すること」の複数の写像関係が成立する。Step 2.6＜情報は水＞を概念メタファーと認定し、「情報が氾濫する」「情報の源泉」は＜情報は水＞という概念メタファーに基づくメタファー表現と認定する。

4.2.3　Step3 メタファーの種類の認定手順

Step3：　概念メタファーに基づくメタファー表現の種類を決める手続きを以下に示す。

3.1 概念メタファーに基づくメタファー表現の媒介語をピックアップする。

3.2 コーパスで媒介語の共起語を調べる。

3.3

A)　媒介語の共起語が目標領域（X）に属する語の頻度と起点領域（Y）に属する語の頻度の比率が小ければ小さいほど、その媒介語を使うメタファー表現は当概念メタファー表現において革新的メタファーである。

B)　媒介語の共起語は目標領域（X）に属する語がない、目標領域（X）に属する語の頻度と起点領域（Y）に属する語の頻度の比率が 0 の場合、その媒介語を使うメタファー表現は当概念メタファー表現において革新的メタファーである。これは革新的メタファーの特殊例である。

3.4

A)　媒介語の共起語が目標領域（X）に属する語の頻度と起点領域（Y）に属する語の頻度の比率が大きければ大きいほど、その媒介語を使うメタファー表現は当概念

メタファー表現において慣用化したメタファーである。

B) 媒介語の共起語は起点領域（Y）に属する語がない、目標領域（X）に属する語の頻度と起点領域（Y）に属する語の頻度の比率が 0 の場合、その媒介語を使うメタファー表現は当概念メタファー表現において慣用化したメタファーである。これは慣用化したメタファーの特殊例である。

Step1、Step2 に基づいて、「情報が氾濫する」「情報の源泉」は＜情報は水＞という概念メタファーに基づくメタファー表現と認定している。「氾濫する」「源泉」は媒介語である。続いて、コーパスで「氾濫する」「源泉」の共起語を調べる。また、共起語は「もの」「こと」といった形式名詞、「これ」「それ」などの代名詞、「一般」といった人名、地名、および「～性、～量」といった接尾語の場合、文脈によって指し示す言葉が異なり、あるいは異なる言葉が一つカテゴリーにまとめられることで、共起語から除外する。

「が氾濫する」の場合、最もよく共起する上位 10 語は「情報（378）、川（96）、言葉（46）、河川（33）、商品（17）、水（15）、本（13）、作品（12）、コンテンツ（9）、広告（9）」である。目標領域＜情報＞に属する語の頻度は 378 で、起点領域＜水＞に占める語は「川、河川、水」で、総頻度が 144 である。その比率は 378/144=2.63 で、媒介語の共起語は目標領域（X）に占める語の頻度と起点領域（Y）に占める語の頻度の比率は大きいので、「情報が氾濫する」は慣用化したメタファーと認定する。次に、「の源泉」の場合、最もよく共起する上位 10 語は「力（421）、所得（115）、税（114）、利益（86）、温泉（80）、価値（67）、成長（65）、優位（63）、パワー（50）、富（49）」で、「情報の源泉」の頻度は 4 である。媒介語の共起語は目標領域（X）に属する語の頻度（情報 4）と起点領域（Y）に占める語の頻度（温泉 80）の比率は 4/80=0.05 である。「情報が氾濫する」と比べて、比率が小さいが、「の源泉」の共起語の種類を見たら、抽象的なものと共起しやすいことがわかる。よって、慣用化したメタファーと認定する。

4.2.4　メタファーの認定手順の適用範囲

続いて、メタファーとメトニミーの関係性から本論文で提案したメタファーの認定手順の適用範囲を検討する。Deignan（2005：70）はメトニミーとメタファーの関係性を論

じる際、メタファーとみなされる表現の中にはメトニミーに動機付けられているものがあると指摘している。例えば、＜怒りは火＞という概念メタファーの例では、私たちは怒りの感情を抱く際に体温の上昇を感じる。つまり、怒りという概念領域の一部分もしくは一要素は体温の上昇が感じられることである。そのような「全体」と「部分」の関係は単一の概念内における写像であり、メトニミーに基づくと述べられている。このように、メタファーをさらに「メトニミーに基づくメタファー」、「メトニミー由来のメタファー」、「メタファー」と分類している。

「メトニミーに基づくメタファー」の特徴について、Deignan（2005）はその写像は領域内と領域間の両方で生じ、コーパスの用例の共起語は別々のグループに分かれると述べている。例えば、「甘い」の字義通りの意味は「砂糖や蜜のような味である」で、比喩義は「香りや雰囲気などが蜜の味を思わせる」「人の心を引き付けて迷わせる」「物事に対する態度がなまぬるい」などがある。「甘い」と共起する名詞をコーパスで調べると、最もよく共起する上位 10 語は、「香り（1、164）、考え（594）、言葉（426）、汁（333）、お菓子（234）、匂い（211）、味（167）、声（151）、話（112）、蜜（108）」である。「汁、お菓子、味、蜜」といった具体物は「甘い」の字義通りの意味と関連しているが、残りの 6 語は比喩義と関連付ける。そのうち、「香りが甘い、匂いが甘い」というのは、味覚から嗅覚への転用で、同時性、あるいは時間的隣接に基づくメトニミーによる共感覚メタファーである。いわゆる、「メトニミーに基づくメタファー」である。このように、「メトニミーに基づくメタファー」は分析対象の語の周辺の共起語がいくつかのグループができ、語の複数の意味を区別することに役に立つことがわかる。共起語の情報は「メトニミーに基づくメタファー」の認定において、一つの重要な手かがりと言える。

続いて、「メトニミー由来のメタファー」について考えよう。Deignan（2005）で挙げた keep an eye on the children/baby の場合、「見る」、「見守る」、「監視する」という意味がある。字義と比喩義の間に明確な境界がない。コーパスの共起語は字義用法と比喩用法の区別には役に立たない。つまり、「メトニミー由来のメタファー」は文脈依存性の高い、字義用法と比喩用法との間で解釈が曖昧で、媒介語の共起情報だけでは認定することが難しい。本論文で考案した認定手順は共起語情報は一つ重要な手かがりとして使われているので、コーパスの共起語は別々のグループに分けられる「メトニミーに基づくメタファー」には適用しているが、「メトニミー由来のメタファー」には適用できない。

最後に、「メタファー」の特徴について、Deignan（2005）は「メタファー」の写像が領域間で生じ、コーパス用例では通常字義用法と比喩用法の間に曖昧性はないと述べている。例えば、「開花する」の字義通りの意味は「草木の花が咲くこと」で、比喩義は「物事が盛んになること」「人の才能が現れること」である。「開花する」と共起する名詞をコーパスで調べると、最もよく生起する上位 10 語は、「才能（122）、能力（84）、花（72）、桜（68）、文化（40）、蕾（24）、素質（14）、個性（8）、ソメイヨシノ（7）、魅力（7）」である。そのうち、「花、桜、蕾、ソメイヨシノ」は字義用法で、残りは比喩用法である。つまり、分析対象の語の周辺に明らかによく出現する語がいくつかのグループに分けられる。即ち、その語の主要な共起語をさがすことによって、字義通りの意味か比喩義か、一つの語が持つ複数の意味を区別することができる。要するに共起語の情報は「メタファー」、「メトニミー基づくメタファー」の認定において一つの重要な手かがりである。本論文で考案した認定手順は共起語情報は一つ重要な手かがりとして使われているので、「メタファー」、「メトニミー基づくメタファー」の認定においては有効であるが、「メトニミー由来のメタファー」の認定においては有効でない。

4.3　研究データ

本章は東京外国語大学によって公開された「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース」（2011 年 3 月）（以下は作文コーパス）を利用し、日本語母語話者による概念メタファーの使用傾向を明らかにする。データの概要は表 4-2 のとおりである。

表 4-2　データの概要

参加者	作文数	本文数（平均）
日本語母語話者（JP）	134	2176（16.2）

JP は東京都内の大学に通う日本人大学生である。TM は台湾出身の中国語を母語とする日本語学習者である。参加者は、次に示す課題文を読み、辞書などは使用せずに約 60 分で原稿用紙 1 枚に 800 字程度で執筆した。

日本語意見文データベースの課題文

下の文を読んで、自分の意見を 800 字ぐらいの日本語で書いてください。 今、世界中で、インターネットが自由に使えるようになりました。ある人は「インターネットでニュースを見ることができるから、もう新聞や雑誌はいらない」と言います。一方、「これからも、新聞や雑誌は必要だ」という人もいます。あなたはどのように思いますか。あなたの意見を書いてください。

課題文で示しているように、今回データとして使う作文の内容が課題文に制限され、主にインターネット時代における情報の入手方法に関するものである。作文コーパスのメリットとして、表現の産出は文脈に依存し、文作りのテストなどと比べて、言語の自然状態に近い。また、課題が事前に設定され、参加者の属性（大学生）もコントロールされている。このように、同じ＜情報＞を目標領域とする概念メタファーを考察する際、同じテーマの作文の中で、どのような概念メタファーが現れるか、また同じ概念メタファーに基づくメタファー表現はどのぐらい観察できるか、その分布の割合を比較できる。よって、本研究は作文コーパスを用いて、4.2 で考案したメタファーの認定手順に従い、＜情報＞を目標領域とする概念メタファーの実態を明らかにする。

4.4　分析と結果

4.4.1　＜情報は食べ物＞の認定結果

作文コーパス中で、「情報」を検索すると、全部で 936 個の表現がヒットした。「情報」に関して以下の用例が現れる。

(1) 自らの一定のビジョンの下、主体的に情報を摂取してこそ与えられた。(JP016-16)
(2) インターネットは紙媒体とちがって得体の知れない情報を呑み込んでは間違った情報にあやつられ、生活が破たんする恐れさえある。(JP132-08)
(3) 次から次へと、私たちの目に真新しい情報を一度に吸収できるかというと、そうではないと思う。(JP087-09)
(4) インターネットが世界中に普及した現代社会では、様々な情報が飛び交い、私たちはますます正しい情報を自ら吟味していく必要にせまられることになった。(JP080-01)

(5) 情報を積極的に取り入れようとしなくても手に入ることが当然となることで、人々は与えられた情報をそしゃくせずに鵜呑みする傾向になってしまう。(JP104-05)

作文コーパスで全文を調べると、「情報」に関わる表現のうち、「摂取する」が１例、「呑み込む」１例、「吸収する」2 例、「吟味する」１例、「咀嚼する」1 例、「鵜呑みする」１例現れている。（1）～（5）からわかるように、日本語母語話者が「情報」を「食べ物」として捉える傾向がある。続いて、本論文で考案したメタファーの認定基準の Step1~Step3 に従い、メタファーの認定を行う。

まず、メタファーの認定手順の Step1 に従い、日本語母語話者の作文を読み、全体の意味を理解する。次に、Step1.2 辞書の見出し語を参考して、語の区切りを決める。Step1.3「摂取する」の字義通りの意味（M）は「食物を体に取り入れる」である。Step1.4 文脈上の意味（M’）は「情報を入手する、受け取る」である。Step1.5 文脈上の意味（M’）と字義通りの意味（M）に乖離がある。Step1.6（a）文脈上の意味（M’）は字義通りの意味（M）と比較によって理解できることで、メタファーと認定する。同様に「呑み込む」「吸収する」「咀嚼する」「吟味する」「鵜呑みする」もメタファーとして認定できる。

続いて、Step2 に従い、Step2.1 文脈上の意味（M’）と字義通りの意味（M）に乖離がある語（摂取する、呑み込む、吸収する、咀嚼する、吟味する、鵜呑みする）を媒介語としてピックアップする。表 4-3 にまとめる。Step 2.2 媒介語の字義通りの意味は、食べ物を体に取り入れる動作を表すカテゴリーにまとめられるので、＜食べ物＞を起点領域とする。Step 2.3 媒介語の文脈上の意味は情報を理解するカテゴリーにまとめられるので、＜情報＞を目標領域とする。2.4 表 4-3 であげた表現は同じ目標領域＜情報＞と起点領域＜食べ物＞を共有している。2.5 目標領域＜情報＞と起点領域＜食べ物＞の間の要素（摂取する、呑み込む、吸収する、咀嚼する、吟味する、鵜呑みする）の写像関係が成立している。具体的にいうと、まず、「摂取する」の例では、食物を体に取り入れることを「摂取する」といい、情報を入手する、情報を受け取ることが食べ物が体に取り入れるように理解される。「摂取する」は媒介語で、起点領域と目標領域の写像が成立している。次に、「呑み込む」の例では、口の中の物を腹の中へ送り込み、また、かみ砕かないでのどを通すことを「呑み込む」という。情報を受け取る、また十分理解せずに受け入れることは、食べ物を噛み砕かないで呑み込むように理解される。「呑み込む」は媒介語で、起

点領域と目標領域の写像が成立している。さらに、「咀嚼する」の例では、体に吸収されやすいように食物を噛み砕く行為を「咀嚼する」といい、情報を十分考えて理解することは食べ物が細かく噛み砕くように理解される。「咀嚼する」は媒介語で、起点領域と目標領域の写像が成立している。「吸収する」「吟味する」「鵜呑みする」も同じ目標領域と起点領域を共有し、写像関係が成立する。要するに、日本語母語話者は「食べ物」に関する具体物の概念を用いて、「情報」という抽象物の概念を理解していることがわかる。Step2 に基づき、＜情報は食べ物＞を概念メタファーとして認定する。「情報を摂取する」「情報を呑み込む」「情報を吸収する」「情報を咀嚼する」、「情報を吟味する」「情報を鵜呑みする」は＜情報は食べ物＞という概念メタファーに基づくメタファー表現である。

続いて、認定手順の Step3 に基づいて、メタファー表現の種類を判定する。Step 3.1 メタファー表現の媒介語をピックアップする。Step 3.2 コーパスで個々の媒介語の共起語上位 20 語までを調べる。本研究は筑波ウェブコーパス（TWC）の検索ツール（NLT）を使い、媒介語の共起語を調べる。検索の結果の中で、「もの」「こと」といった形式名詞、「これ」「それ」などの代名詞、「一般」といった人名、地名、および「～性、～量」といった接尾語の場合、文脈によって指し示す言葉が異なり、あるいは異なる言葉が一つカテゴリーにまとめられる可能性があるため、結果から除外する。また、個々の用例を確認し、語の一部分だけ抜出されたり、日本語として容認度が低い場合、不適切な用例と見なし、結果から除外する。表 4-3 に検索結果を示した。

表 4-3　＜情報は食べ物＞の共起語情報及びメタファーの分類

起点領域 ＜食べ物＞	媒介語	目標領域 ＜情報＞	共起語上位 20 語 （NLT）	共起語の比率 ×1000	メタファーの分類
食物を体に取り入れる。	を摂取する	情報を入手する、受け取る	食品（281）、アルコール（254）、水分（227）、栄養（222）、サプリメント（187）、栄養素（171）、カロリー（147）、水（141）、食物（136）、物質（123）、カルシウム（117）、コラーゲン（110）、食事（107）、タンパク質（98）、食べ物（98）、アミノ酸（92）、葉酸（74）、たんぱく質（73）、成分（68）、野菜（68）、＜情報（12）＞	（12/2597） =4.62	革新的メタファー
口の中の物を腹の中へ送り込む。また、かみ砕かないでのどを通す。	を呑み込む[17]	情報を受け取る、十分理解せず受け入れる	唾（198）、言葉（184）、食べ物（97）、空気（95）、物（68）、唾液（44）、食物（43）、水（37）、針（33）、町（32）、ツバ（29）、生唾（28）、人（26）、異物（26）、息（22）、世界（18）、餌（18）、毛（17）、気持ち（17）、体（16）、＜情報（4）＞	（4/195） =20.5	慣用化したメタファー

[17] 本研究に使う筑波ウェブコーパスの検索ツール（NLT）で調べ、「呑み込む」という語形がない。大辞林（第 3 版）によれば、「飲み込む」と「呑み込む」は同じ見出し語の「のみこむ」の語形なので、「呑み込む」のかわりに「飲み込む」を NLT で検索し、結果を表 4 に示している。

吸い取る、吸い込むこと。外部にあるものを内に取り込むこと。	を吸収する	情報を受け取る、受け入れる	知識（638）、水分（615）、光（567）、エネルギー（424）、衝撃（412）、二酸化炭素（379）、栄養（239）、水（230）、紫外線（202）、熱（172）、＜情報（137）＞、技術（134）、中性子（123）、養分（123）、成分（121）、力（120）、文化（116）、音（98）、栄養分（95）、揺れ（92）	（137/1179）=116.20	慣用化したメタファー
食物をかみ砕くこと。	を咀嚼する	情報を十分考えて理解する	内容（12）、言葉（12）、食物（12）、＜情報（11）＞、食べ物（8）、意味（7）、知識（7）、話（6）、意見（5）、肉（4）、コンセプト（3）、データ（3）、ゼリー（2）、事実（2）、伝承（2）、問題（2）、食塊（2）、生肉（2）、経験（2）、要望（2）	（11/28）=392.85	慣用化したメタファー
味を味わうこと	を吟味する	情報を詳しく念入りに調べて理解する	内容（256）、＜情報（70）＞、素材（54）、言葉（43）、中身（37）、材料（37）、意味（26）、方法（23）、結果（21）、商品（20）、条件（18）、相手（15）、自分（15）、食材（14）、主張（13）、意見（13）、質（13）、証拠（12）、物件（11）、状況（11）	（70/14）=5000	慣用化したメタファー
鵜が魚をまるのみにすること	を鵜呑みする	情報を十分理解、批判せずに受け入れること	＜情報（9）＞、言葉（6）、話（5）、答え（2）、発表（2）、意見（2）、説（1）、証言（1）、結果（1）、申し出（1）、格付け（1）、常識（1）、口コミ（1）、切り取り（1）、成功例（1）、ランキング（1）、スタイル（1）、アプローチ（1）、資料（1）、満足度（1）	（9/0）=0	慣用化したメタファー（特殊例）

次に、媒介語の共起語が目標領域（X）に属する語の頻度と起点領域（Y）に属する語の頻度の比率を算出する。媒介語の共起語は起点領域（Y）に属する語かどうかの判定は3人の日本語母語話者（30代、一般社会人）によって行った。具体的には、各媒介語と共起する20の名詞を示し、その中で、媒介語と一緒に使う時、食べ物類の語だと思うものを〇で囲むようにと指示した。3人のうち、2人の母語話者が〇で囲んだ共起語を“　”で示し、コーパスで情報の頻度を“＜＞”で示す。共起語の比率を計算する時、分子が“＜＞”の語のコーパス頻度で、分母が“　”の語のコーパス頻度の和である。

具体的には、「情報を摂取する」の媒介語「摂取する」において、その共起語のうち、2人の母語話者に食べ物類の語だと判定されるのは「食品、アルコール、水分、栄養、サプリメント、栄養素、カロリー、水、食物、カルシウム、コラーゲン、食事、タンパク質、食べ物、アミノ酸、たんぱく質、成分、野菜」である。共起語のすべては体外のものを体内に取り入れ、体の成長に影響を与える物で、＜食べ物＞というカテゴリーにまとめる。「情報を摂取する（12）」の頻度と18の共起語のコーパスの総頻度（2597）との比率を計算し1000をかけて、4.62となる。同じように、「情報を呑み込む」「情報を吸収する」「情報を咀嚼する」、「情報を吟味する」「情報を鵜呑みする」の共起語の比率を算出し、表4に示した。

表4-4の「共起語の比率」は、「情報を摂取する」という比喩用法の数が「摂取する」の字義用法の数に対する比率がどのくらいかを示している。比喩用法と字義用法の比率が小さければ小さいほど、当メタファー表現はあまり使われていないことがわかり、Step3.3によって、革新的メタファーと認定する。一方、比喩用法と字義用法の比率が大きければ大きいほど、当メタファー表現はよく使われていることがわかり、Step3.4によって、当メタファー表現は慣用化したメタファーと認定する。

表4-4でわかるように、「情報を呑み込む」「情報を吸収する」「情報を咀嚼する」「情報を吟味する」の4つのメタファー表現では、それぞれの媒介語の共起語の比率は20.5、116.20、 392.85、5000である。つまり、「呑み込む」「吸収する」「咀嚼する」「吟味する」といった表現は目標領域＜情報＞との共起が徐々に強くなり、起点領域＜食べ物＞に関する語との共起が弱くなることがわかる。言い換えれば、「呑み込む」「吸収する」「咀嚼する」「吟味する」に関しては、字義用法より比喩用法がよく使われていることを示し、認定基準3.4（a）に従い、慣用化したメタファーと認定する。

続いて、「共起語の比率」が 0 の場合を考えよう。0 になったのは、媒介語の共起語が目標領域に属する語がないか、それとも、起点領域に属する語がないためである。つまり、コーパスの中に比喩用法と字義用法はどちらがないという可能性が考えられる。表 4 の「鵜呑みする」では、「鵜呑みする」の字義通りの意味は「鵜が魚をまるのみにすること」であり、文脈上の意味は「情報を十分理解、批判せずに受け入れること」である。Step1.5、1.6（a）に従えば、字義通りの意味と文脈上の意味に乖離があり、しかも文脈上の意味は字義通りの意味と比較によって理解できるので、メタファーとして認定できる。しかし、現在では字義用法を使う用例は全くなく、比喩用法がもっぱら使われている。そのため、認定基準 3.4（b）に従い、慣用化したメタファーと認定する。これは慣用化したメタファーの特殊例である。

以上のように、本論文で考案したメタファーの認定手順 Step1～Step3 に基づき、＜情報は食べ物＞を一つの概念メタファーと認定し、「情報を摂取する」「情報を呑み込む」「情報を吸収する」「情報を咀嚼する」、「情報を吟味する」「情報を鵜呑みする」は＜情報は食べ物＞という概念メタファーに基づくメタファー表現である。「情報を摂取する」は革新的メタファー、「情報を呑み込む」「情報を吸収する」「情報を咀嚼する」「情報を吟味する」は慣用化したメタファー、「情報を鵜呑みする」は慣用化したメタファーの特殊例である。

4.4.2　＜情報は水＞の認定結果

日本語母語話者の作文の中で、情報に関する表現では、以下の用例が見られる。

(6) 第三に、インターネットは主に画面によって情報を流すものである点がある。（JP002-11）

(7) インターネットは誰もが情報発信できる反面、間違った情報が流れる可能性や改ざんの危険性があります。（JP018-13）

(8) 現在、新聞や雑誌などから入手できる情報より、遥かに多種多様な情報が、web 上に溢れている。（JP082-03）

(9) インターネット上では膨大な情報が氾濫しており、その選択は受信者に一任される。（JP049-14）

(10) しかし、インターネットは媒体の枠を出ることはなく、情報の源泉は各々の発信

者に依存するのみである。(JP049-18)

(11)　そのような人々にとって新聞や雑誌がなくなることは、重要な情報源を失うことになりかねない。(JP063-12)

(12)　ユビキタスな情報浴への参加と、伝達の即効性という点で、インターネットはかつてないレベルでの社会変革を生む鍵を握っていることは間違いなかろう。(JP083-26)

(6) から (7) までの用例からわかるように、日本語母語話者は「情報」を「水」として捉える傾向がある。日本語母語話者の作文の全文を調べると、「情報」に関わる表現のうち、「流す」が 12 例、「流れる」が 7 例、「溢れる」が 5 例、「氾濫する」が 4 例である、「情報の源泉」が 2 例、「情報源」34 例、「情報浴」が 1 例である。メタファーの認定手順の Step1~3 に基づいて認定を行い、結果を表 4-3 で示す。

表 4-4　＜情報は水＞の共起語情報及びメタファーの分類

起点領域 ＜水＞	媒介語	目標領域 ＜情報＞	共起語上位 20 語 （NLT）	共起語の比率 ×1000	メタファーの分類
液体が自然に下に移動するようにする。	を流す	情報が伝わるよう、広まるようにする。	涙（4731）、汗（3081）、＜情報（1343）＞、電流（1264）、血（1248）、水（1244）、電気（451）、音楽（451）、映像（258）、噂（215）、曲（171）、デマ（130）、リンパ（125）、ニュース（117）、番組（116）、血液（115）、音（111）、仕掛け（109）、悔し涙（109）、家（109）	（1343/10528）=127.56	慣用化したメタファー
液体がある方向へ自然に移動する。	が流れる	情報が広まる。	電流（1873）、水（1872）、時間（1241）、川（1113）、血（791）、空気（730）、＜情報（698）＞、音楽（607）、ニュース（599）、血液（580）、噂（545）、電気（477）、涙（457）、月日（448）、曲（409）、歳月（373）、映像（370）、アナウンス（313）、時（297）、放送（241）	（698/4813）=145.02	慣用化したメタファー
液体が容器や池川などにいっぱいになって上の方からこぼれる。	が溢れる	情報が（入り切らないほど）たくさんある。	涙（1484）、＜情報（545）＞、笑顔（441）、水（396）、人（307）、物（199）、思い（182）、気持ち（177）、言葉（127）、光（100）、愛（94）、活気（93）、喜び（83）、エネルギー（73）、自然（73）、商品（71）、車（64）、魅力（62）、声（59）、力（58）	（545/1880）=289.89	慣用化したメタファー

河川の水が堤防からあふれ出ること	が氾濫する	情報という好ましくない物がひろがりはびこること	＜情報（378）＞、川（96）、言葉（46）、河川（33）、商品（17）、水（15）、本（13）、作品（12）、物（10）、コンテンツ（9）、広告（9）、記事（9）、食品（9）、メディア（6）、映像（6）、コピー（5）、写真（5）、意見（5）、文章（5）、知識（5）	（378/144）=2625	慣用化したメタファー
水、温泉などのわき出るところ	の源泉	情報が生ずるところ。起点	力（421）、所得（115）、税（114）、利益（86）、温泉（80）、価値（67）、成長（65）、優位（63）、パワー（50）、富（49）、活力（48）、エネルギー（40）、口座（37）、収益（36）、権力（36）、モチベーション（33）、命（30）、活動（29）、利潤（26）、創造（26）、＜情報（4）＞	（4/80）=50	慣用化したメタファー
みなもと、水の流れるもと	源	情報の始まり	エネルギー（7）、供給（6）、本（5）、発生（4）、＜情報（3）＞、重力（2）、資金（2）、栄養（2）、感染（2）、動力（2）、排出（1）、水質（1）、流（1）、税収（1）、線（1）、蛋白（1）、出血（1）、励起（1）、危険（1）、収入（1）	（3/2） =1500	慣用化したメタファー
湯水を身体にかける、からだをさらす	浴	情報の受け手が情報にさらす	岩盤（54）、薬（22）、熱（17）、足（16）、砂（11）、温泉（8）、半身（6）、塩（6）、時間（5）、手（4）、一人（3）、機械（3）、特殊（3）、芳香（3）、被覆（2）、瞬間（2）、溶岩（2）、共同（2）、公衆（2）、個（2）	（0/8）=0	革新的メタファー（特殊）

Step1 に従い、Step 1.1 まず日本語母語話者の作文を読み、テキスト全体の意味を理解する。Step 1.2 辞書の見出し語を判断基準にして、語を区切る。Step 1.3「流す」の字義通りの意味（M）は「液体が自然に下に移動するようにする」である。Step 1.4「流す」の文脈上の意味（M’）は「情報が伝わるよう、広まるようにする」である。Step 1.5 文脈上の意味（M’）と字義通りの意味（M）に乖離がある。Step 1.6（a）文脈上の意味（M’）は字義通りの意味（M）と比較して理解できることで、「情報を流す」をメタファーとして認定する。同じく Step1 に基づき、「情報が流れる」「情報が溢れる」「情報が氾濫する」「情報の源泉」「情報源」「情報浴」をメタファーと認定する。

続いて、Step2 に基づき、概念メタファーの認定を行う。Step 2.1 文脈上の意味（M’）と字義通りの意味（M）に乖離がある語（流す、流れる、溢れる、氾濫する、源泉、源、浴）をピックアップし、媒介語とする。Step 2.2 媒介語の字義通りの意味は同じ水の様態を表すカテゴリーにまとめられるため、＜水＞を起点領域とする。Step 2.3 媒介語の文脈上の意味は情報が広まる様態を表すカテゴリーにまとめられるので、＜情報＞を目標領域とする。Step 2.4「情報を流す」「情報が流れる」「情報が溢れる」「情報が氾濫する」「情報の源泉」「情報源」「情報浴」といった表現は同じ目標領域＜情報＞と同じ起点領域＜水＞を共有している。Step 2.5 目標領域（X）と起点領域（Y）間の要素が複数の写像関係が成立する。具体的にいうと、水を流すことは情報を広げることに写像されている。水が流れる様子が情報が広がる様子に写像されている。水が容器の上方からこぼれる様子が情報がたくさんある様子に写像されている。水が氾濫している様子は情報が広がりはびこる様子に写像されている。また、「情報の源泉」「情報源」「情報浴」も起点領域＜水＞と目標領域＜情報＞の写像関係が成立している。Step 2.6＜情報は水＞は一つの概念メタファーと認定し、「情報を流す」「情報が流れる」「情報が溢れる」「情報が氾濫する」「情報の源泉」「情報源」「情報浴」は概念メタファー＜情報は水＞を支えるメタファー表現と認定する。

さらに、認定手順の Step3 に基づいて、メタファー表現の種類を判断する。Step 3.1「流す、流れる、溢れる、氾濫する、源泉、源、浴」を媒介語としてピックアップする、Step 3.2 コーパスで媒介語の共起語上位 20 語までを調べたものが、表 4-5 である。次に、媒介語の共起語は目標領域（X）に属する語の頻度と起点領域（Y）に属する語の頻度の比率を算出する。媒介語の共起語は起点領域（Y）に属する語かどうかの判定は 3 人の日本語母語話者（30 代、一般社会人）が行った。具体的には、各媒介語と共起する 20

の名詞を示し、その中で、媒介語と一緒に使う時、水類の名詞だと思うものを〇で囲むようにと指示した。3 人のうち、2 人の母語話者が〇でともに〇で囲んだ共起語を“　”で示し、コーパスで情報の頻度を“＜＞”で示す。共起語の比率を計算する時、分子が“＜＞”の言葉のコーパス頻度で、分母が“　”の言葉のコーパス頻度の和である。媒介語の共起語を見てみると、「流す」の媒介語は「涙、汗、情報、電流、血、水、電気、音楽、映像、噂、曲、物、デマ、リンパ、ニュース、番組、血液、音、仕掛け、悔し涙」がある。そのうち、「涙、汗、血、水、血液、悔し涙」は起点領域に属する語である。目標領域に属する語の頻度と起点領域に属する語の頻度の比率を算出する。127.56 という値が得られる。Step 3.4（a）に従い、「情報を流す」は慣用化したメタファーとして認定できる。同じように、「情報が流れる」「情報が溢れる」「情報が氾濫する」「情報の源泉」「情報源」「情報浴」の共起語の比率を算出し、Step 3.4（a）に従い、「情報が流れる」「情報が溢れる」「情報が氾濫する」「情報の源泉」「情報源」を慣用化したメタファーとして認定する。「情報浴」の場合、筑波ウェブコーパスの中で、「情報浴」という表現がない。Step 3.4（b）　に従い、コーパスの中、媒介語の共起語は目標領域（Y）に属する語がない、目標領域（X）に属する語の頻度と起点領域（Y）に属する語の頻度の比率が 0 なので、革新的メタファーだと認定する。これは革新的メタファーの特殊例である。

4.5　考察

4.5.1　＜情報は食べ物＞と＜情報は水＞の比較

本論文では作文コーパスに基づき、「情報を」「情報が」を絞り込み、本論文で考案したメタファーの認定手順に従い、「情報は食べ物」、「情報は水」という概念メタファーを検出した。日本語母語話者の作文の中で、「情報が飛び交う」「情報が出回る」といった表現もあるが、メタファーの認定手順に基づき分析すると以下のようになる。Step1 によれば、「飛び交う」の字義通りの意味は「鳥などが入り乱れて飛ぶ。互いに飛びちがう」が、文脈上の意味は「情報がネット上に散らばって、散乱している」である。Step 1.5、1.6（a）文脈の意味は字義通りの意味の間に乖離があり、しかも比較によって理解できるので、メタファーとして認定できる。次に「出回る」の字義通りの意味は「商品が市場に行き渡り、あちこちで見られるようになる」で、文脈の意味は「情報がネット上にあふれ、あちこち見られること」である。Step 1.5、1.6（a）文脈の意味は字義通りの意

味の間に乖離があり、しかも比較によって理解できるので、メタファーとして認定できる。しかし、このような表現は作文コーパスの中に少なく、認定手順Step2.4「同じ目標領域（X）と起点領域（Y）を共有するメタファーが複数が確認する」とStep2.5「目標領域（X）と起点領域（Y）間の要素が複数の写像関係が成立するか判定する」を満たさないので、概念メタファーの認定ができない。このような「一回限り」のメタファーは本研究では取り扱わない。本研究の研究データである作文コーパスに限っては、＜情報＞を目標領域とする概念メタファーは＜情報は食べ物＞＜情報は水＞と認定する。

続いて、＜情報は食べ物＞＜情報は水＞の違いについて論じる。まず、この2つの概念メタファーに基づくメタファー表現の数を見ることとする。表4-5では、作文コーパスと筑波ウェブコーパス（TWC）の出現頻度、及び共起語の比率、メタファーの種類を示している。

表4-5からわかるように、作文コーパス及び筑波ウェブコーパスでは、＜情報は食べ物＞という概念メタファーより、＜情報は水＞という概念メタファーの方がメタファー表現の数が多い。

＜情報は食べ物＞＜情報は水＞の2つの概念メタファーのメタファー表現の数が異なる原因は2点が考えられる。1つ目は、筑波ウェブコーパスで示されたように、もともと日本語の中で＜情報は食べ物＞より＜情報は水＞に関するメタファー表現が多いと考えられる。2つ目は、作文の課題文によるとも考えられる。作文コーパス課題文の内容はインターネットと新聞や雑誌が情報が伝わる手段として、どちらがよいかについて執筆者に意見を書かせるもので、情報が大量に存在する状態、つまり「情報が溢れる」「情報が氾濫する」といった表現、及び情報が読者に伝わることに関するメタファー表現「情報を流す」「情報が流れる」が多く出たと考えられる。

また、全体的に作文コーパスより、筑波ウェブコーパスのメタファー表現の数が多いが、「情報源」と「情報浴」に限っては、作文コーパスの数が多い。前述のように、それは今回の作文コーパス課題文によるものだと考えられる。特に、「情報浴」という革新的メタファー表現について、普通の文脈では、誤用だと捉えがちだが、今回の課題文において、作文の執筆者が意図的に使っているように伺える。また、それは＜情報は水＞という概念メタファーに基づいて作られた革新的メタファーであるため、読書に伝わりやすく、誤用というより特殊な文章表現と考えられる。つまり、メタファー表現の産出は元の言語共同体の使用状況に関わりながら、特定な文脈からの制約も受ける。

表 4-5　メタファー表現の出現頻度及びメタファーの種類

概念メタファー	メタファー表現	作文コーパス	筑波ウェブコーパス	共起語の比率×1000	メタファーの種類
情報は食べ物	（情報）を摂取する	1	12	4.62	革新
	（情報）を呑み込む	1	4	20.5	慣用化
	（情報）を吸収する	2	137	116.20	慣用化
	（情報）を咀嚼する	1	11	392.85	慣用化
	（情報）を吟味する	1	70	5000	慣用化
	（情報）を鵜呑みする	1	9	0	慣用化（特殊例）
情報は水	（情報）の源泉	2	4	50	慣用化
	（情報）を流す	12	1343	127.56	慣用化
	（情報）が流れる	7	698	145.02	慣用化
	（情報）が溢れる	5	545	289.89	慣用化
	（情報）が氾濫する	4	378	2625	慣用化
	（情報）源	34	3	1500	慣用化
	（情報）浴	1	0	0	革新（特殊例）

また、「（情報）を鵜呑みする」と「（情報）浴」に違いについて以下のようにさらに説明する。メタファー種類の認定基準に基づいて、Step3.4（b）で述べたように「媒介語の共起語は起点領域（Y）に属する語がない、目標領域（X）に属する語の頻度と起点領域（Y）に属する語の頻度の比率が 0 の場合、その媒介語を使うメタファー表現は当概念メタファー表現において慣用化したメタファーである。これは慣用化したメタファーの特殊例である」。表 4-3 では、「鵜呑みする」の共起語は起点領域＜食べ物＞に属する語がない。つまり、「*ご飯を鵜呑みする」のように、「鵜呑みする」は食べ物を噛まずに丸のみにするような意味がほとんど使われない。一方、「情報を鵜呑みする」のように、ほとんどメタファー表現として認識されず、情報を受け取る、十分理解せずに受け入れる

という意味は一般的に使われる。本研究のメタファー認定基準及びコーパスの結果に基づき、「（情報）を鵜呑みする」を「慣用化したメタファーの特殊例」に認定する。

次に、Step3.3（b）で述べたように、「媒介語の共起語は目標領域（X）に属する語がない、目標領域（X）に属する語の頻度と起点領域（Y）に属する語の頻度の比率が 0 の場合、その媒介語を使うメタファー表現は当概念メタファー表現において革新的メタファーである。これは革新的メタファーの特殊例である」。表 4-4 では、「浴」の共起語は目標領域＜情報＞に属する語がない。つまり、「*報道浴」のように、「浴」は情報の受け手が情報にさらされるという意味がほとんど使われない。一方、「温泉浴」のように、湯水を身体にかけるという意味は一般的に使われる。本研究のメタファー認定基準及びコーパスの結果に基づき、「（情報）浴」を「革新的メタファーの特殊例」に認定する。

「（情報）を鵜呑みする」は慣用化していて、ほとんどメタファー表現として認識されない一方、「情報浴」は情報をたくさん受け取るという意味で、メタファー表現として認識されやすい。本研究では、このようなメタファー表現を区別している。

4.5.2　メタファーの種類と語義の関係

以下ではメタファーの種類と語義の関係を論じる。表 4-5 であげたメタファー表現のうち、「情報を摂取する」は革新的メタファーである。媒介語である「摂取する」の語義を辞書[1]で調べて、単義だと確認できる。＜情報＞を目標領域とするメタファー表現を生成する際、媒介語が単義の場合、革新的メタファーになりやすいとわかった。

また、『大辞林』（第 3 版）によると、「吸収する」「咀嚼する」「呑み込む」「吟味する」も多義語である。しかし、それぞれ、多義性が異なる。前述したように、語の主要な共起語を探すことによって、字義通りの意味か、比喩義か、一つの語が持つ複数の意味を区別することができる。

まず、「吸収する」と「咀嚼する」の共起語はいくつかのカテゴリーにまとめられることを述べる。「吸収する」について、「水分、水、栄養、養分、栄養分、成分」といった共起語は生体が細胞膜などの膜状物を通して物質を内部に取り入れることを表す。「エネルギー、中性子、力、光、衝撃、二酸化炭素、紫外線、熱、音、揺れ」といった共起語は電磁波や粒子線が物質中を通過するとき、エネルギーや粒子が物質に取り込まれ、その強

[1] 『大辞林』第 3 版

度や粒子数が減少することを表す。「知識、技術、文化、情報」といった共起語は外部にある抽象的なものを内部に取り込む、取り入れることを表している。即ち、1 つの語が複数の意味を有し、且つ複数の意味の間に関連性が認められるので、「吸収する」は多義語である。「咀嚼する」の場合、共起語の「食物、食べ物、肉、ゼリー、生肉、食塊」は食物をかみ砕くことを表す。「内容、言葉、情報、意味、知識、話、意見、コンセプト、データ、事実、伝承、問題、経験、要望」は言葉や物の内容をよく考えて理解することを表している。「吸収する」と同様に、「咀嚼する」も多義語である。そして、＜情報＞を目標領域とするメタファー表現を生成する際、媒介語が多義の場合、慣用化したメタファーになりやすいことを明らかにした。

次に、「呑み込む」「吟味する」を検討する。1 つの語が複数の意味を有し、且つ複数の意味の間に関連性が認められるという定義から見れば、「呑み込む」「吟味する」は多義語である。しかし、それぞれの共起語を見ればわかるように、「呑み込む」の字義用法がよく使われている。一方、「吟味する」は比喩用法がよく使われている。表 4-5 では、両方ともに慣用化したメタファーと認定したが、「吸収する」と「咀嚼する」と異なり、「呑み込む」は革新的メタファーに、「吟味する」の場合は慣用化したメタファーの特殊例に近いことがわかる。つまり、メタファー性は連続して、媒介語の多義性と密接にかかわっている。

最後に、「鵜呑みする」を検討する。「鵜呑みする」の字義通りの意味はほとんど使われていない。鍋島（2011）では、「鵜呑みする」のように、物理的領域の意味は既に利用できなくなる現象は「痕跡的多義」と呼ばれている。

表 4-6　多義と痕跡的多義の例

字義用法	比喩用法	
(1) a.食べ物を咀嚼する	b.情報を咀嚼する	←多義
(2) a.食べ物を*鵜呑みする	b.情報を鵜呑みする	←痕跡的多義

上述のように、「咀嚼する」は「食物を噛み砕くこと」と「言葉、物の内容をよく考えて十分理解すること」の 2 つの意味からなっている。一般に「咀嚼する」のように複数

の意味を持つ語は多義語と言われる。（1）a、b のようにそれぞれの意味を支える表現をよく見かける。例えば、「肉を咀嚼する」、「内容を咀嚼する」など。

一方、（2）a、b のように「痕跡的多義」と呼ばれているのは字義通りの意味を支える表現はほとんどなく、比喩義を支える表現は一般話者に馴染みがあるものである。本論文のメタファー種類の認定手順 Step3.4（b）によれば、媒介語は痕跡的多義の場合、媒介語の共起語は目標領域に著しく多く、ほとんど起点領域にないことがわかる。共起語が起点領域と目標領域に属する比率を計算する時、0 になる。要するに、媒介語は痕跡的多義の場合、メタファー表現を生成する際、慣用化したメタファー（特殊例）になる。つまり、メタファー表現を生成する際、媒介語が単義の場合、革新的メタファーになりやすい。媒介語が多義の場合、慣用化したメタファーになりやすい。媒介語が痕跡的多義の場合、慣用化したメタファーの特殊例になりやすい。以上で述べたメタファーの種類と媒介語の語義の関係を図 4-1 に示す。

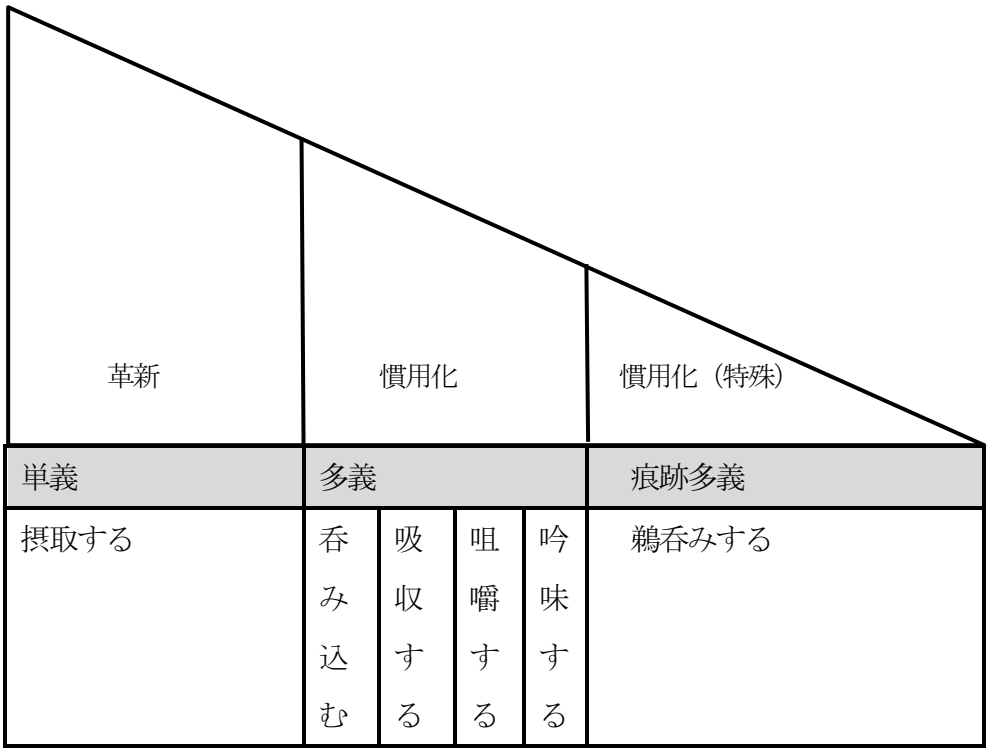

図 4-1　メタファーの種類と語義の関係

＜情報は水＞に関するメタファー表現も同じ現象が見られる。媒介語である「流す」「流れる」「溢れる」「氾濫する」「源泉」「源」の語義を辞書で確認すると、すべて多義語である。これらの媒介語が生成するメタファー表現はStep3の認定手順に基づき、全部慣用化したメタファーと認定できる。一方、「浴」の語義を辞書で確認すると、単義である。Step3の認定手順に基づき、革新的メタファーと認定できる。上述したメタファーの種類と媒介語の語義との関係性を支持している。

4.6　本章のまとめ

本論文は先行研究を踏まえて、3つのステップに分けて、メタファーの認定手順を提案した。そして、作文コーパスおよび11億語を収録した筑波ウェブコーパス（TWC）を利用し、＜情報＞を目標領域とする概念メタファーを検討した。結果として、作文コーパスから＜情報は食べ物＞＜情報は水＞の2つの概念メタファーを検出し、概念メタファーの認定手順の有効性を示した。さらに、コーパスでの共起語情報を利用し、＜情報は食べ物＞と＜情報は水＞の2つの概念メタファーの違いを比較した。また、メタファー表現の中で、起点領域と目標領域を結びつける媒介語の語義とメタファーの種類の関係性を検討した。

具体的には、まず、本論文で考案したメタファーの認定手順は①メタファーの認定、②概念メタファーの認定、および③メタファー表現の種類の認定に分けられる。本研究の認定手順によって、メタファー種類を「死んだメタファー」「革新的メタファー」「慣用化したメタファー」に分類できる。字義通りの意味と文脈上の意味に乖離があるとは認識できないので、「歴史的メタファー」を本研究の認定から除外した。さらに、メトニミーとメタファーの関係性という観点から、本論文で考案したメタファーの認定手順は、「メトニミーに基づくメタファー」、及び「メタファー」においては、媒介語の共起語は媒介語の字義通りの意味や比喩義によっていくつかのグループに分かれているため、これらのメタファーの認定において有効である。しかし、字義通りの意味と文脈上の意味と連続性があり、共起語によって判断できない「メトニミー由来のメタファー」のメタファーの認定においては有効ではない。

次に、メタファーを引き起こす、起点領域と目標領域を結びつける媒介語の共起語情報は、メタファーの分類において重要な手がかりを提供してくれた。媒介語の共起語情報によって、媒介語は単義か、多義か、あるいは痕跡的多義かを判断できる。つまり、媒介語

は単義の場合、メタファー表現を生成する時、革新的メタファーになりやすい。また、媒介語が多義で、メタファー表現を生成する時慣用化したメタファーになりやすい。最後に、媒介語は痕跡的多義の場合、慣用化したメタファー（特殊）を生成しやすいことを明らかにした。メタファー能力と多義語の関係について、東（2005、2006）では、日本人学生を対象に「読む」「書く」の領域における英語の比喩的表現の理解と運用能力と学習者の語彙力、多義語力の関係を調べている。その結果、メタファーの理解能力と語彙力、多義語力に高〜中程度の相関があり、メタファーの運用能力と語彙力、多義語力に高〜中程度の相関があることを示した。本論文の結論からわかるように、多義は慣用化したメタファーの媒介語の重要な特徴である。本論文の結論から見れば、メタファーの理解と運用能力は語彙力、多義語力との間に高〜中程度の相関関係があることは当然の結果である。

第 5 章、第 6 章では、本章の認定手順を用いて、日本語と中国語のコーパスから概念メタファーを抽出し、日中の違いを比べる。さらに、学習者のコロケーションの誤用と日中概念メタファーの関係を論じる。

第 5 章　＜思考＞メタファーに関する日中の異同

5.1　研究目的

2 章では、＜思考＞メタファーに関する先行研究を概観し、以下のような問題点を指摘した。

① 身体部位のどこが考えを知覚するかという点において、日本語と中国語はまだ明らかになっていない。

② ＜頭は考えを入れる容器＞という概念メタファーでは、スクリーン、ろう版は容器として考えられないので、同じメタファーにまとめるのは不適切である。

③ 韓（2014）であげた用例と概念メタファーの写像が不一致することがある。

以上を踏まえて、本章では＜思考＞メタファーの日中異同を明らかにすることを目的とする。本章は、まず、＜思考＞メタファーに関する学習者コーパスに現れる学習者の誤用を分析する。次に、日本語コーパス、中国語コーパスに基づき、＜思考＞メタファーに関する日中間の概念メタファーの違いを明らかにする。以下 2 つの課題を設定する。

RQ1：＜思考＞メタファーに関わる「直訳」と「非直訳」の誤用は何か。

RQ2：＜思考＞メタファーに関して、日中間において概念メタファーの写像はどう異なっているのか。

上記の研究課題を明らかにするために、日本語と中国語コーパスを利用して調査を行う。まず、Lang-8 学習者コーパスから母語を中国語とする学習者が産出する文を分析対象に、＜思考＞メタファーの写像に対応するコロケーションを抽出し、分析対象とする。

次に、日本語コーパス（BCCWJ、TWC）と中国語コーパス（CNC、CCL）からそれぞれ日本語と中国語の用例を抽出し、日中間の＜思考＞メタファーの異同を比べる。

5.2　結果と分析

5.2.1　RQ1：＜思考＞メタファーに関する「直訳」と「非直訳」の誤用

Lang-8 学習者コーパスを用いて思考及び身体部位に関する表現を調べ、以下のような誤用例が見つかった。

表 5-1　＜思考＞メタファーに関する学習者の誤用

	誤用例	中国語直訳
1	皆は普段の悩みを脳後にし、思い存分はしゃいでいた。	把烦恼抛到脑后
2	小さい子供の頃あっちこっちの賑やかな場面が脳で深いです。	大脑深处
3	今僕の頭中に疑いがあるね。	*在头中产生怀疑
4	そちらにきっと多くの神様がいる考えは頭に満ちた。	*想法充满头
5	あの頃は、あの人は偉いですね、と言うの考えが頭に飛びましたが、今振り返て見ると、子供は面白いと思います。	*跃入头里
6	ざあざあと降っている雨を見て、今朝習った「夕立」という単語は脳内をよぎった。	从脑内一闪而过
7	仕事が忙しいけど、シャワーをする時、急にこの考え方を脳に映っている。	映入脑海
8	今までも当時の映像を頭によく映している。	*映入头里
9	今日の家庭授業は脳力がかかりすぎた。	太费脑力了
10	毎日このままぼんやりしていたら、脳が錆びがつきがちだ。	脑袋容易生锈
11	頭はロボット気味ですね。しばらく日記を書いていないので、頭が錆びになるようでした。	*头生锈
12	頭は老化になったみたい、忘れることが多いです	*头老化
13	ですから、われわれの 90 後絶対は頭が壊れた人じゃないです。	*头坏掉了
14	そして，その新しい太陽を見ていると，大感激をしていて，頭も涼しくなります，人生に関する大切の問題も考えできます。	*头变凉
15	1 要は、発想の衣替えですよ。2 要は、発想の回転ですよ。3 要は、発想の転換ですよ。	*转动思路 转换思路
16	彼女と現在居る場所が違うというだけで，これほどに相手のことを思い，想像力をフル回転させることになるとは思っても見なかったことである。	*使想象力全面转动
17	時々には経験します、思考が暴走のように自分にそれを理解しようとする時間もくれないことを。	*思考在暴走

（1）では、学習者が「脳」を前と後ろに分け、悩みを脳の後ろにするのは悩みを見えないところに置くことで、悩みを忘れること意味をする。（2）～（5）では、考え（場面、疑い）は容器の中のものとして捉えられている。「脳」あるいは「頭」は容器のような存在で、深さがあり、また、考えが容器から出入りすることが述べられている。（6）～（8）では、「脳」あるいは「頭」は観察できる領域（範囲）として捉えられる。この領域を通過する、あるいは、そこに映像が映ると、知覚できると捉えられている。

（9）～（17）では、学習者が「脳」あるいは「頭」を「機械」のように理解している。（9）では、頭を使うことはイコール機械のエネルギーを消耗することと捉えている。（10）では、頭を使わないことはイコール機械を使わないことであるため、錆びつきやすいと捉えている。（11）～（14）では、学習者の母語に訳すと、「*头生锈」「*头老化」「*头坏掉了」「*头变凉」になる。いずれも中国語に直訳して非文となる。（11）では、「気味」はある傾向があることを意味している。学習者がまず「頭」が「ロボット」のようだと述べ、次に、しばらく頭を使って勉強をしていないことを、「頭」が「錆び付く」ように感じると述べている。（12）と（13）も同じように、学習者は「頭」が正常に動かないことを機械の老朽化や故障しているように理解している。（14）では、中国語では、“头脑冷静下来”（頭が冷静になる）、日本語では、「頭が冷静になる」と言う。しかし、“*头变凉”（頭が涼しくなる）とは言わない。中国語では、「脳」を考えるための機械として捉え、日本語では、「頭」を考えるための機械として捉えている。機械が正常な作動温度に下がったら、思考が正常に行われる。（15）～（17）の共通点として、上記の文は全部思考に関する表現で、機械の運転に関わっている。しかし、日本語としても、中国語の直訳としても非文である。学習者の産出から思考と機械の動きとなんらかの関係性があると伺える。

以上の誤用例を踏まえて、5.2.2 から日本語と中国語において、「脳」、「頭」と思考の関係を明らかにすることを目的とする。

5.2.2　RQ2：＜思考＞メタファーに関する日中の異同

5.2.2.1　＜頭は容器、考えは内容物＞（日）

まず、以下の日本語の例を見よう。

（18）もちろん、それぞれの物質で、なぜ適当に電流が流れてコントロールできるかを

きちっと厳密に計算をやって理解することはそこそこ難しいが、概念を頭に入れること、考え方そのものを理解することは必ずしも難しくはない。（吉野勝美著『導電性高分子のはなし』、2001、p.578）

（19）厭な考えを頭から追い出そうと、彼は血塗れの額に手を当てて揉んだ。（ロバート・R.マキャモン著;加藤洋子訳『スワン・ソング』、1994、 933）

（20）作者は自分の心、あるいは自分の頭から出る創作意図に形式を賦与し、現実の世界に送り出す。（G.ネラン著 『おバカさんの自叙伝半分』、1988、198）

（21）しかし俺は考える事で頭がいっぱいで、キャムには一応かぶりを振って見せる事しかできなかった。（ユール著 『Whydunit』、2002、913）

（22）ゴリラは戦争好きで頭が空っぽだとばかにされるが、武力で他の２種を威圧しようとする。（長谷川功一著 『アメリカ SF 映画の系譜』、2005、778）

まず、メタファーの認定手順の Step1 に従い、文全体の意味を理解する。次に、Step1.2 辞書の見出し語を参考して、語の区切りを決める。Step1.3『大辞林』（第 3 版）によると、「入れる」の字義通りの意味（M）は「物を容器の中に移す」である。Step1.4 文脈上の意味（M’）は「概念を頭の中に移す」である。Step1.5 文脈上の意味（M’）と字義通りの意味（M）に乖離がある。Step1.6（a）文脈上の意味（M’）は字義通りの意味（M）と比較によって理解できることで、メタファーと認定する。同様に「追い出す」「出る」「いっぱい」「空っぽ」もメタファーとして認定できる。

続いて、Step2 に従い、Step2.1 文脈上の意味（M’）と字義通りの意味（M）に乖離がある語（入れる、追い出す、出る、いっぱい、空っぽ）を媒介語としてピックアップする。Step 2.2 媒介語の字義通りの意味は、内容物と容器との関係というカテゴリーにまとめられるので、＜容器＞を起点領域とする。Step 2.3 媒介語の文脈上の意味は「概念」、「考え」、「考える事」といった内容物と頭の関係というカテゴリーにまとめられるので、＜頭＞を目標領域とする。

Step2.4 同じ目標領域＜頭＞と起点領域＜容器＞を共有するメタファーが複数ある。Step2.5 目標領域＜頭＞と起点領域＜容器＞の間の要素（入れる、追い出す、出る、いっぱい、空っぽ）の写像関係が成立している。つまり、日本語母語話者は「容器」という具体物の概念を用いて、「頭」が思考を司ると理解していることがわかる。Step2 に基づき、＜頭は容器、考えは内容物＞を概念メタファーとして認定する。

5.2.2.2　＜脳は容器、考えは内容物＞（中）

まず、以下の CNC にある中国語の例を見よう。

（23a）中国語：满　脑子　充塞着　血淋淋　罪恶的　念头[1]

逐語訳：いっぱい　脳　充満　血まみれ　罪悪　考え

意訳：頭が罪悪な考えでいっぱい

（23b）中国語：满　*头　充塞着　血淋淋　罪恶的　念头

逐語訳：いっぱい　頭　充満　血まみれ　罪悪　考え

（24a）中国語：一个　想法　闯入　我的　脑　海[2]

逐語訳：一つ　考え　入り込む　私の　脳　海

意訳：一つの考えが私の頭に入り込んだ

（24b）中国語：一个　想法　闯入　我的　*头　海

逐語訳：一つ　考え　入り込む　私の　頭　海

（25a）中国語：他的　头脑　里　便　跳出　一个　念头[3]

逐語訳：彼の　頭　脳　中　そして　飛び出す　一つ　考え

意訳：彼の頭に一つの考えが浮かび上がった。

（25b）中国語：他的　*头里　便　跳出　一个　念头

逐語訳：彼の　頭　中　そして　飛び出す　一つ　考え

前述のように、中国語では、「脳」が考えを知覚する器官で、例（23b）～（25b）では、“脑”“头脑”“脑海”いずれも“头”（頭）に置き換えられない。メタファーの認定手順の Step1、Step2 に従って概念メタファーを認定する。（23a）では、脳は容器で、考えがその中の内容物である。（24a）では、脳は容器で、考えがその中に入る移動物である。（25a）では、脳は容器で、考えがその中から出る移動物である。（23a）～

---

[1] 『心归何处』1988

[2] 『墓地采访手记』1990

[3] 『美食家』1984

（25a）は思考の知覚は脳の状態（虚・実、考えの出・入）である。図 5-1 のような写像の関係が成立する。

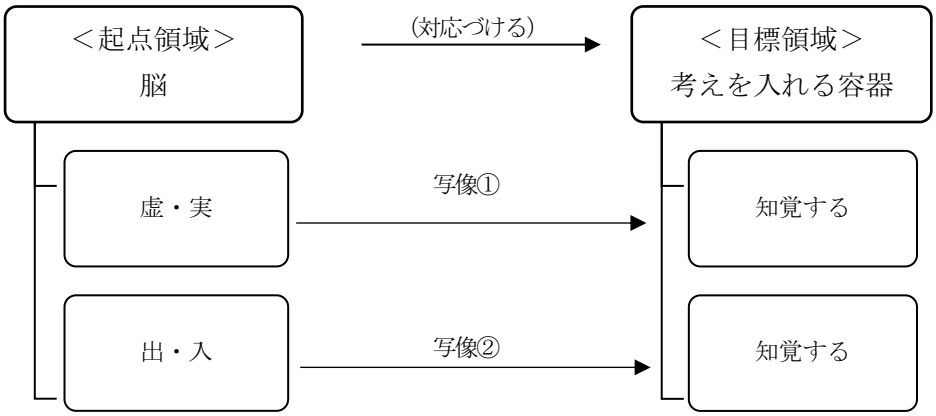

図 5-1　＜脳は容器、考えは内容物＞（中）の写像

つまり、中国語では、「脳」を容器として捉えて、考えはその内容物である。そして、考えが容器を出入りすることで知覚される。日本語では、＜頭は容器、考えは内容物＞であるのに対して、中国語では、＜脳は容器、考えは内容物＞である。日本語と中国語において、目標領域にズレが生じる。

5.2.2.2　＜頭は幕、考えは映像＞（日）VS＜脳は幕、考えは映像＞（中）

まず、以下の CNC にある中国語の例を見る。

（26a）中国語：脑子　里　闪　过　一个　念头[4]
　　逐語訳：脳　中　閃く　よぎる　一つ　考え
　　意訳：考えが頭をよぎる
（26b）中国語：*头　里　闪　过　一个　念头
　　逐語訳：頭　中　閃く　よぎる　一つ　考え

[4] 『有情人难成眷属』1987

(27a) 中国語：这个　念头　一出现、仿佛　在　我　脑　幕　上[5]

逐語訳：この　考え　出現、　よう　に　私　脳　スクリーン　上、–

–闪了　一道　电光、对啊！

逐語訳：–閃く　一筋　光、　そうだ!

意訳：この考えは一筋の光のように私の頭をよぎった、そうだ。

(27b) 中国語：这个　念头　一出现、仿佛　在　我　*头　幕　上、–

逐語訳：この　考え　出現、　よう　に　私　頭　スクリーン　上、–

–闪了　一道　电光、对啊！

逐語訳：–閃く　一筋　光、　そうだ!

(28a) 中国語：忽然间　一个　念头　浮上　他的　脑　际[6]

逐語訳：突然　一つ　考え　浮かぶ　彼の　脳　界

意訳：突然考えが彼の頭に浮かんだ

(28b) 中国語：忽然间　一个　念头　浮上　他的　*头　际

逐語訳：突然　一つ　考え　浮かぶ　彼　脳　界

(26a) ～ (28a) も“脑”を“头”に置き換えられない。(26a) ～ (28a) では、Yu (2009) で述べたように、我々は脳を容器として捉えて、考えが容器を出入りすることによって知覚される。図 5-2 のように、【起点–経路–終点】スキーマ、【容器】スキーマによって支えられている。(26a) ～ (28a) は考えが容器を出入りすることが言えず、脳は目で観察できる幕だと喩えられている。

(26a) では、考えが脳をよぎることで、(27a) では、直接“脑幕”という合成語を使って、考えが光のように脳のスクリーンを過ぎ去ったと述べられている。(28a) では、“浮上（浮かび上がる）”という表現で、考えが幕のうしろに見えない状態から、幕の前に現れ、見える状態に変化していることを表している。日本語も同じような写像が観察されるが、目標領域が「頭」である。つまり、中国語では<脳は幕>であるのに対して、日本語では<頭は幕>である。図 5-2 のような写像の関係が成立する。

---

[5] 『深谷英魂』1987

[6] 『过渡』1947

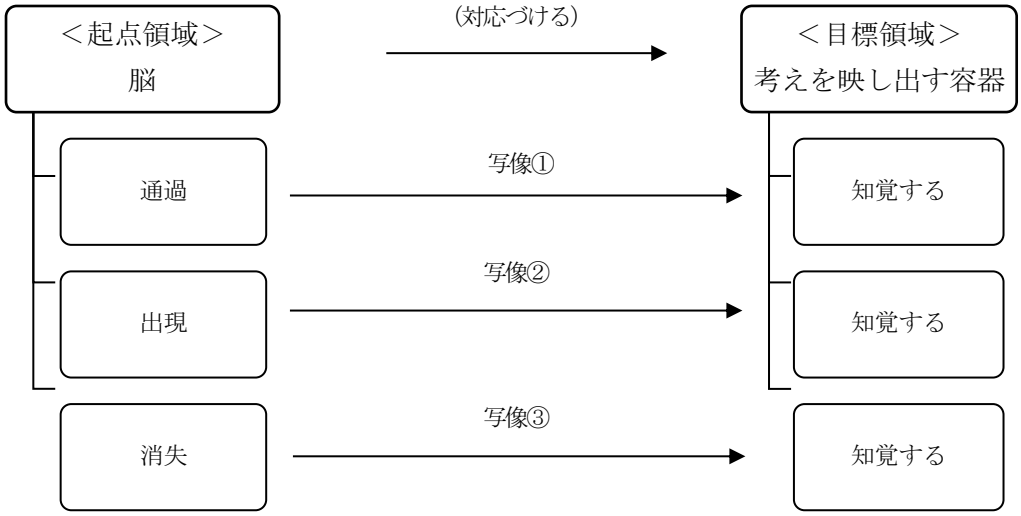

図 5-2　＜脳は幕、考えは映像＞（中）の写像

以上、表 5-2 で示したように、考えを知覚することを言語化する場合、中国語でも日本語でも身体部位が写像されるが、中国語では、＜脳は考えを知覚する器官＞であるのに対して、日本語では、＜頭は考えを知覚する器官＞である。つまり、目標領域にズレが生じるのである。

この結果により、思考に関する内容を表す時、日中の概念メタファーのズレは学習者のコロケーションの語の選択に影響を与え、概念誤用が生じさせるということがわかる。

表 5-2　＜思考＞メタファーの日中の異同 – その（1）

	中国語	日本語
上位メタファー	脳は考え知覚する器官	頭は考えを知覚する器官
サブメタファー	＜脳は容器、考えは内容物＞	＜頭は容器、考えは内容物＞
	＜脳は幕、考えは映像＞	＜頭は幕、考えは映像＞

5.2.2.3　＜頭は機械＞（日）VS＜脳は機械＞（中）

次に、以下の CCL にある中国語の例を見よう。

(29) 中国語：在观察　的　过程　中　要　开动　脑筋[7]

逐語訳：観察している　の　過程　中　要る　動かす　脳筋

意訳：観察している時も、頭を動かす必要がある

(30) 中国語：他只要　一转动　脑筋、总　可以　想出　法子[8]

逐語訳：彼　さえ　動かす　脳筋、いつも　できる　思いつく　考え

意訳：頭さえ動かせば、いつも良いアイディアが思いつく

(31) 中国語：年轻　时期　的　学习　是　加速　头脑　运转[9]

逐語訳：若い　時期　の　学習　は　加速する　脳　回転

意訳：若頃の学習は頭の回転を加速する。

(32) 中国語：用　计算机　用的　脑子　生锈[10]

逐語訳：使う　コンピューター　使うせいで　脳　錆び付く

意訳：コンピューター使いせいで、頭が錆び付く

(33) 中国語：也可能　只是　大脑　短路　想　不明白　一个　简单的　事情[11]

逐語訳：かもしれない　ただ　脳　ショートする　考え　わからない　一つ　簡単　こと

意訳：ただ頭がショートしたかもしれない、簡単なことさえ考えが整理できない。

(34) 中国語：因　一时　冲突　，头脑　发　热　而　跳槽[12]

逐語訳：から　一時　けんか、脳　発する　熱　それで　転職する

---

[7] 『中国儿童百科全书』

[8] 『上海的早晨』

[9] 『读者（合订本）』

[10] \当代\网络语料\网页\C000020.txt

[11] \当代\CWAC\CAB0120.txt

[12] \当代\网络语料\网页\C000013.tx

意訳：けんかしたことで、頭が熱くてなって、転職した

（35）中国語：适当　小睡　给　大脑　充电[13]
逐語訳：適当　居眠り　てあげる　脳　充電する
意訳：適当に居眠りをとって、頭を充電する

（36）中国語：不要　再　费　脑筋　胡思乱想　了[14]
逐語訳：ないで　さらに　かかる　脳筋　思い乱れる
意訳：もう頭を使ってあれこれ考えることをやめて。

（29）～（36）も“脑”を“头”に置き換えられない。CCL では、“开动脑筋”（脳を動かす）は 315 例、“转动脑筋”（脳を回す）は 8 例、“头脑运转”（脳の回転）は１例、“脑子生锈”（脳が錆び付く）は 1 例、“大脑短路”（脳がショートする）は 1 例、“头脑发热”（脳が熱い）は 176 例、“大脑充电”（脳を充電する）は 1 例、“费脑筋”（脳がかかる）は 68 例、“费脑子”（脳がかかる）は 16 例である。

（29）～（31）では、“开动”（動かす）は機械に電源を入れることを意味している。“转动”（回す）、“运转”（回転する）は機械を動かし、正常に運転していることを意味している。（32）～（34）では、“生锈”（錆び付く）、“短路”（ショートする）、“发热”（熱暴走）は機械が不良の原因で、正常に動くことができないことを意味している。（35）～（36）では、“充电”（充電する）、“费”（かかる）は機械にエネルギーをチャージしたり、エネルギーを消耗したりすることを意味している。例（29）～（36）では、「脳」を「機械」として捉えて、脳が正常に動くことはスムーズに思考できること（写像①）を、脳が故障することは思考が滞ること（写像②）を、脳にエネルギーをチャージ・消耗することは思考のために準備を行ったり、思考が順調に進むこと（写像③）を写像している。つまり、中国語では、＜考えは機械の動き＞という概念メタファーがあり、そのサブメタファーは＜脳は機械＞である。その写像関係を図 5-3 に示す。

---

[13] \当代\网络语料\网页\C000022.txt

[14] 『绿房子』

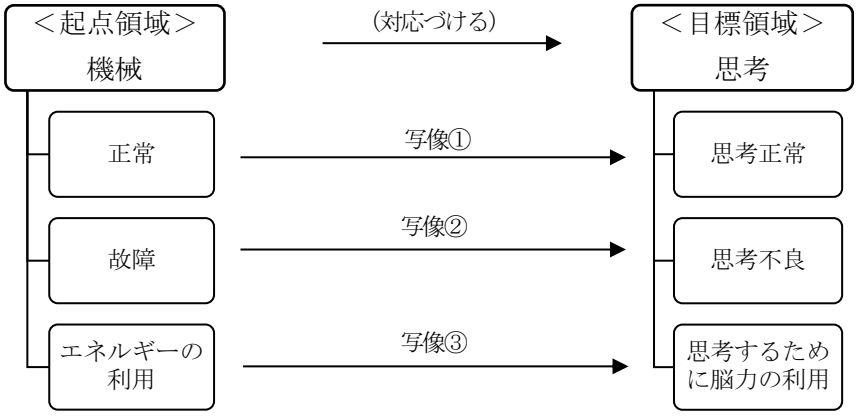

図 5-3　＜脳は機械＞（中）の写像

一方、日本語では、TWC で調べると、「頭の回転」は 908 例、「頭が回転する」は 46 例、「頭をフル稼働する」は 4 例、「頭が錆び付く」は 1 例、「頭が故障する」は 2 例、「頭がショートする」は 6 例しかない。「頭を充電する」「頭がかかる」といった用例が見つからない。さらに、「頭」ではなく、中国語と同じ「脳」を調べると、以下の用例が見つかった。「脳の回転」は 28 例、「脳が回転する」は 8 例、「脳をフル稼働する」は 2 例、「脳が錆び付く」は 3 例、「脳がショートする」は 2 例しかない。つまり、日本語では、思考の状態を表すとき、「脳」より「頭」の使用が好まれる。そのため、中国語と違って、＜考えは機械の動き＞という概念メタファーのサブメタファーは＜頭は機械＞となる。ただし、「頭を充電する」「頭がかかる」の用例が見つからないことで、頭にエネルギーをチャージ・消耗するように思考のために準備を行うという写像がないとわかる。これらにより、中国語は日本語より写像が広いことがわかった。図 5-4 は日本語の写像である。

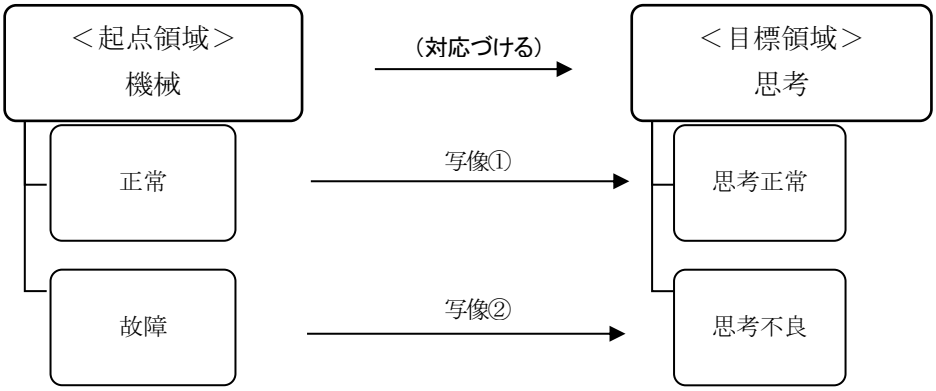

図 5-4　＜頭は機械＞（日）の写像

表 5-3　＜思考＞メタファーの日中の異同 – その（2）

	中国語	日本語
上位メタファー	考えは機械の動き	考えは機械の動き
サブメタファー	＜脳は機械＞	＜頭は機械＞

5.3　本章のまとめ

本章では、学習者コーパスから「頭」「脳」「思考」に関する母語の「直訳」と「非直訳」の誤用を抽出した。次に、日本語と中国語のコーパスに基づき、＜思考＞メタファーにおける日中の異同を明らかにした。まず、＜思考＞メタファーに関して、中国語では、＜脳は考えを知覚する器官＞という上位メタファーの下に、＜脳は容器、考えは内容物＞、＜脳は幕、考えは映像＞の二つのサブメタファーがある。一方、日本語では、＜頭は考えを知覚する器官＞という上位メタファーの下に、＜頭は容器、考えは内容物＞、＜頭は幕、考えは映像＞の二つのサブメタファーがある。日中において目標領域が異なるのである。次に、日本語でも中国語でも＜考えは機械の動き＞という上位概念メタファーがあるが、そのサブメタファーとして、日本語では＜頭は機械＞があるのに対して、中国語では＜脳は機械＞があることを明らかにし、目標領域及び写像において日中両言語にズレがあることを示した。

第 6 章　＜興味＞メタファーに関する日中の異同

6.1　研究目的

李（2016）では、「名詞＋を＋動詞」のコロケーションについて、中国人日本語学習者を対象に、学習者作文コーパスに基づいて、学習者の日本語能力とコロケーションの使用状況、及びコロケーションの誤用傾向が調査されている。その結果、共起タイプの誤用は、92 例のうち、78 例が学習者の母語と対応するものであり、48 例が母語の直訳によるものであることが明らかになった。これらの項目は母語の負の転移によるものである可能性が高いと述べられている。一方、非直訳と判断された 31 項目に関して、母語の影響を受けている可能性を否定できないと述べられている。以下は直訳と非直訳の例である。

（1）直訳-「興味を培養する」（李 2016：190）
（2）非直訳-「興味を抜く」

（1）（2）のように、「興味」に関するコロケーションの共起の誤用の原因について、片方（例１）は母語の直訳だと判断されているが、片方（例 2）の誤用の原因は不明である。本章では、李（2016）で残された問題を解決するために、「興味」を対象に、学習者のコロケーションの誤用と日中概念メタファーの関係を論じる。

まず、学習者のコロケーションの誤用を提示し、次に、日本語と中国語のコーパスから概念メタファーを抽出し、日中の違いを比べる。具体的に以下の２つの課題を設定する。

RQ1：「興味」に関する「直訳」と「非直訳」の誤用は何か。
RQ2：「興味」に関する日中の概念メタファーの異同は何か。

日本語の用例は NLB を利用して抽出する。さらに、NLT という検索ツールを利用し、コロケーションの頻度を調べる。次に、中国語の用例は CCL 及び BDXS を利用し、用例及びコロケーションの頻度を調べる。最後に、学習者のコロケーションの用例を JC コーパスから抽出し、Lang-8 学習者コーパスから誤用のコロケーションの頻度を調べる。

6.2　結果と分析

6.2.1　RQ1：＜興味＞メタファーに関する「直訳」と「非直訳」の誤用

中国語では、“兴趣”に当たる日本語の語彙は「興味」と「趣味」である。例（3）のように、物事に心がひかれ、おもしろいと感じる時、それは日本語における「興味」である。例（4）のように、専門としてではなく、楽しみにすることを表す時、それは日本語における「趣味」にあたる。そのため、学習者は「興味」と「趣味」の両方に誤用が起こしうる。本章では、学習者作文コーパス、Lang-8 学習者コーパスから「興味」「趣味」に関するコロケーションを調べた結果、以下の誤用例が見つかった。

（3）他对日本历史很感兴趣。（彼は日本の歴史に興味を持っている）
（4）他的兴趣是打网球。（彼の趣味はテニスをすることです）

表 6-1　＜興味＞メタファーに関する学習者の誤用

	誤用例	中国語直訳
5	私たちは外国語のドラマや映画や音楽などで興味を培養する。	培养兴趣
6	ドラマを見る時に日本語への興味を培養する。	培养兴趣
7	初心者が外語習得の興味を培養することに対して最も重要です。	培养兴趣
8	親たちは子供たちの趣味を培養する。	培养兴趣
9	自分でいろいろな興味を養っているとか、そして、たびに友達と一緒にカラオケを歌いに行きます。	*养兴趣
10	外国語の興味を養ったら、ドラマとか、小説とか、この言語についてのいろいろな資料を探してみていくので、教科書以外の知識を獲得できる。	*养兴趣
11	いつからこの趣味を培うことが分かりません。	培养兴趣
12	外国語の勉強は興味を抜いてはうまくならないのは、勉強し続ける動力がないからだ。	*拔除兴趣

（5）～（12）は、「興味」に関する「直訳」と「非直訳」の誤用である。「培养兴趣」のように、母語の「直訳」の誤用は「*興味を培養する」「*趣味を培養する」両方に

現れている。中国語の“培养”は適宜な環境を提供し、植物を育てることを意味している。さらに、人を育てることを意味拡張している。（5）～（8）のように、「興味」また、（9）～（11）の「養う」「培う」のように、学習者が難しい語彙を使って、その意味を表そうとしている。(12)の「*興味を抜く」に関して、中国語の“拔”は植物を地面から抜き出すことを意味している。例：“拔草（草を抜く）”“拔萝卜（大根をぬく）”。学習者が「興味」を「植物」のように捉えていることが伺える。

6.2.2　RQ2：＜興味＞メタファーに関する日中の異同

6.3.2 では、日中両言語のコーパス（NLB、NLT、CCL、BDXS）から「興味」に関するコロケーションを抽出し、4 章の概念メタファーの認定手順に基づき、日中両言語の概念メタファーを比較する。

6.2.2.1　「興味」に関する日本語の概念メタファー

まず、以下の日本語の例を見る。（下線は筆者による。以下同様）

（13）刺激も新鮮で、興味がわくものをみつけるのも容易でしょう。（多湖輝 『六十歳からの生き方』 1990、p.159）

（14）次代を担う子ども達に、宇宙や科学への興味が湧き上がっていれば、はやぶさの遺伝子はこれからも連綿と伝えられていくことでしょう。（応援メッセージ｜はやぶさ、地球へ！帰還カウントダウン）

（15）子どもを違う種類の遊びに誘うことであなたは、子どもが興味を注ぎ、技術を発達させることができるような新しい分野に導くことができるかもしれません。（ウイリアム・シアーズ、マーサ・シアーズ 岩井満理訳『シアーズ博士夫妻のチャイルドブック』 2003、 p.599）

（16）小市民的な興味をひと通り満たしてしまうと、いきなり手持ち無沙汰になった。（西澤保彦 『フェティッシュ』 2005、p.913）

まず、メタファーの認定手順の Step1 に従い、文全体の意味を理解する。次に、Step1.2 辞書の見出し語を参考して、語の区切りを決める Step1.3『大辞林』（第 3 版）によると、「湧く」の字義通りの意味（M）は「水などが地中から出てくる」である。

Step1.4 文脈上の意味（M’）は「興味が現れる」である。Step1.5 文脈上の意味（M’）と字義通りの意味（M）に乖離がある。Step1.6（a）文脈上の意味（M’）は字義通りの意味（M）と比較によって理解できることで、メタファーと認定する。同様に「湧き上がる」「注ぐ」「満たす」もメタファーである。

続いて、Step2 に従い、Step2.1 文脈上の意味（M’）と字義通りの意味（M）に乖離がある語（湧く、湧き上がる、注ぐ、満たす）を媒介語としてピックアップする。Step 2.2 媒介語の字義通りの意味は、液体が流れる様態というカテゴリーにまとめられるため、＜液体＞を起点領域とする。Step 2.3 媒介語の文脈上の意味は興味が現れるカテゴリーにまとめられるため、＜興味＞を目標領域とする。

Step2.4 同じ目標領域＜興味＞と起点領域＜液体＞を共有するメタファーが複数見受けられる。Step2.5 目標領域＜興味＞と起点領域＜液体＞の間の要素（湧く、湧き上がる、注ぐ、満ちる）の写像関係が成立している。具体的にいうと、まず、「湧く」の例では、水などが地中から出てくることを「湧く」といい、興味がない状態からある状態に変化し、興味が現れることは、液体が湧くように理解される。「湧く」は媒介語で、起点領域と目標領域の写像が成立する。

次に、「湧き上がる」の例では、液体が下の方からわいて、現れることを「湧き上がる」という。子供の興味がない状態からある状態への変化は、容器の底から液体が現れるように理解される。「湧き上がる」は媒介語で、起点領域と目標領域の写像が成立する。

さらに、「注ぐ」の例では、液体を容器などに流し込むことを「注ぐ」という。子供に興味を持たせることは、容器に液体を入れるように理解される。「注ぐ」は媒介語で、起点領域と目標領域の写像が成立する。

最後に、「満たす」の例では、いっぱいにする、容器などに入れて満ちるようにすることを「満たす」といい、容器に液体をいっぱい注ぐように理解される。「満たす」は媒介語で、起点領域と目標領域の写像が成立している。「湧く」「湧き上がる」「注ぐ」「満ちる」も同じ目標領域と起点領域を共有し、写像関係が成立する。要するに、日本語母語話者は「液体」に関する具体物の概念を用いて、「興味」という抽象物の概念を理解している。Step2 に基づき、＜興味は液体＞を概念メタファーとして認定する。「興味が湧く」「興味が湧き上がる」「情報を注ぐ」「情報を満たす」は＜興味は液体＞という概念メタファーに基づくメタファー表現である。

（13）～（16）で、「興味」と結びついている動詞は「わく、湧き上がる、注ぐ、満たす」である。また、上向きの力が液体の動きという意味を支えていることが、「湧く」、「湧き上がる」の意味から読み取れる。さらに、容器に備わる境界性、内容物と容器の関係が「注ぐ、満たす」の意味の成立に関わっている。つまり【力】【容器】スキーマがこれらの意味の成立を支えている。

（13）～（16）からわかるように、日本語では興味は水のように捉えられ、＜興味は液体＞という概念メタファーが存在する。＜液体＞は起点領域で、＜興味＞は目標領域である。Lakoff（1993）では、目標領域で矛盾がない限り、起点領域から目標領域へイメージ・スキーマが写像されると述べられ、【力】【容器】スキーマは＜興味は液体＞を支えるイメージ・スキーマである。それを実証するものとして、以下の用例が見られる。

（17）ディキシーはあの少年に<u>強い興味</u>を感じていた。（茅田砂胡 『天使たちの華劇』2004　p.913）

（18）フレッチャーもしだいに元禄人形への<u>興味がつのって</u>きて、早く自分の家のお宝探しを始めたいようだった。（村田喜代子 『人が見たら蛙に化れ』 2004 p.913）

（19）自分とは違うものへの<u>興味が高まり</u>、お互い相手の奥へ奥へと入ってゆける。（有吉玉青 『がんばらなくても大丈夫』 2004　p.914）

（20）こうしてアイヌ民族・文化に<u>深い興味</u>を抱いたハインリッヒは、その　北海道旅行中に、アイヌの民具資料を積極的に収集した。（H.V.シーボル　ト、原田信男ほか訳注『小シーボルト蝦夷見聞記』1996　p.389）

（17）では、興味を「強さ」で捉えている。（18）では、「募る」の基本義は「次第に勢いが激しくなる。いっそうひどくなる」（『大辞林』）で、興味は勢いがあるものとして捉えられている。（19）では、興味の量が増えることを表す。「興味が高まる」というのは、体という容器の中に興味が液体のようにだんだん増えることと理解できる。また（20）では、興味自体が空間性を持っているわけではなく、【容器】スキーマが意味理解を助けるため、「深い興味」と言える。

Johnson（1987）、Croft（1999）、山梨（2000）では、【容器】スキーマのうち、Containment（内容物）、In-Out（出入）、 Surface（表裏）、 Full-Empty（実虚）

などの要素が含まれている。「*興味を（身体部位）に入れる」「*興味が（身体部位）から出る」「*興味がいっぱいある」のような表現が不自然であることにより、日本語では、＜興味は液体＞の概念メタファーの関連において、【容器】スキーマが背景化していると言える。

一方、「強い興味」と「深い興味」はどちらも興味の程度が大きいことが表せるが、「強い興味」「興味が湧く」「興味が湧き上がる」「興味が募る」は【力】スキーマに基づくものである。一方、「深い興味」は興味が深ければ深いほど程度が強いと理解でき、【容器】スキーマに基づいている。それは、体を容器として考える場合、思考、感情の発生元は容器の底にあると考えられるからである。容器の底に近いほど興味、感情が強い。そのため、「深い興味」や「興味が深い」も興味の程度の大きさが表せる。NLT で「形容詞＋興味」を調べると、全 739 例のうち、「強い興味」が 450 例、「興味が強い」が 124 例であるのに対し、「深い興味」は 116 例、「興味が深い」は 29 例である。つまり、興味の強さを表す時、日本語では、【力】スキーマは【容器】スキーマより優位である。

6.2.2.2 「興味」に関する中国語の概念メタファー

まず、以下の中国語の例を見る。

(21) 近几年来、天津各高校普遍开设了体育专项课、目的在于培养兴趣和发展个性。（近年来、天津の各高等教育機関は学生の興味を引き出し（直訳：培養する）、個性を伸ばすために、体育特別カリキュラムを設置している）（/当代报刊/人民日报/1995）

(22) 给孩子心灵深处播下兴趣的种子、引导孩子迈向科学的第一步。（子供に興味を湧かせ（直訳：心に興味の種を撒く）、科学への第一歩を導くようにする）（《新课程学习：基础教育》 2013）

(23) 让兴趣在中职生英语学习中生根发芽。（中职生が英語を学習し、その学習の中で興味を湧かせるようにする（直訳：興味を…根を下ろし、芽吹かせる））（《文教资料》 2013）

(24) 所以在英语教学中、教师一定要注意培养学生的兴趣、让兴趣之花绽放课堂。（つ

まり、英語教育においては、教師は学生の興味を高める（直訳：学生の興味を培養し、興味の花を授業に咲かせる）ことに力を入れるべきである）（《中学课程辅导：教学研究》 2011）

（25）兴趣是……、总有为数不少的学生学习兴趣会因种种不同的原因而日趋枯萎、甚至出现厌学情绪。（たくさんの学生は勉強に対する興味が色々な原因で薄れ（直訳：興味が萎える）、勉強が嫌になることも出てきた）（《管理学刊》 2008）

『現代漢語規範詞典』によると、“培养”は「提供适宜的条件使繁殖、生长。」（最適な環境を整え、繁殖させ、育成する）ことを指す。（21）では、興味を植物に喩え、人の手によって学生の興味や個性を育てることを表す。（22）では、興味を植物に喩え、子供に興味を芽生えさせるために、まず種を蒔く。（23）では、興味が湧く状態を植物が根をおろし、芽吹かせることに喩えている。（24）では、さらに興味を育て、花を咲かせると述べている。（25）では、興味が失われる状態を植物が萎えることに喩えている。

同じように、メタファーの認定手順の Step1 に従い、文全体の意味を理解する。次に、Step1.2 辞書の見出し語を参考に、語の区切りを決める。Step1.3『現代漢語規範詞典』によると、“培养”の字義通りの意味（M）は「提供适宜的条件使繁殖、生长」（最適な環境を整え、繁殖させ、育成する）」である。Step1.4 文脈上の意味（M’）は「人の手によって学生の興味や個性を育てる」である。Step1.5 文脈上の意味（M’）と字義通りの意味（M）に乖離がある。Step1.6（a）文脈上の意味（M’）は字義通りの意味（M）と比較によって理解できることで、メタファーと認定する。同様に“兴趣的种子”“兴趣生根发芽”“兴趣之花绽放”“兴趣枯萎”もメタファーとして認定できる。

続いて、Step2 に従い、Step2.1 文脈上の意味（M’）と字義通りの意味（M）に乖離がある語（培养、种子、生根发芽、花、枯萎）を媒介語としてピックアップする。Step2.2 媒介語の字義通りの意味は、植物の成長というカテゴリーにまとめられるため、＜植物＞を起点領域とする。Step 2.3 媒介語の文脈上の意味は興味が育てられるカテゴリーにまとめられるため、＜興味＞を目標領域とする。

Step2.4 同じ目標領域＜興味＞と起点領域＜植物＞を共有するメタファーが複数見受けられる。Step2.5 目標領域＜興味＞と起点領域＜植物＞の間の要素（培养、种子、生根发芽、花、枯萎）の写像関係が成立している。具体的には、まず、“培养”の例では、植物

の成長に最適な環境を整え、植物を繁殖し、育成することを“培养”といい、子供の興味を大きく育てるように理解される。“培养”は媒介語で、起点領域と目標領域の写像が成立している。

次に、“种子”の例では、畑に植物の種を撒くことを“播种子”という。子供の興味を芽生えさせるために、もとを作るように理解される。“种子”は媒介語で、起点領域と目標領域の写像が成立する。

さらに、“生根发芽”の例では、植物が根を下ろし、芽生えることを“生根发芽”という。子供の興味がだんだん成長するように理解される。“生根发芽”は媒介語で、起点領域と目標領域の写像が成立する。

次に、“花”の例では、花は植物の繁殖器官で、花が咲くことを“花绽放”という。子供の興味が教室という環境で育ち、最も華やかな時期を迎えるように理解される。“花绽放”は媒介語で、起点領域と目標領域の写像が成立する。

最後に、“枯萎”の例では、植物の生気がなくなることを“枯萎”といい。子供の興味がだんだんなくなるように理解される。“枯萎”は媒介語で、起点領域と目標領域の写像が成立する。“花”、“种子”、“芽”“根”は植物の各成長段階に様態の特徴を表しているが、“播（种）”、“生（根）”、“发（芽）”、“花（绽放）”、“培养”、“枯萎”は植物の各成長段階の変化を表している。つまり、（18）～（22）では、興味を植物に喩え、興味がない状態からある状態に変化すること、また徐々に強まることを、植物が成長する各段階に対応させて表している。興味も種の状態から根をおろし、芽が出て成長し、やがて花を咲かせるように喩えられている。中国語では、＜植物＞は起点領域であり、＜興味＞は目標領域である。“培养兴趣”“兴趣的种子”“兴趣生根发芽”“兴趣之花绽放”“兴趣枯萎”は＜興味は植物＞という概念メタファーに基づくメタファー表現である。

なぜ中国語に、＜興味は植物＞に基づく表現が多いかというと、中国では学校文脈においてよく教師を園芸師に喩え、学生を蕾、植物に喩えるからである。人の成長が植物の成長を通して理解されている。つまり、＜人間は植物＞という概念メタファーがあるからである。以下の例を見よう。

（26）儿童是祖国的花朵、是祖国的未来、对儿童的成长全社会都负有责任。其中也包括

我们音乐工作者。（子供は国家の蕾で、国家の未来でもある。子供の成長を見守るのは社会全体に責任があり、もちろん、音楽に関する仕事をしている我々も含まれる）（『人民音乐』2004）

（27）教师要用自己无私的爱感化、关爱每个学生、让学生在爱的雨露中茁壮成长。（教師は自分の無限の愛で学生を愛すべき。学生に愛を与える（直訳：雨露）健やかに成長させる）（『考试周刊』2013）

（26）では、子供を国家の蕾に喩え、子供の成長段階を植物の成長段階である「種→芽→蕾→花→実」に対応させ、その将来性について述べている。（27）の“茁壮”は植物が大きく成長することを表す。ここでは、学生を植物に喩え、その成長を助ける「教師」を、植物の成長に関わる要素である“雨露”に対応させている。つまり、教師と学生の関係は雨露と植物の関係と対応している。（26）、（27）は＜人間は植物＞に基づくメタファー表現である。興味は人に備わる素質であり、興味の出現や強まりなども植物の成長に喩えられる。

鍋島（2011）では、「メタファーA とメタファーB がカテゴリー関係にある場合、両者は『継承関係』にあるという。また、下位メタファーが上位メタファーの写像を引き継ぐことを『継承を受ける』という」と述べている。＜人間は植物＞と＜興味は植物＞の 2 つの概念メタファーは以下の図 6-1 のようにまとめられる。

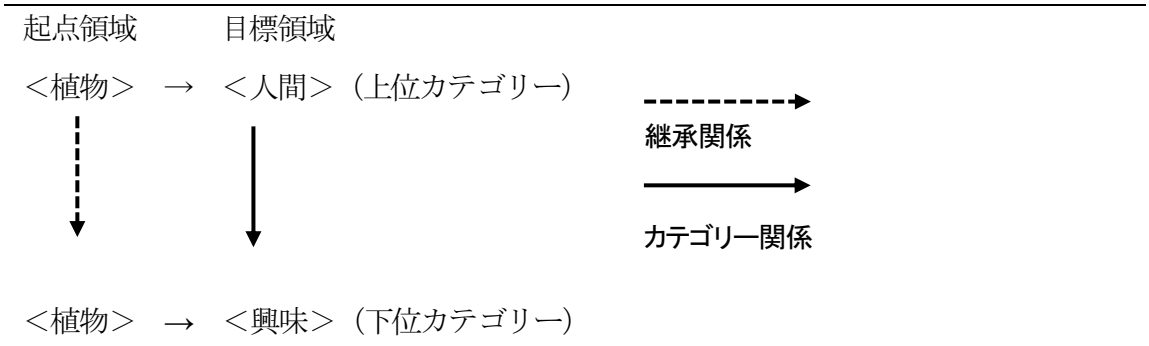

図 6-1 ＜人間は植物＞と＜興味は植物＞との関係[1]

[1] 韓（2014）のメタファー継承関係の図の構造を参考にしている。

図 6-1 では、＜人間は植物＞は上位メタファーで、＜興味は植物＞は下位メタファーである。下位メタファーは上位メタファーの写像を引き継いでいるため、（21）～（25）のように“培养兴趣”“兴趣的种子”“兴趣生根发芽”“兴趣之花绽放”“兴趣枯萎」のような表現が現れる。

もちろん、日本語にも＜興味は植物＞に基づくメタファー表現がある。例えば、「興味が芽生える」が挙げられる。しかし、中国語のような多様さは見られず、前述のように＜興味は水＞の方がよく使われている。

6.3　本章のまとめ

本章では、学習者コーパスから「興味」「趣味」に関する母語の「直訳」と「非直訳」の誤用を抽出した。次に、日本語と中国語のコーパスに基づき、＜興味＞メタファーにおける日中の異同を明らかにした。まず、＜興味＞メタファーに関して、中国語では、＜人間は植物＞という上位メタファーの下に、＜興味は植物＞のサブメタファーがある。一方、日本語では＜興味は液体＞という概念メタファーが発見され、それを支えるイメージ・スキーマとして【力】スキーマ、【容器】スキーマがあることがわかった。起点領域において、日中両言語にズレがあることを示した。

第７章　終章

本研究は、中国語を母語とする日本語学習者のコロケーションの誤用に基づき、イメージ・スキーマ及び概念メタファーにおける日中の違いを明らかにした。まず、学習者コーパスに現れる「重い」「深い」を含むコロケーションの「直訳」と「非直訳」の誤用例に基づき、日中の【力】スキーマと【容器】スキーマの異同を明らかにした。次に、概念メタファーの認定手順を明らかにし、認定手順の適用範囲およびメタファーの種類と語義の関係について述べた。さらに、日本語コーパス、中国語コーパスを用いて、＜思考＞メタファー、＜興味＞メタファーの異同を明らかにした。これらの調査により得られた結果から学習者の誤用原因は言語転移（直訳）だけでなく、概念転移（非直訳）によるものもあると示唆された。この章は終章として、研究課題ごとに本研究の結果を要約し、第二言語習得研究への示唆、本研究の意義及び今後の課題などについて述べる。

7.1　本研究のまとめ

第１章では、本研究の研究背景を述べ、本研究の主要概念および理論的枠組みを明記した。第２章では、本研究で扱う主要概念であるイメージ・スキーマおよび概念メタファーの先行研究を概観したうえで、【力】スキーマおよび【容器】スキーマの不足を指摘した。また、概念メタファーの認定手順が不明なことおよび＜思考＞メタファーの問題点を指摘した。以上を踏まえて、本研究は以下の３つの課題を取り上げて研究を行った。

課題１：イメージ・スキーマにおいて、日中でどのような違いがあるのか。

　　1.1　【力】スキーマにおいて、日中でどのような違いがあるのか。

　　1.2　【容器】スキーマにおいて、日中でどのような違いがあるのか。

課題２：どのように概念メタファーを認定するのか。

課題３：概念メタファーにおいて、日中でどのような違いがあるのか。

　　3.1　＜思考＞メタファーにおいて、日中でどのような違いがあるのか。

　　3.2　＜興味＞メタファーにおいて、日中でどのような違いがあるのか。

以下では、本研究の３つの課題に対する研究結果と考察をまとめる。

7.1.1　課題１：イメージ・スキーマにおける日中の異同（第３章）

第３章では、3.1 節と 3.2 節に分かれて、【力】スキーマと【容器】スキーマの日本語と中国語の異同をめぐって、分析と考察を試みた。3.1 節では、まず、Lang-8 学習者コーパスから「重い」に関する誤用例を抽出し、身体動作・五感及び思考、感情、抽象概念に分けて、誤用を分析した。次に、身体動作（深部感覚、皮膚感覚）、及び五感（視覚、聴覚、嗅覚、味覚）、内臓感覚において、【力】スキーマの日中の異同を明らかにした。

その結果、身体動作（深部感覚・皮膚感覚）において、日本語では、「強く殴る」「強く擦る」のように、外部からの刺激の強さを〈強〉で表している。一方、中国語では、“重重地打（逐語訳：重い-殴る）”“重重地搓（逐語訳：重い-擦る）”のように、外部からの刺激の強さを〈重〉で表すことを明らかにした。

次に、五感（嗅覚、味覚、視覚、聴覚）において、日本語と中国語では、〈重〉と〈強〉はどちらの使用が好まれているかを調べた結果、日本語では、〈強〉を中心に、嗅覚、味覚、視覚、聴覚にまで使用されており、中国語では、“气味重（逐語訳：匂い-重い）”“口味重（逐語訳：味-重い）”“颜色重（逐語訳：色-重い）”“声音重（逐語訳：音-重い）”のように、〈重〉が使用されていることを明らかにした。

さらに、内臓感覚において、日本語でも中国語でも、「空腹感が強い」“饥饿感很强（逐語訳：空腹感-強い）”のように、内臓感覚は共に〈強〉で表している。表 7-1 のように、日本語では、外部から内部までの身体感覚が同じで、連続していると言えるが、中国語では、身体（皮膚）を境界に、外部感覚は〈重〉、内部感覚は〈強〉のように身体感覚が分かれている。

表 7-1　力の強さの捉え方と外部感覚・内部感覚との関係（日中）

	外部感覚						内部感覚	
	深部感覚	皮膚感覚	聴覚	味覚	視覚	嗅覚	内臓感覚	前庭機能
中国語	重	重	重	重	重	重	強	--------
日本語	強	強	強	強	強	強	強	--------
感覚の性質	力の抵抗	触・圧	音	味	色	匂い	空腹感	ない

3.1 の結果を踏まえ、3.2 節では、Lang-8 学習者コーパスから「深い」を含むコロケーションの「直訳」と「非直訳」の誤用を抽出した。学習者の誤用は思考類名詞と感情類名詞と共起するときに集中している。次に、日中両言語の【容器】スキーマの依存度を明らかにした。中国語と日本語は＜身体部位は容器、言葉は内容物＞＜身体部位は容器、考えは内容物＞において差が見られたが、＜言葉は容器、意味は内容物＞においては差が見られなかった。中国語は日本語より【容器】スキーマの依存度が高いことが明らかになった。

さらに、＜言葉は水＞を考察し、日中両言語は【容器】スキーマと関与しているが、中国語は【容器】スキーマの顕在化が要求される場合が多く、日本語では、【容器】スキーマは多くの場合＜言葉は水＞という概念メタファーに内蔵され、背景化されていることが明らかになった。第 3 章で論じた中国語と日本語のイメージ・スキーマの異同を図式化し、図 7-1 で示す。

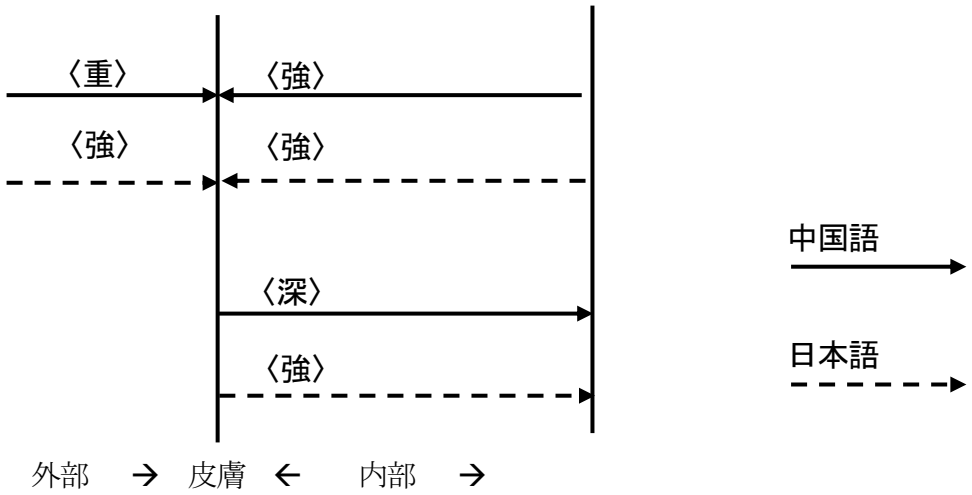

図 7-1 〈重〉〈深〉〈強〉の使用傾向（日中）

7.1.2 課題 2：概念メタファーの認定手順（第 4 章）

第 4 章は、①メタファーの認定、②概念メタファーの認定、③メタファーの種類の認定手順を考案した。以下のように示す。

① メタファーの認定手順

Step1： メタファーを認定する手続きを以下に示す。

1.1 まずテキスト全体の意味を理解する。

1.2 語[2]の区切りを決定する

1.3 それぞれの語に対して、文脈上の意味（M’）を決定する

1.4 それぞれの語に対して、字義通りの意味[3]（M）を決定する

1.5 文脈上の意味（M’）と字義通りの意味（M）の間に乖離があるかどうかを判定する。

1.6

A) 乖離があり、加えて文脈上の意味が字義通りの意味と比較によって理解できる場合、メタファーと認定する。

B) 乖離があるが、文脈上の意味が字義通りの意味と比較によって理解できない場合、死んだメタファーと認定する。

C) 乖離がない場合、メタファーではないと認定する。

② 概念メタファーの認定

Step2： 概念メタファーを認定する手続きを以下に示す。

2.1 文脈上の意味（M’）と字義通りの意味（M）に乖離がある語をピックアップし、媒介語とする。

2.2 媒介語の字義通りの意味は一つのカテゴリーにまとめ、起点領域（Y）とする。

2.3 媒介語の文脈上の意味は一つのカテゴリーにまとめ、目標領域（X）とする。

2.4 同じ目標領域（X）と起点領域（Y）を共有するメタファーが複数あることを確認する。

2.5 目標領域（X）と起点領域（Y）間の要素間で複数の写像関係が成立するか判定する。

2.6 できる場合、一つの概念メタファーと認定する。概念メタファーを支えるメタファーをメタファー表現とする。

③ メタファーの種類の認定

---

[2] 語（語彙単位）は辞書の見出し語を判定基準とする。

[3] 字義通りの意味の特徴は、具体性の高いもの、五感を喚起することなど、身体的な行為に関わるもの、曖昧でなく、明確なもの、歴史的に古いもの。

Step3： 概念メタファーに基づくメタファー表現の種類を決める手続きを以下に示す。

3.1 概念メタファーに基づくメタファー表現の媒介語をピックアップする。

3.2 コーパスで媒介語の共起語を調べる。

3.3

A) 媒介語の共起語が目標領域（X）に属する語の頻度と起点領域（Y）に属する語の頻度の比率が小さければ小さいほど、その媒介語を使うメタファー表現は当概念メタファー表現において革新的メタファーである。

B) 媒介語の共起語は目標領域（X）に属する語がない、目標領域（X）に属する語の頻度と起点領域（Y）に属する語の頻度の比率が 0 の場合、その媒介語を使うメタファー表現は当概念メタファー表現において革新的メタファーである。これは革新的メタファーの特殊例である。

3.4

A) 媒介語の共起語が目標領域（X）に属する語の頻度と起点領域（Y）に属する語の頻度の比率が大きければ大きいほど、その媒介語を使うメタファー表現は当概念メタファー表現において慣用化したメタファーである。

B) 媒介語の共起語は起点領域（Y）に属する語がなく、目標領域（X）に属する語の頻度と起点領域（Y）に属する語の頻度の比率が 0 の場合、その媒介語を使うメタファー表現は当概念メタファー表現において慣用化したメタファーである。これは慣用化したメタファーの特殊例である。

次に、日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース及び筑波ウェブコーパス（TWC）を利用して、＜情報＞を目標領域とする概念メタファーを検討し、意見文コーパスから＜情報は食べ物＞＜情報は水＞の 2 つの概念メタファーを検出した。さらに、認定手順に従い、メタファー表現を分類し、字義通りの意味と文脈上の意味に乖離がある語の共起語を調べ、メタファー表現の種類と語義の関係を明らかにした（図 7-2）。具体的には、メタファー表現を生成する語が単義の場合、革新的メタファーになりやすく、メタファー表現を生成する語が多義の場合、あるいは痕跡的多義の場合は、慣用化したメタファーになりやすいことが明らかになった。

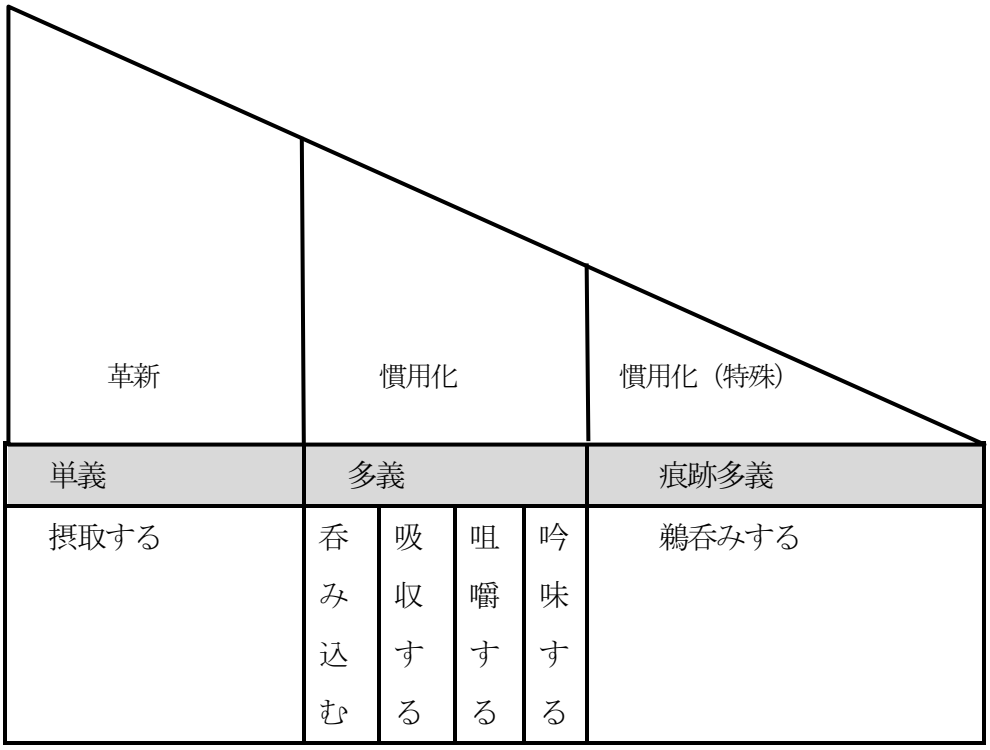

図 7-2　メタファーの種類と語義の関係（再掲）

最後に、メトニミーとメタファーの関連性を考える際、本論文で考案したメタファーの認定手順は 3 つのメタファーのうち、2 種類のメタファーの認定において有効であることが示唆された。

7.1.3　課題 3：概念メタファーにおける日中の異同（第 5、6 章）

第 5 章では、学習者コーパスから「頭」「脳」「思考」に関する母語の「直訳」「非直訳」の誤用を抽出した。表 7-2、表 7-3 に示すように、まず、＜思考＞メタファーに関して、中国語では、＜脳は考えを知覚する器官＞という上位メタファーの下に、＜脳は容器、考えは内容物＞、＜脳は幕、考えは映像＞の二つのサブメタファーがある。一方、日本語では、＜頭は考えを知覚する器官＞という上位メタファーの下に、＜頭は容器、考えは内容物＞、＜頭は幕、考えは映像＞の 2 つのサブメタファーがある。それによって、日中において目標領域が異なることがわかる。

次に、日本語でも中国語でも＜考えは機械の動き＞という上位メタファーがあるが、そのサブメタファーとして、日本語では＜頭は機械＞があるのに対して、中国語では＜脳は

機械＞があることを明らかにし、目標領域及び写像において日中両言語にズレがあることを示した。

表 7-2　＜思考＞メタファーの日中の異同 – その（1）

	中国語	日本語
上位メタファー	脳は考え知覚する器官	頭は考えを知覚する器官
サブメタファー	＜脳は容器、考えは内容物＞	＜頭は容器、考えは内容物＞
	＜脳は幕、考えは映像＞	＜頭は幕、考えは映像＞

表 7-3　＜思考＞メタファーの日中の異同 – その（2）

	中国語	日本語
上位メタファー	考えは機械の動き	考えは機械の動き
サブメタファー	＜脳は機械＞	＜頭は機械＞

第 6 章では、「興味」を目標領域として、日本語と中国語の概念メタファーの異同を探った。まず、学習者コーパスに現れる個々のコロケーションの誤用を分析した。次に、表 7-4 に示すように、中国語では＜興味は植物＞という概念メタファーが発見された。それに対して、日本語では＜興味は液体＞という概念メタファーが発見され、それを支えるイメージ・スキーマとして【力】スキーマ、【容器】スキーマが挙げられる。

表 7-4　＜興味＞メタファーの日中の異同

	中国語	日本語
概念メタファー	＜興味は植物＞	＜興味は液体＞

7.2　本研究の意義

7.2.1　コロケーションの習得モデル

従来の第二言語習得研究において、学習者の誤用を扱う研究は少なくない。学習者の誤用の原因を学習者の母語に帰する対照研究アプローチでは、学習者の誤用をなくすことを目的とする。一方、誤用分析アプローチでは、学習者の誤用を学習が進んでいる証しであ

るとポジティブに捉えている。さらに、中間言語アプローチでは、学習者の正用と誤用を含めて、学習者の独自の言語体系を明らかにすることを目的とする。

本研究で扱う「共起」のコロケーションの誤用について、李（2016）は、「共起」のコロケーションの誤用（81 項目）の母語の影響を検証したところ、約 60%（47 項目）の誤用は母語の直訳によるものであることを示した。さらに、コロケーションを大きい語彙として捉えれば、コロケーション習得のプロセスは Jiang（2000）の L2 語彙習得モデルに当てはまると述べている。

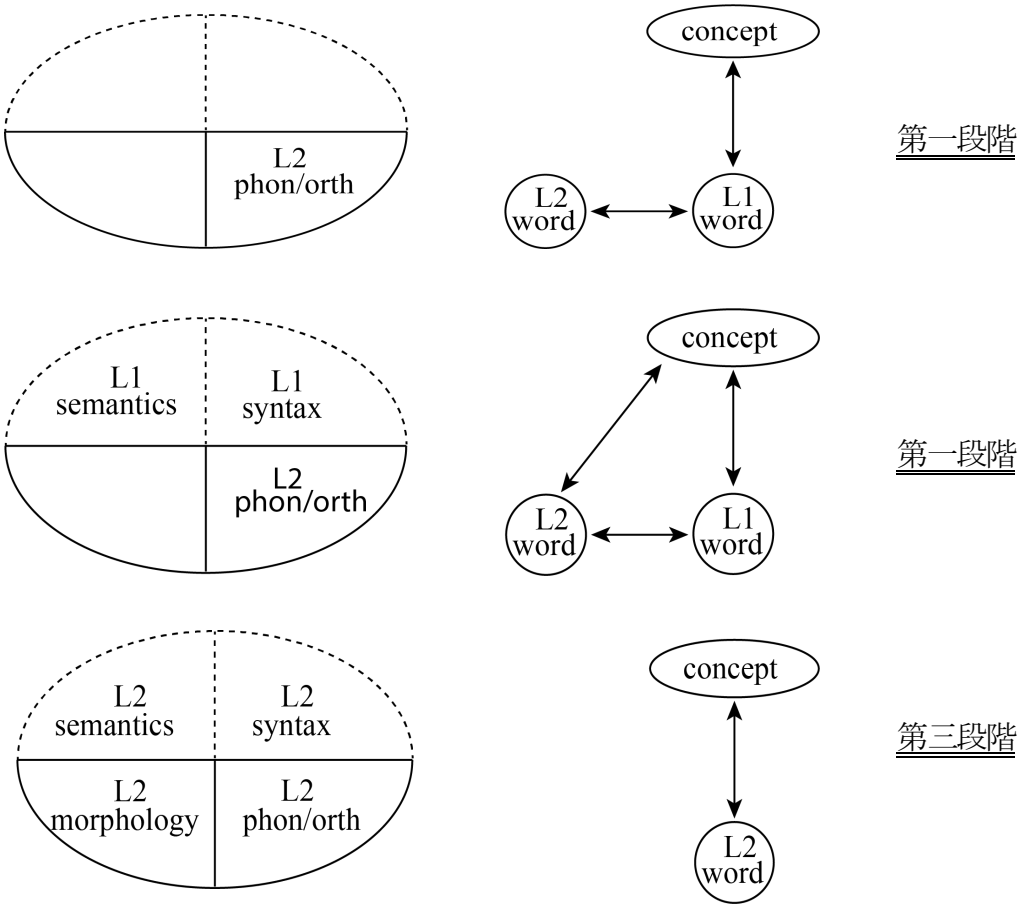

図 7-3　Jiang（2000）L2 語彙習得モデル（再掲）

しかし、以下の２つの疑問が浮かぶ。１つ目は、コロケーションを大きい語彙として捉えてよいかどうかということである。コロケーションが語彙と最も異なるところは、コロケーションは語と語の結び付きで、恣意的なものではなく、概念メタファーによって支え

られていることである。そのため、本稿で検証したように、コロケーションの産出は母語と目標言語の一対一の直訳より、母語の概念メタファーに影響される。

2 つ目は、母語の直訳ではない誤用の扱いについてである。確かに日本語と中国語は似たような漢字が多く使われるので、学習者が L1 の語形、音韻、意味的、統語的知識を利用し、L2 を習得していくだろうと考えられる。しかし、母語に直訳できないコロケーションの誤用（例：*頭も涼しくなる）について、Jiang（2000）のモデルの第 2 段階では説明できない。すなわち、中国人日本語学習者のコロケーション習得のプロセスは Jiang の L2 語彙習得モデルに当てはまるとは言いがたい。言い換えれば、L1 の意味・統語と直接的に関連が見られず、傾向的に現れる L2 の誤用について、Jiang（2000）のモデルは無効だと考えられる。

7.2.2　言語転移（Linguistic Transfer）と概念転移（Conceptual Transfer）

なぜコロケーションの習得モデルは Jiang（2000）の L2 語彙習得モデルに当てはまらないかというと、最も大きい理由は本稿で捉える語彙表象（Lexical Representation）が Jiang（2000）と異なるからである。図 7-4 に示したように、Jiang（2000）は Levelt（1989）のものを援用し、語彙表象は lemma レベル、lexeme レベルからなっている。しかし、本論文は、Jarvis & Pavlenko（2008）の図 7-5 に示したように、語彙表象は lemma レベル、lexeme レベル、concepts レベルからなっていることを支持する。

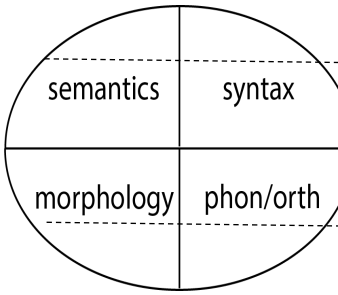

図 7-4　Jiang（2000：48）

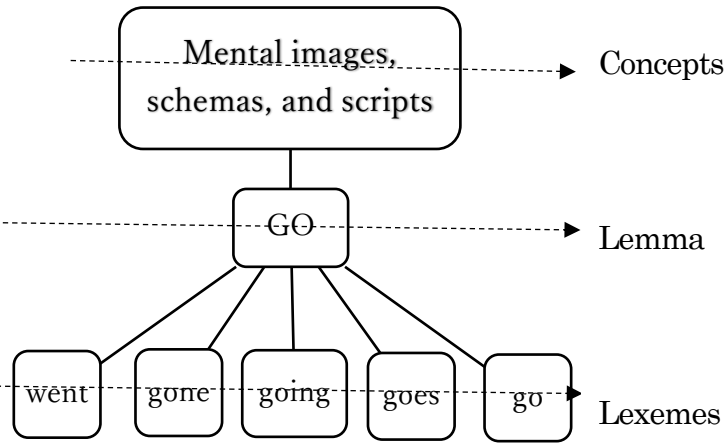

図 7-5　Jarvis & Pavlenko（2008：83）

そのため、Jiang（2000）で言及した言語レベルの転移（Linguistic Transfer）は主にL1の翻訳によるLexical Transferである。しかし、本稿で提示したように、概念レベルの転移（Conceptual transfer）もある。

Jarvis ＆ Pavlenko（2008）は、①言語Aと言語Bは概念カテゴリーの構造（概念表象：Conceptual Representation）が異なる可能性があると述べている。また、②概念とその概念を表す語（言語A、言語B）のリンク、語（言語A）と語（言語B）のリンク（意味表象：Semantic Representation）が異なる可能性があると述べている4。

まず、本稿の結果を踏まえて、①言語Aと言語Bは概念カテゴリーの構造（概念表象：Conceptual Representation）が異なる場合の例を見る。本稿の第6章で述べたように、中国語は＜興味は植物＞があるのに対して、日本語では＜興味は液体＞である。中国語と日本語の概念表象が異なることを示した。

図7-6では、「*興味を培養する」の誤用では、L1の概念メタファーにアクセスせずに、中国語の“培养”直接的に日本語の「培養する」に翻訳することで、誤用が起きている。L1の意味と、語と語の結びつきの知識を利用している。図7-6は言語転移である。

言語レベル：	学習者：*興味　を　培養する	←母語の直訳（言語転移）
	中国語：培养　兴趣	
	訳：培養する　興味	
概念レベル：	＜興味は植物＞	←概念誤用

図 7-6　直訳と概念誤用の関係（概念メタファー）

一方、図7-7では、「*興味を抜く」の誤用では、中国語に直訳して、“*拔出兴趣”という表現が成立しない。L1の意味だけ利用して、このような語と語の結びつきに辿りつ

4 日本語訳は筆者による。原文は次のとおりである。“Language A and B may differ in the structure of particular conceptual categories(conceptual representation) and also in the links between these concepts and words, as well as between words and other words(semantic representation). Even in cases where speakers of the two languages may rely on similar conceptual categories, these categories may be linked differently to the words of languages A and B and thus the two languages will differ on the semantic but not necessarily on the conceptual level.”（Jarvis・Pavlenko 2008：119）

かないである。つまり、L1 の概念メタファーにアクセスすることで、このような非直訳の誤用が引き起こされる。図 7-7 は、概念転移である。

言語レベル：	学習者：*興味　を　抜く	←母語の非直訳（概念転移）
	中国語：*抜出　兴趣	
	訳：抜く　興味	
概念レベル：	＜興味は植物＞	←概念誤用

図 7-7　非直訳と概念誤用の関係（概念メタファー）

次に、概念とその概念を表す語（言語 A、言語 B）のリンクが異なる場合の例を見る。第 3 章では、【力】スキーマに関して、中国語では、〈重〉で表しているのに対して、日本語では、〈強〉で表していることを明らかにした。同じイメージ・スキーマを表す語が L1 と L2 で異なることにより、誤用が引き起こされている。

図 7-8 と図 7-9 では、外部からの刺激が五感に与える力の強さを表している。図 7-8 では、言語レベルにおいて、「*味が重い」は母語の直訳である。L1 の意味と、語と語の結びつきの知識を利用しているため、言語転移である。一方、図 7-9 では、「*重い雨」は母語の非直訳である。外部からの刺激は視覚・聴覚に与える刺激の強さを記述するとき、【力】スキーマにアクセスし、概念とその概念を表す語のリンクは日中で異なるため、誤用が引き起こされている。

さらに、図 7-10 では、A が B に与える抽象的な力そのもの（思考、感情、抽象物）の強さを表している。「*傾向が重い」も母語の非直訳であるが、スキーマレベルにおける【力】スキーマによるものである。これらを日本語に修正すると、「味が強い」「強い雨」「傾向が強い」になる。日本語の【力】スキーマと語のリンクは中国語の【力】スキーマと語のリンクと異なる。図 7-10 は、概念転移である。

言語レベル：	学習者：*味が　重い	←母語の直訳（言語転移）
	中国語：味道　重	
	訳：味　　重い	
スキーマレベル：	【力】スキーマ	←概念誤用

図 7-8　直訳（五感）と概念誤用の関係（イメージ・スキーマ）

言語レベル：	学習者：*重い　雨	←母語の非直訳（概念転移）
	中国語：*很重的雨	
	訳：　重い　雨	
スキーマレベル：	【力】スキーマ	←概念誤用

図 7-9　非直訳（五感）と概念誤用の関係（イメージ・スキーマ）

言語レベル：	学習者：*傾向　が重い	←母語の非直訳（概念転移）
	中国語：*倾向很重	
	訳：傾向　重い	
スキーマレベル：	【力】スキーマ	←概念誤用

図 7-10　非直訳（抽象概念）と概念誤用の関係（イメージ・スキーマ）

以上のように、従来学習者の誤用の原因は多くが母語の「直訳」によるもので、言語転移だと言われている。母語の「直訳」では説明できない「非直訳」の誤用は学習者の中間言語であるとまとめられがちである。本研究では、学習者の「直訳」「非直訳」の誤用を見据え、日中両言語の認知の違いを明らかにした。さらに、それを基盤として、学習者の誤用は言語転移によるだけでなく、概念転移によるものもあるという可能性を示した。そして、学習者の概念誤用は概念メタファーとイメージ・スキーマの両方に起きる可能性を示した。

7.2.3　概念メタファーの認定手順

実践面において、これまで概念メタファー研究、コロケーションの研究が広く行われてきた。しかし、先行研究では概念メタファーをいかに認定するか具体的な手順を示しておらず、主観的な方法が広く用いられてきた。本研究では、具体的な認定手順を示し、これにより概念メタファーを研究する研究者に道標を示した。

7.3　今後の課題

①より精緻化した学習者コーパスによる分析

本研究は学習者の自然産出に現れるコロケーションの誤用を分析するために、学習者コーパス（JC、Lang-8）を利用している。Lang-8 学習者コーパスでは学習者が産出した文数が多いため、ある概念メタファーによって動機付けられている学習者の自然産出したコロケーションの研究に相応しい。しかし、コーパスのデザインによって、学習者の学習歴、日本語レベルが不明である。

本研究では、学習者の「直訳」と「非直訳」を提示して、概念転移および概念誤用の可能性を示した。しかし、母語と日本語のイメージ・スキーマ、概念メタファーのズレはどのレベルの学習者にどのように影響しているか説明がつかない。これは本論文の限界だと言える。今後の課題として、実験調査を加え、学習者の日本語レベルを統制し、学習者のレベルと概念転移、概念誤用の関係を検討する。

③ 意味転移（Semantic Transfer）と概念転移（Conceptual Transfer）の区別

Jarvis ＆ Pavlenko（2008）では、語彙知識として、以下 6 要素を挙げている。

① Accessibility：心的辞書（mental lexicon）にアクセスする能力
② Morphophonology：正しい発音と綴り、活用が書ける知識
③ Syntax：文法、シンタックスに関する知識
④ Semantic：語の意味に関する知識
⑤ Collocation：複数語の結びつきに関する知識
⑥ Association：語と語、及び概念（notion）の結びつきに関する知識

そのうち、Collocation と Association について、Jarvis & Pavlenko（2008）は、これらは語の意味に関する知識（語と概念のリンク、語とそのほかの語のリンク）と述べている。語の意味に関する知識に創発される誤用は、意味転移（Semantic Transfer）として扱われている。

一方、概念転移（Conceptual Transfer）は意味転移に伴う場合もよくある。しかし、概念転移は概念表象に創発される誤用がメインである。本研究では、語と語の結ぶつきは概念表象（概念メタファー、イメージ・スキーマ）に基づいているとし、特に母語にない語と語の結びつきは語の意味に関する知識だけでは組み立てられないため、先に概念表象（概念メタファー、イメージ・スキーマ）にアクセスする必要がある。そのため、非直訳の誤用を概念転移として認定した。

母語にない語と語の結びつきは意味転移（Semantic transfer）と概念転移（Conceptual transfer）を区別する唯一の基準であるかどうか、さらに検討していく必要がある。

③言語内の恣意性及び言語処理と言語習得

本研究では、Liu（2010）であげたコロケーションの恣意性（言語間、言語内、言語処理と習得）のうち、言語間の恣意性について検討した。日本語では、「強く殴る」をいうが、中国語では、「重重地打（重く殴る）」をいう。【力】スキーマにおいて、日本語では、外からの刺激を〈強〉で捉えるのに対して、中国語では、〈重〉で捉えている。さらに、【容器】スキーマについての検討により、中国語を母語とする日本語学習者が感情類名詞と思考類名詞の程度の強さを表す時、なぜ「深い」の使用を好むのかについて論じた。また、＜思考＞メタファー、＜興味＞メタファーについて、日中の異同を検討した。なぜコロケーションが言語間において恣意的に見られるか、また、コロケーションの語と語の結びつきの動機付きをイメージ・スキーマと概念メタファーの観点から分析した。

一方、言語内の恣意性について、なぜ日本語では、「能力をあげる」が言えるが、「*興味をあげる」が言えないのかを検討しなかった。さらに、言語間と言語内の恣意性によってもたらした言語処理と習得の恣意性を検討することを今後の課題とする。

以上のことを今後の課題とし、日中両言語の認知の異同を明らかにし、第二言語習得研究を促進するため、今回の研究を踏まえさらなる研究を進めていきたい。

博士論文に関わる研究発表活動（関連章）

本研究の構成と既発表論文との関連について以下のように示し、口頭発表・ポスター発表・研究ノート・研究論文・受賞歴の情報を時間順に示す。

第１章　序論

1.　新規執筆

第２章　先行研究及び研究課題

2.　先行研究の分析について、以下（1）を改訂・加筆

第３章　イメージ・スキーマにおける日中の異同

3.　李文鑫（2017）「中国人日本語学習者のコロケーションの誤用原因－＜力＞スキーマに基づく日中概念メタファーの異同－」日本語用論学会　メタファー研究会　夏の陣 2017「比喩と隠喩」2017.6.4　【口頭発表】

4.　李文鑫（2017）「中国人日本語学習者の中国人日本語学習者のコロケーションの誤用原因－日中間の共感覚的比喩転用の異同から－」 第九回漢日対比言語学検討会 2017.8.20　【口頭発表】

5.　李文鑫（2017）「中国人日本語学習者の中国人日本語学習者のコロケーションの誤用の原因と実態－＜力＞＜容器＞＜上下＞スキーマに基づく日中概念メタファーの異同－」　2017.8.4 アジア圏学習者コーパス国際シンポジウム　【ポスター発表】

6.　李文鑫（2018）「中国語話者の日本語形容詞コロケーションの誤用の実態と原因－イメージ・スキーマの観点から－」『Learner corpus studies in Asia and the world』. Vol. 3. pp.265-278　【研究論文】

第４章　概念メタファーの認定手順―「情報」を例に

7.　李文鑫（2016）「概念メタファーはどのように特定するか－コーパスに基づく分析－」現代日本語研究会　2016.8　【口頭発表】

8.　李文鑫（2016）「作文コーパスから見た日本語学習者メタファーの産出能力」東アジア若手研究者フォーラム　2016.11　【口頭発表】

9. 李文鑫（2017）「＜情報＞を目標領域とする概念メタファー－メタファーの認定手順の提案とコーパスに基づく分析－」『国際日本研究』 vol.9 pp.129-146 【研究ノート】

第５章　＜思考＞を目標領域とする日中概念メタファーの異同

10. 李文鑫（2018）「概念メタファー理論に基づくコロケーションの誤用分析－『思考』メタファーを例に－」第 99 回第 2 言語習得研究会（関東）　2018.2.17　【口頭発表】
11. 李文鑫（2018）「身体性をめぐる【容器】スキーマの日中比較と学習者の誤用」2018.7.7　竹園日本語教育研究会　【口頭発表】
12. 李文鑫・今井新悟（2018）「中国人日本語学習者の形容詞コロケーションにおける誤用の原因－【容器】スキーマの依存度から－」　2018.8.2　国際日本語教育大会【口頭発表】
13. 李文鑫（2018）「概念メタファーに基づくコロケーションの誤用分析－＜頭/脳は機械＞を例に－」『ことば』 39 号　pp.52-69　【研究論文】

第６章　＜興味＞を目標領域とする日中概念メタファーの異同

14. 李文鑫（2017）「中国人日本語学習者の中国人日本語学習者のコロケーションの誤用原因－概念メタファー理論に基づく分析－」現代日本語研究会　2017.6.25　【口頭発表】
15. 李文鑫（2017）「概念メタファーに基づくコロケーションの誤用分析－『興味』を例に－」『ことば』 38 号 pp.83-101　【研究論文】
16. 李文鑫（2018）「概念メタファーに基づくコロケーションの誤用分析－『興味』を例に－」『ことば』 38 号　日本語誤用と日本語教育研究会　【学会賞】

第７章　終章

- 新規執筆

参　考　文　献

参考文献は、単行本と研究論文を中心に、刊行された言語によって、英語・日本語・中国語文の順で記述する。すべてＡ～Ｚ順で提示する。

1. Bachman, Lyle F. *Fundamental Considerations in Language Testing*. Oxford University Press, 1990.
2. Boers, Frank. "Metaphor Awareness and Vocabulary Retention." *Applied Linguistics*, vol. 21, no. 4, 2000, pp. 553–571.
3. Boers, Frank, and Stuart Webb. "Teaching and Learning Collocation in Adult Second and Foreign Language Learning." *Language Teaching*, vol. 51, no. 01, 2017, pp. 77–89,
4. Clausner, Timothy C., and William Croft. "Domains and Image Schemas." *Cognitive Linguistics*, vol. 10, 1999, pp. 1–32.
5. Corder, Stephen Pit. "The Significance of Learner's Errors." *IRAL-International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, vol. 5, no. 1–4, 1967, pp. 161–170.
6. Cowie, AP, and P. Howarth. *Language and Education: Papers from the Annual Meeting of the British Association for Applied Linguistics Held at the University of Southampton, September 1995*. Multilingual Matters, 1996.
7. Danesi, Marcel. "Metaphorical Competence in Second Language Acquisition and Second Language Teaching: The Neglected Dimension." *Language, Communication and Social Meaning*, 1993, pp. 489–500.
8. Danesi, Marcel. "Learning and Teaching Languages: The Role of 'Conceptual Fluency.'" *International Journal of Applied Linguistics*, vol. 5, no. 1, 1995, pp. 3–20.
9. Danesi, Marcel. "Conceptual Errors in Second-Language Learning." *Applications of Cognitive Linguistics*, vol. 9, 2008, pp. 231–56.

10. Danesi, Marcel. "Conceptual Fluency in Second Language Teaching: An Overview of Problems, Issues, Research Findings, and Pedagogy." *International Journal of Applied Linguistics and English Literature*, vol. 5, no. 1, Jan. 2016, pp. 145–53.
11. Deignan, Alice. *Metaphor and Corpus Linguistics*. John Benjamins Publishing, 2005.
12. Gardener, H., and E. Winner. "The Development of Metaphoric Competence: Implications for Humanistic Disciplines." *On Metaphor. Chicago*, 1978.
13. Group, Pragglejaz. "MIP: A Method for Identifying Metaphorically Used Words in Discourse." *Metaphor and Symbol*, vol. 22, no. 1, 2007, pp. 1–39.
14. Ikegami, Yoshihiko. "The Agent and the Sentient: A Dissymmetry in Linguistic and Cultural Encoding." *Origins of Semiosis*, 1994, pp. 325–337.
15. Jiang, N. "Lexical Representation and Development in a Second Language." *Applied Linguistics*, vol. 21, no. 1, Mar. 2000, pp. 47–77. *academic.oup.com*,
16. Johnson, Mark. *The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. University of Chicago Press, 1990.
17. Kovecses, Zoltán, and Péter Szabcó. "Idioms: A View from Cognitive Semantics." *Applied Linguistics*, vol. 17, no. 3, Sept. 1996, pp. 326–55. *academic.oup.com*,
18. Lado, Robert. *Linguistics across Culture*. Michigan UP, 1957.
19. Lakoff, George. "The Contemporary Theory of Metaphor." *Metaphor and Thought, 2nd Ed*, Cambridge University Press, 1993, pp. 202–51. *APA PsycNET*,
20. Lakoff, George, and Mark Johnson. "The Metaphorical Structure of the Human Conceptual System." *Cognitive Science*, vol. 4, no. 2, Apr. 1980, pp. 195–208.
21. Lakoff, George, and Mark Johnson. *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*. Basic Books, 1999.
22. Lakoff, George, and Mark Johnson. *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press, 2003.
23. Lewis, M. "The Lexical Approach. Hove: Language Teaching Publications." *Language Teaching Publications*, 1993.
24. Lewis, Michael, and Jane Conzett. *Teaching Collocation: Further Developments in the Lexical Approach*. Language Teaching Publications Hove, 2000.

25. Lewis, Michael, and Cherry Gough. *Implementing the Lexical Approach: Putting Theory into Practice*. Vol. 3, Language teaching publications Hove, 1997.
26. Littlemore, Jeannette. "Metaphoric Competence: A Language Learning Strength of Students with a Holistic Cognitive Style?" *TESOL Quarterly*, vol. 35, no. 3, 2001, pp. 459–91.
27. Littlemore, Jeannette, and Graham Low. "Metaphoric Competence, Second Language Learning, and Communicative Language Ability." *Applied Linguistics*, vol. 27, no. 2, June 2006, p. 268.
28. Liu, Dilin. "Going Beyond Patterns: Involving Cognitive Analysis in the Learning of Collocations." *TESOL Quarterly*, vol. 44, no. 1, Mar. 2010, pp. 4–30.
29. Low, Graham, editor. *Researching and Applying Metaphor in the Real World*. Benjamins, 2010.
30. Nattinger, James R., and Jeanette S. DeCarrico. *Lexical Phrases and Language Teaching*. 上海外语教育出版社, 1992.
31. Pollio, Marilyn R., and James D. Pickens. "The Developmental Structure of Figurative Competence." *Cognition and Figurative Language*, 1980, pp. 311–340.
32. Pollio, Howard R., et al. "Figurative Language and Cognitive Psychology." *Language and Cognitive Processes*, vol. 5, no. 2, 1990, pp. 141–167.
33. Schachter, Jacquelyn. "An Error in Error Analysis." *Language Learning*, vol. 24, no. 2, 1974, pp. 205–214.
34. Selinker, Larry. "Interlanguage." *IRAL-International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, vol. 10, no. 1–4, 1972, pp. 209–232.
35. Szudarski, Paweł, and Ronald Carter. "The Role of Input Flood and Input Enhancement in EFL Learners' Acquisition of Collocations." *International Journal of Applied Linguistics*, vol. 26, no. 2, July 2016, pp. 245–65.
36. Talmy, Leonard. "Force Dynamics in Language and Cognition." *Cognitive Science*, vol. 12, no. 1, 1988, pp. 49–100.
37. Talmy, Leonard. *Toward a Cognitive Semantics*. MIT Press, 2000.
38. Webb, Stuart, et al. "Incidental Learning of Collocation." *Language Learning*, vol. 63, no. 1, Mar. 2013, pp. 91–120.

39. Wolter, Brent. “Lexical Network Structures and L2 Vocabulary Acquisition: The Role of L1 Lexical/Conceptual Knowledge.” *Applied Linguistics*, vol. 27, no. 4, Dec. 2006, pp. 741–47.
40. Yamashita, Junko, and Nan Jiang. “L1 Influence on the Acquisition of L2 Collocations: Japanese ESL Users and EFL Learners Acquiring English Collocations.” *TESOL Quarterly*, vol. 44, no. 4, Dec. 2010, pp. 647–68.
41. Yu, Ning. “Metaphorical Expressions of Anger and Happiness in English and Chinese.” *Metaphor and Symbolic Activity*, vol. 10, no. 2, June 1995, pp. 59–92.
42. Yu, Ning. “Chinese Metaphors of Thinking.” *Cognitive Linguistics*, vol. 14, no. 2–3, 2003, pp. 141–165.
43. Yu, Ning. *The Chinese Heart in a Cognitive Perspective: Culture, Body, and Language*. Mouton de Gruyter, 2009.
44. 東眞須美, 2005. 日本人英語学習者のメタフォリカルコンピテンスとメンタルレキシコン(英語教育の到達目標-その基準を求めて-). JACET 全国大会要綱 44, 182–183.
45. 東眞須美, 2006. メタフォリカル コンピテンス(MC)の測定–MC と言語能力との相関性. 日本認知言語学会論文集 6, 224–234.
46. 菊地正, 2008. 感覚知覚心理学. 朝倉書店, 東京.
47. 後藤秀貴, 2017. 再び日本語の「胸」の理解をめぐって：英語との比較から. 言語文化共同研究プロジェクト 2016, 39–51.
48. 後藤秀貴, 2018. ＜感情は液体＞メタファー表現の成立基盤と制約：概念メタファーの「まだら」をめぐって .メタファー研究 1, 195–230.
49. 池上嘉彦, 2007. 日本語と日本語論. 筑摩書房.
50. 徐蓮, 2009. 日本語と中国語における〈深/浅〉の認知的対照研究. 第 4 回 国際日本学コンソーシアム, 1–15.
51. 徐蓮, 2011. 日中同形多義語〈深/浅〉の意味構造対照分析. 日本認知言語学会論文集 11, 309–319.
52. 韓涛, 2011. 〈コミュニケーション〉のメタファー再考：中国語のケース. 日本認知言語学会論文集 11, 49–59.
53. 韓涛, 2014a. 《言葉は液体》のメタファー再考：日中対照の観点から. ことばの科学, 28, 37-49

54. 韓涛, 2014b. 中国語の概念メタファーに関する研究：認知メタファー理論の立場から. 名古屋大学. 博士論文
55. 金善花, 2017. 「深い」のプロトタイプに関する日中対照研究. 『言語をめぐる x 章—言語 を考える，言語を教える，言語で考える—，仁科弘之教授退職記念論文集（埼玉大学教 養学部リベラル・アーツ叢書別冊 2)』河正一・島田雅晴・金井勇人・仁科弘之（編） 167–185.
56. 小出慶一, 2000. 次元形容詞の空間的用法と非空間的用法. 群馬県立女子大学紀要 1–13.
57. 小森和子, 三國純子, 徐一平, 2012. 中国語を第一言語とする日本語学習者の漢語連語と和語連語の習得：中国語と同じ共起語を用いる場合と用いない場合の比較. 小出記念日本語教育研究会論文集 49–61.
58. 栗木久美, 2016. 形容詞「深い」の意味拡張の動機づけ. 第 161 回現代日本語学研究会発表要旨 1-2.
59. 国広哲弥, 1982. 意味論の方法. 大修館書店.
60. 国広哲弥, 1985. 慣用句論. 日本語学 4 , 4–14.
61. 楠見孝, 1988. 共感覚に基づく形容表現の理解過程について. 心理学研究 58, 373–380.
62. 楠見孝, 2004. 味覚のメタファー表現への認知的アプローチ. 日本言語学会第 127 回大会予稿集 pp9-14.
63. 楠見孝, 米田英詞, 2007. 感情と言語. 『感情科学の展望』 55–84.
64. 松田隆夫, 1995. 視知覚. 培風館.
65. 松本曜, 2003. 認知意味論. シリーズ認知言語学入門 3. 大修館書店.
66. 松井真人, 2007. メタファーの経験的基盤に関する一考察：「心」の存在場所に関する日英語のメタファーをめぐって. 山形県立米沢女子短期大学紀要 = Bulletin of Yonezawa Women's Junior College 37–44.
67. 松井真人, 2010. 英語と日本語における「理解」の概念メタファー. 山形県立米沢女子短期大学紀要 46, 19～28.
68. 三國純子, 小森和子, 徐一平, 2015. 中国語を母語とする日本語学習者の漢語連語の習得：共起語の違いが誤文訂正に及ぼす影響. 中国語話者のための日本語教育研究 34–49.

69. 水本智也, 小町守, 永田昌明, 松本裕治, 2013. 日本語学習者の作文自動誤り訂正のための語学学習 SNS の添削ログからの知識獲得. 人工知能学会論文誌 28, 420–432.
70. 村木新次郎, 2007. コロケーションとは何か (特集 コロケーション). 日本語学 26, 4–17.
71. 鍋島弘治朗, 2003. 認知言語学におけるイメージ・スキーマの先行研究 (ワークショップ イメージスキーマと認知言語学:課題と実践). 日本認知言語学会論文集 3, 335–338.
72. 鍋島弘治朗, 2004. 「理解」のメタファー —認知言語学的分析—. 大阪大学言語文化学 13, 99-116.
73. 鍋島弘治朗, 2011. 日本語のメタファー. くろしお出版.
74. 鍋島弘治朗, 中野阿佐子, 2016. MIP：理想のメタファー認定手順を求めて. 英米文学英語学論集, 1–18.
75. 中村嘉宏, 2011. 語彙習得の諸相. 佐賀大学文化教育学部研究論文集 15, 35–54.
76. 野田尚史, 2007. 文法的なコロケーションと意味的なコロケーション (特集 コロケーション). 日本語学 26, 18–27.
77. 野村益寛, 2002. 〈液体〉としての言葉:日本語におけるコミュニケーションのメタファー化を めぐって. 認知言語学 2 37–57.
78. 小野正樹, 朱炫姝, デヒピティヤスランジ ディルーシャ, 李国玲, スワンナクートパッチャラーパン, 2015. 〈研究論文〉日本語動詞「きく」のコロケーションについて: WEB コーパスと日本語母語話者・上級日本語学習者の判断から. 筑波大学留学生センター日本語教育論集 1–20.
79. 大石亨, 2006. 「水のメタファー」再考–コーパスを用いた概念メタファー分析の試み. 日本認知言語学会論文集 6, 277–287.
80. 大関浩美, 2017. 学習者コーパスと第二言語習得研究-コーパスを使ってできること・できないこと. 第二回学習者コーパスワークショップ.
81. 大曽美恵子, 滝沢直宏, 2003. コーパスによる日本語教育の研究–コロケーション及びその誤用を中心に (コーパス言語学) – (コーパスによる各種研究). 日本語学 22, 234–244.
82. 王秀英, 2012. 日本語の複合動詞「 こむ」類と中国語の複合動詞. 言語科学論集 73–84.

83. 李文平, 2016. 中国人日本語学習者のためのコロケーション学習の指導法に関する基礎的研究：作文データに基づく「名詞＋を＋動詞」のコロケーションを中心に. 名古屋大学. 博士論文
84. 李文鑫, 2018. 中国語話者の日本語形容詞コロケーションの誤用の実態と原因：イメージ・スキーマの観点から. Learner Corpus Studies in Asia and the World 3, 263–276.
85. 劉瑞利, 2017. 日本語学習者の「名詞＋動詞」コロケーションの使用と日本語能力との関係：「YNU 書き言葉コーパス」の分析を通して. 日本語教育 166, 62–76.
86. 佐竹由帆, 2015. 日本人英語学習者コーパスにおける動詞-名詞コロケーションとコンビネーション. 情報学研究 4, 118–125.
87. 左咏梅, 2007. 『上』と『下』のメタファーについて 日中対照研究. 大学院論文集(杏林大学大学院国際協力研究科） 47–63.
88. 瀬戸賢一, 1997. 認識のレトリック. 海鳴社.
89. 瀬戸賢一, 2001.日本語感覚で話す英会話—日本語と英語の同じ使い方 80. NOVA.
90. 白川博之, 2007. 学習者の誤用・非用をどう考えるか. 広島大学大学院教育学研究科紀要. 第二部, 文化教育開発関連領域 173–179.
91. 曹紅荃, 仁科喜久子, 2006a. 自由産出調査から見る形詞および形容動詞と名詞の共起表現：学習者と母語話者の対照を通して(<特集>言語の学習・教育). 電子情報通信学会技術研究報告. TL, 思考と言語 106, 31–36.
92. 曹紅荃, 仁科喜久子, 2006b. 中国人学習者の作文誤用例から見る共起表現の習得及び教育への提言–名詞と形容詞及び形容動詞の共起表現について (特集 コーパスと日本語教育–現状と課題). 日本語教育 70–79.
93. 曹紅荃, 仁科喜久子, 2007. 容認性判断テストの結果から見る中国人日本語学習者の共起表現受容時の L1 転移. 日本語教育方法研究会誌 14, 16–17.
94. 菅野盾樹・中村雅之訳, 1991. 心の中の身体. 紀伊国屋書店. Johnson, M., The Body in the mind. 1987. The University of Chicago Press.
95. 鈴木幸平, 2011. コーパスに基づく日英語の液体メタファー比較. 日本認知言語学会論文集 11, 38–48.
96. 鐘勇, 2013. 中国人日本語学習者のメタフォリカル・コンピテンスの発達と養成に関する考察. 九州大学. 博士論文

97. 鐘勇, 井上奈良彦, 2012. メタフォリカル・コンビテンス(MC)研究の現状と問題点及び日本語教育への導入. 言語文化論究 73–86.
98. 鐘勇, 井上奈良彦, 2013. 日本語における上下メタファーの体系構成及びその特徴に関する一考察. 言語文化論究 13–26.
99. 谷口一美, 2003. 認知意味論の新展開—メタファーとメトニミー. 研究社, 東京.
100. 趙蔚青, 2004. 次元形容詞「深い/浅い」の意味・用法についての日中対照分析. 広島女子大学国際文化学部紀要 51–69.
101. 渡辺秀樹・大森文子・加野まきみ・小塚良孝訳, 2010. コーパスを活用した認知言語学. 大修館書店. Deignan, A., Metaphor and Corpus Linguistics. 2005. John Benjamins Publishing.
102. 山田奈弥, 2008. 「深い」のメタファーにおける日中対照研究. 日本語教育論集 55–62.
103. 山梨正明, 2000. 認知言語学原理. くろしお出版.
104. 楊婧瑋, 2013. 軽重を表す形容詞「軽い」「重い」“轻”“重”についての日中対照研究. 日中語彙研究 25–47.
105. 潘家煊, 1995. “有界”与“无界.” 中国语文 367–380.
106. 石毓智, 1992. 论现代汉语的“体”范畴. 中国社会科学 183—201.
107. 张伯江, 1991. 关于动趋式带宾语的几种语序. 中国语文 3, 185–186.
108. 朱德熙, 1982. 语法讲义. 商务印书馆.

謝　辞

本論文は、筆者が筑波大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程在学中に、元指導教官である今井新悟先生、現指導教官である小野正樹先生のご指導のもとに執筆したものです。

本論文を執筆するに当たり、多くの方々にご指導、ご助言とご支援をいただきました。ここに感謝の意を表します。

まず、博士後期課程に入学してから、元指導教官である今井新悟先生には、常に自由に学術問題を議論できるような環境を提供してくださり、研究活動全般にわたり終始多くのご指導を賜りました。ここに深謝を表したいです。また、研究に対するパッション、研究者としてのミッション、研究者であるべきスタンスなど日々の議論の中から多くの感銘を受け、学ばせていただきました。衷心より感謝申し上げます。

次に、現指導教官である小野正樹先生には、ゼミ生が多い中、私を引け受けてくださり、いつも温かいご指導とご助言をいただきました。心よりお礼を申し上げます。また、幅広い研究テーマを扱うゼミ生の発表を聞き、日本語教育学の研究だけでなく、語用論研究の面白さも味わうことができて、とても勉強になりました。

論文の副査をお引き受くださった同研究科のブッシュネル・ケード先生、木戸光子先生、矢澤真人先生には貴重なお時間を割っていただき、いつも懇切丁寧なご指導をいただきました。ブッシュネル先生には博士後期一年生の時から、会話分析の授業をはじめ、会話分析の基礎を学ばせていただき、会話分析とメタファーの接点で視野を広げられ、自然会話の中に話者間のメタファー使用のメカニズムという次の課題に出会わせました。木戸光子先生には、文章表現の授業をはじめ、論の組み立て方や文章表現について色々教えていただきました。矢澤真人先生はいつも温かい言葉で励ましてくださって、時には鋭いご指摘をいただき、先生方のご指摘のおかげで、論文をまとめることができました。また、同大学研究科の酒井たか子先生、高木智世先生にも大変お世話になっており、同じ研究室の吉川達さん、近藤弘さんに、日本語チェックなどで大変助けていただきました。この場を借りて、今までのご支援に対し、厚く御礼申し上げます。

また、博士前期課程から後期課程終わるまで、研究全般にわたる多大なご指導を賜りました、修士指導教官である北京外国語大学北京日本学研究センター教授の曹大峰先生に深

く感謝しております。北京日本学研究センターに在籍している間、恵まれた研究環境を与えられ、自分の研究基礎、教育観を形成する最初の場となりました。

修士時代お知り合った元国際交流基金派遣専門家の北村久明先生のご夫婦に、日本に留学している間、家族のようにいつも温かく見守っていただき、些細なことも相談に乗ってくださって、本当にありがとうございました。また、何回も投稿論文を読んでいただき、論の構成から日本語表現までコメントをいただいた専修大学の三枝令子特任教授、文教大学の遠藤織枝元教授に心より感謝の意を表します。

また、修士課程から、日本国際交流基金、中国国家留学基金委と日本文部科学省、ロータリー米山記念奨学会、筑波大学から多大な経済的な援助をいただきました。中国政府と日本政府および多くの機関の支援がなくては、経済面に不安なく研究に専念することができませんでした。ここに深謝を表します。

最後に、長きにわたってずっと学生のままでいられることを許しいていただき、いつも全力的に私を応援してくれた父の李永植と母の金善愛に感謝します。そして多くの友人、先輩、後輩たちに対し、深い感謝の意を表して謝辞と致します。